

湍ノ上遺跡Ⅱ

—長野県小県郡丸子町湍ノ上遺跡第2・3次発掘調査報告書—

1994.3

長野県上田建設事務所
小県郡丸子町教育委員会

湊ノ上遺跡Ⅱ

—長野県小県郡丸子町湊ノ上遺跡第2・3次発掘調査報告書—

序

丸子町腰越地区は依田川の上流域にあたり、丸子町用水路の取水口があるなど古くから重要な位置を占めております。このたび同地区で県単道路改良工事（主）上田茅野線腰越が実施されることになりました。

この事業により、古くから「腰越の土偶」出土地として知られている溯ノ上遺跡の保護が必要になり、関係機関と協議した結果、発掘調査をして記録保存することになりました。

発掘調査は、事業主体である長野県上田建設事務所から委託を受けた丸子町教育委員会が、新たに丸子町腰越地区埋蔵文化財発掘調査団を組織して実施しました。

調査の結果、縄文時代の住居址や土坑と多量の土器や石器が発見されました。また、「腰越の土偶」と時期が近い弥生土器や土器棺墓も発見され、丸子町の歴史解明のための貴重な成果を上げることができました。

発掘調査は春先の寒い時期から真夏の酷暑のもとで行われ、調査にあられた調査員及び作業員の皆様方の苦勞には、並々ならないものがありました。心から感謝申し上げます。

また調査にあたっては、腰越区、長野県上田建設事務所の各機関、並びに地権者下村敏・下村恭両氏、ほか多くの学識経験者の皆様から御指導・御協力をいただきこの事業を遂行することができました。

発掘調査報告書を刊行するにあたり、厚くお礼を申し上げます。

平成6年3月

丸子町教育委員会教育長 田 村 虎 雄

例 言

- 1 本書は、県単道路改良工事（主）上田茅野線 腰越 に先立ち実施された渕ノ上遺跡の発掘調査報告書である。平成4年度分を第二次調査、5年度分を第三次調査とした。
- 2 本遺跡の立地については、平成4年3月刊行『渕ノ上遺跡』第2章1を参照されたい。
- 3 本書の作成作業は下記の者により分担した。

出土遺物の整理（滝沢敬一・千葉剛成・工藤府子）、土器拓本図の作成（工藤）、遺物実測図の作成（工藤・綿田弘実・賛田 明）、挿図・図版の作成（滝沢・工藤・竹内一徳・綿田・賛田）

本文の執筆 滝沢敬一 [第1章・2章・3章]

賛田 明 [第4章1(3)第1～4群土器]

綿田弘実 [第4章1(1)・(2)・(3)第5～9群土器・2・3 第5章]

- 4 挿図の縮尺はそれぞれに明示してある。
- 5 石器・石製品写真図版の縮尺は、およそ次のとおりである。
石鏃1：3、石錐1：3、石匙1：3、スクレイパー・使用痕のある剥片1：3、原石・石核1：3、打製石斧1：4.5、磨製石斧1：4、磨石・凹石1：4.5、石皿1：5、石棒1：6
- 6 挿図中のスクリーン・トーンは、各挿図に表示意図を記した。
- 7 本調査に関する出土品・図面・写真等の資料は、すべて丸子町教育委員会が保管している。
- 8 発掘調査団の構成

[調査団]

参 与	五十嵐幹雄・小林重義・関孝一・塩入秀敏・竹内一徳・綿田弘実
団 長	滝沢敬一
特別調査員	郷道哲章・千葉剛成・賛田 明
調 査 員	井上良子・川村寿一・北沢けさ子・清水啓道・塚越安廣・都築 誠・宮沢博家
作 業 員	青木信仁・石平裕一・乾 保男・今井やす子・内堀武人・金子幸雄・川合 進・北沢 聖・北沢安子・北沢れい子・小島雅弘・小山和朗・斎藤 学・清 水達也・白井喜作・杉原賢治・白井喜作・高野智英・高山匡樹・滝沢寛之・ 滝沢富士太郎・滝沢幹夫・土屋和子・中村徳八郎・長張常光・堀内英一郎・ 藤田 香・三崎信孝・翠川和昭・武捨栄徳・村山恵美・吉池元子
整理作業員	川村ふじ・清水ふくい・白井ちか・中村可寿江・西沢滨江・堀内孝依

[事務局]

事 務 局 長	三好健三
事 務 局 員	滝沢昌樹・工藤府子
監 査	堀内憲明

目 次

序

例言

目次

第1章	発掘調査の経緯	1
第2章	遺 跡	1
第3章	遺 構	2
1	住居址	2
2	土 坑	4
3	埋 甕	4
4	土器棺墓	4
第4章	遺 物	8
1	縄文土器	8
(1)	縄文土器の概観	8
(2)	遺構出土土器	9
	住居址出土土器 土坑出土土器 埋甕 土器棺	
(3)	遺構外出土土器	14
	第1群土器(縄文早期) 第2群土器(縄文前期中葉) 第3群土器(縄文前期後半～末葉)	
	第4群土器(縄文中期初頭) 第5群土器(縄文中期中葉) 第6群土器(縄文中期後葉) 第7群土器(縄文後期) 第8群(縄文晩期) 第9群(弥生前期後半～中期初頭)	
2	土製品	20
3	石 器	21
第5章	むすび	23
	参考文献	24

図版目次

第1図	全体遺構分布図(第1・2・3次調査)(1:500)	第8図	遺構実測図(6)(B100、C91、E10・20・30、F1・11・21)(1:40)
第2図	遺構分布図(第2・3次調査)(1:200)	第9図	遺構実測図(7)(D22～24・32～34・42～44・52～54)(1:40)
第3図	遺構実測図(1)(A74・75・84・85・94・95、D4・5周辺)(1:40)	第10図	遺構実測図(8)(D15～17・25～27・35～37・45～47周辺)(1:40)
第4図	遺構実測図(2)(A77・78・87・88・97・98、D7・8周辺)(1:40)	第11図	遺構実測図(9)(1号住居址他)(1:40)
第5図	遺構実測図(3)(B61～63・71～73・81～83・91～93)(1:40)	第12図	遺構実測図(10)(E3～6・13～16・23～26)(1:40)
第6図	遺構実測図(4)(B65～68・75～78周辺)(1:40)	第13図	遺構実測図(11)(D62～64・74・84・94周辺、土器棺墓)(1:40、1:20)
第7図	遺構実測図(5)(2号住居址)(1:40)		

- 第14図 遺構実測図(12)(D55~58・65~68・75~78周辺)(1:40)
- 第15図 埋甕断面実測図(1)(1~21号)(1:20)
- 第16図 埋甕断面実測図(2)(23~45号)(1:20)
- 第17図 縄文土器実測図(1)(1~3・5・8・11号 住居址)(1:6)
- 第18図 縄文土器実測図(2)(4・7号住居址)(1:6)
- 第19図 縄文土器実測図(3)(9・12号 住居址、D46土坑)(1:6)
- 第20図 縄文土器実測図(4)(12号住居址、D19・22・36土坑)(1:6)
- 第21図 縄文土器実測図(5)(1~9号埋甕)(1:6)
- 第22図 縄文土器実測図(6)(10~17号埋甕)(1:6)
- 第23図 縄文土器実測図(7)(18~32号埋甕)(1:6)
- 第24図 縄文土器実測図(8)(33~44号埋甕)(1:6)
- 第25図 縄文土器実測図(9)(1:6)
- 第26図 縄文土器実測図(10)(1:6)
- 第27図 縄文土器実測図(11)(2・6・9号 住居址、41・45埋甕)(1:6)
- 第28図 縄文土器実測図(含 弥生土器)(12)(D66土坑、土器棺墓)(1:6)
- 第29図 縄文土器拓本図(1)(1:3)
- 第30図 縄文土器拓本図(2)(1:3)
- 第31図 縄文土器拓本図(3)(1:3)
- 第32図 縄文土器拓本図(4)(1:3)
- 第33図 縄文土器拓本図(5)(1:3)
- 第34図 縄文土器拓本図(6)(1:4)
- 第35図 縄文土器拓本図(7)(3号住居址、38号埋甕)(1:4)
- 第36図 縄文土器拓本図(8)(1:4)
- 第37図 縄文土器拓本図(9)(1:4)
- 第38図 縄文土器拓本図(10)(1:4)
- 第39図 縄文土器拓本図(11)(1:4)
- 第40図 縄文土器拓本図(12)(1:4)
- 第41図 縄文土器拓本図(含弥生土器)(13)(1:3)
- 第42図 土製品・ナイフ形石器実測図(1:3、1:1)
- 第43図 大形石器等分布図(1:200)
- 第44図 小形石器分布図(1:200)
- 第45図 黒曜石分布図(1:200)

写真図版

- PL-1 1. 全景(東から空撮)、2. 全景(垂直空撮)
- PL-2 1. A地区空撮、2. D地区空撮
- PL-3 1. 1号住居址空撮、2. 2号住居址空撮
- PL-4 1. 遺跡全景、2. 3号住居址、3. 4号住居址、4. 9号住居址
- PL-5 1. 1号住居址炉、2. 同張出部、3. 2号住居址主体部、4. 土器棺墓
- PL-6 1. 2号住居址炉、2. 同埋甕、3. 6号住居址炉、4. 7号住居址炉、5. 8号住居址炉、6. 10号住居址炉、7. 11号住居址炉、8. 12号住居址炉
- PL-7 1. 2号埋甕、2. 同断面、3. 3・4・5号埋甕、4. 3号埋甕断面、5. 5号埋甕、6. 同断面、7. 6・7号埋甕、8. 同断面
- PL-8 1. 10・11号埋甕、2. 同断面、3. 13号埋甕、4. 14号埋甕、5. 15号埋甕、6. 18号埋甕、7. 17号埋甕、8. 同断面
- PL-9 1. 19号埋甕断面、2. 20号埋甕、3. 23号埋甕断面、4. 27号埋甕、5. 28号埋甕、6. 29号埋甕、7. 30・31号埋甕、8. 32号埋甕
- PL-10 1. 34号埋甕、2. 35~37号埋甕、3. 38号埋甕、4. 39・40号埋甕、5. 42号埋甕、6. 43・44号埋甕、7. E86釣手土器出土状態、8. 調査区中央部
- PL-11 縄文土器(1)
- PL-12 縄文土器(2)
- PL-13 縄文土器(3)
- PL-14 縄文土器(4)
- PL-15 縄文土器(5)
- PL-16 縄文土器(6)
- PL-17 1. 石鏃(1)、2. 同(2)、3. 石錐、4. 磨製石斧、大形刃器、礫器
- PL-18 5. 石匙、その他、6. スクレーパー、7. 打製石斧(1)、8. 同(2)
- PL-19 9. 黒曜石(1)、10. 同(2)、11. 同(3)、12. 同(4)
- PL-20 13. 磨石・凹石類(1)、14. 同(2)、15. 同(3)、16. 同(4)
- PL-21 17. 磨石・凹石類(5)、18. 同(6)、19. 同(7)、20. 同(8)
- PL-22 21. 磨石・凹石類(9)、22. 同(10)、23. 同(11)、24. 同(12)
- PL-23 25. 石皿(1)、26. 同(2)、27. 同(3)、28. 同(4)
- PL-24 29. 多孔石、30. 砥石、31. 石棒、32. 土製品・釣手土器

第1章 発掘調査の経過

長野県小県郡丸子町大字腰越字部屋田・渕ノ上地籍は、深山沢川の造る扇状地の扇端部に位置し、依田川が形成した河岸段丘上にある。この地籍は、明治43年に弥生時代の容器形土偶が発見された渕ノ上遺跡が所在する所として古くから研究者の注目を集めてきた。この地区で平成4～5年度にかけて県単道路改良工事（主）上田茅野線 腰越が実施されることとなり、平成5年1月11日、事業主体である長野県上田建設事務所、丸子町教育委員会の2者により工事区域内の埋蔵文化財の保護協議がなされた。その結果、渕ノ上遺跡について事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

調査費は事業主体である上田建設事務所が全額負担し、調査は、上田建設事務所の委託を受けた丸子町教育委員会が発掘調査団を組織して実施することとなった。

発掘調査は事業主体の工事計画や調査員・作業員の参集できる時期を考慮し、3月14日から8月1日にかけて実施した。また、平成5年2月10日には事業主体と町教育委員会、町教育委員会と発掘調査団の委託契約を締結し、文化財保護法第98条の2第1項の規定による通知を行った。

第2章 遺 跡

今回の発掘調査区は、製材工場が建てられていた跡地へ東西40m、南北44mの範囲で設定し、基準杭（A100）を設けた（第2図）。基準杭から磁北を通る軸とそれに直交する軸を基準に1辺20mの大グリッド10区画を設定した。大グリッドの呼称は西から東へA～C、D～Fとし、さらにこの中を2m四方の小グリッド100区画に区分し、西から東へ1～100の小グリッド番号を付した。

なお、製材工場の取り壊しが一遍に終わらなかったため、工場の取り壊しに伴って調査区を拡張していった経過がある。

調査はまず南北方向に3本と東西方向に1本のトレンチを掘削して遺跡の状態を確認した。その結果、工場の支柱が建っていた場所以外は、遺構の遺存状態が良好であることが判明した。

A・B・D・E区に遺構が集中し、これらの地区に調査の主力を置くことにした。この結果実際に掘り下げを行った面積は、約756㎡となった。

遺物の出土地点等については、例えば「A75」のように、「大グリッド名・小グリッド番号」と注記することにし、遺物は遺構に伴うもの以外は小グリッド単位で収納し、遺構等の測量は平板測量と遣り方測量によった。ベンチマークは県道拡幅改良事業の測点（標高555.51m）を用いた。

全調査区のうち土層断面を記録したのは、1・2・3・4号トレンチである。I層は客土で、

拳大の礫を多く含む。Ⅱ層は遺物包含層で、拳大の礫を多く含む。黒褐色を呈し、縄文時代中期の埋甕や石囲炉が検出されている。Ⅲ層はローム層で、黄褐色を呈する。縄文時代の地山面である。本調査区は依田川に面した扇状地末端部にあたるため、全体が北に傾斜している。

第3章 遺 構

1 住居址

1号住居址（第11図、PL-3・5）

D20・21・30・29・40に位置する。N-30-Eに主軸をとる柄鏡形敷石住居址である。Ⅱ層の除去作業中、敷石住居址の主体部と考えられる敷石が認められたため精査を試みたところ、石囲炉が検出された。主体部・張り出し部を確認する。炉を精査し記録後、張り出し部の礫を取り外しピット等の精査を行った。埋土は黒褐色粘質土である。壁面の立ち上がりは確認できなかった。床面は主体部、張り出し部とも敷石がみられる。

敷石は川原石が主体を占めるが、鉄平石も見られる。柱穴は確認できなかった。炉は主体部の中央やや南西よりで発見された。径65cm、深さ30cmの方形石囲炉である。主軸長5.5m、主体部の直径は3.0mを測る。張り出し部に「ハ」の字状に2個の立石が置かれていた。土器は非常に少なく、敷石直上から1点出土した。張り出し部が低く、石囲み状である。4枚石囲み炉の形態と出土土器から縄文後期初頭に属すると思われる。

2号住居址（第7図、PL-3・5・6）

B75・76・77・85・86・87・95・96・97、E5・6に位置する。住居の規模と形態は、主軸をほぼ北にとる柄鏡形敷石住居址である。主軸長6.0m、主体部の直径4.0mである。遺構の状態を確認するために試掘トレンチを開けたところ、敷石住居址の主体部と考えられる石敷が認められたため慎重にⅡ層を除去した。埋土は黒褐色粘質土で、内部に礫のまとまりが検出された。主体部の礫を除去し、主体部・張り出し部を確認する。炉および土坑を精査し記録後、張り出し部の礫を取り外し、ピットなどの精査を行った。壁面の立ち上がりは主体部の北側で検出された。壁高は10cmである。床面は、主体部、張り出し部とも全面に敷石が敷かれていたと考えられるが、主体部は炉の北側から東側にかけて、張り出し部は主体部と接する部分の敷石が確認できなかった。また、主体部の四隅と北・東壁に立石が立てられていた。柱穴に関係するとみられるピットはまったく認められなかった。炉は主体部の中央やや南よりで発見された。長径83cm、短径70cm、深さ31cmの長方形の石囲炉である。炉内から深鉢形土器の破片が出土し、焼土が確認された。掘り込みが確認されたのは、北東の隅と、西側の一部である。張り出し部が一段高く、基部に埋甕がある。4枚石囲炉の形態と出土土器から縄文中期末に属すると思われる。このほか土器片9、石棒3、磨石1、石皿1が出土した。

3号住居址（第3図、PL-4）

A94・95・96、D4・5に位置する。Ⅱ層上面で遺構確認のためにあけた試掘トレンチによって本址を確認した。埋土は炭化物が混在する黒褐色土である。掘り込みが確認されたのは、南壁と東壁の一部である。住居址の長さは、東西方向で3.4mを測る。本址は、北側に傾斜した斜面を利用して建てられている。北側、西側の壁は不明である。ピットは2箇所検出されたが柱穴と思われるものはなかった。本此址の時期は出土土器から縄文前期末葉に属すると思われる。

4号住居址（第12図、PL-4）

B94・95・96、E4・5・6・14・15・16に位置する。Ⅱ層上面でグリッドを掘り下げたところ遺物が密集する箇所がみられたため、周囲を掘り下げて本址を確認した。埋土は黒褐色粘質土である。壁面の立ち上がりは最高で25cmを測る。北側と東側の壁の一部は確認できなかった。床面は黄褐色粘質土である。4基の土坑が検出されたが、柱穴と思われるものはなかった。本址の長さは東西方向で4.6mを測る。住居の規模は、径4.6mの円形の竪穴住居址になると思われる。時期は、出土土器から縄文中期後葉に属すると思われる。

5号住居址（第3図）

A75・76に位置する。焼土と炉体土器が出土しているだけで、平面プランは全く確認できなかった。本址の時期は出土した土器から縄文中期初頭に属すると思われる。

6号住居址（第3図、PL-6）

A75・76に位置する。石囲炉のみ検出され、全体のプランは確認できなかった。石囲炉は4枚石囲み炉の形態を呈する。出土土器から縄文中期後葉に属すると思われる。

7号住居址（第3図、PL-6）

A84・94に位置する。石囲炉のみ検出され、全体のプランは確認できなかった。石囲炉は4枚石囲み炉の形態を呈する。出土した土器から縄文中期後葉に属すると思われる。

8号住居址（第5図、PL-6）

B63・73に位置する。石囲炉のみ検出され、全体のプランは確認できなかった。石囲炉は、壊れており東と南側の石が検出された。出土した土器から縄文中期後葉に属すると思われる。

9号住居址（第6図、PL-4）

B57・65・66・67・76・77に位置する。北側の壁が切られているが、長軸は3.9mを測り、不整楕円形になると思われる。中央部に焼土と石囲炉の残骸と思われる石が散乱している。2号住居址の北側に隣接し、敷石に使われたと思われる平石が検出された。本址の時期は、出土した土器から縄文中期後葉に属すると思われる。

10号住居址（第6図、PL-6）

B68に位置する。石囲炉のみが検出され、全体のプランは確認できなかった。石囲炉は壊れており、全体形は確認できなかった。また、焼土が検出された。出土した土器から縄文中期後葉に属すると思われる。

11号住居址（第10図、PL-6）

D45・46・55・56グリッドに位置する。石囲炉のみが検出され、全体のプランは確認できなかった。石囲炉は、長軸52cm、短軸50cmを測る。出土した土器から縄文中期末葉に属すると思われる。

12号住居址（第10図、PL-6）

D15・25グリッドに位置する。石囲炉は確認できなかった。80cmの石を「ハ」の字状に配置し、鉄平石と平石を配する。出土した土器から縄文中期後葉に属すると思われる。

2 土 坑（第2～14図）

出土した土坑は80基を数える。個々の土坑の詳細については第1表に記した。

分布範囲は住居址の分布と重なって調査区全体に及ぶが、B区55以東とE区12以南では確認されていない。

大部分は平面形が円形に近い。規模は直径1.5m～2m強の大形（1・12・19・21・24・26・28・29・32・33・55・57・75号）と、それ以下がある。

3 埋 甕（第15・16・21～24・27・35図、PL-7～10）

埋甕とした遺構は45基を数える。個々の埋甕の詳細については第2表に記した。いずれも縄文中期後葉から末葉の第6群土器に属す。

確実に住居址に帰属すると考えられる埋設土器以外を本項で扱ったが、住居址の過半数が炉址のみでありプランが把握できなかったことと、分布範囲が住居址の分布と重なって調査区全体に及ぶため、すべてを屋外埋甕とすることはできない。また掘り込み面を特定できなかったため、逆位埋甕と住居床面倒置の伏甕との区別ができなかった。

単体の他、2個が隣接する①1・2号、②6・7号、③10・11号、④30・31号、⑤39・40号、⑥43・44号など、あるいは3個の⑦3・4・5号、⑧20・21・22号、⑨35・36・37号がある。これらは①・③が逆位、⑤・⑦・⑧が正位と逆位、その他が正位である。大部分が異系統土器の組み合わせであることが注意される。

4 土器棺墓（第13・14・28図、PL-5）

D68に位置する。Ⅲ層上面で検出された。南西―北東に長軸をとる90×60cmの楕円形土坑の中に口を南西に向けた壺形土器が横倒しの状態で埋納されていた。土坑の深さは約20cmを測る。土器は弥生前期後半から中期初頭の第9群土器に属する条痕文系の大型壺形土器である。推定器高70cm強、胴部最大径約50cmを測ることから、土器より一回り大きな土坑を掘り込んだものと考えられる。

第 1 表 土坑一覧表

番号	区分	位 置	寸 法	形 状	遺構・遺物
6	遺物あり	A97	直径60	ほぼ円形	第 4 図、遺物は 8 号埋甕
D19	〃	D 9・10・19・20	100×80	平面楕円形、断面鍋底状	第11図、第20図33、PL-12
D22	〃	D22・23	短軸130	楕円形と思われ、断面鍋底状	第 9 図、第20図32
D36	〃	D26・36	100×80×13	平面楕円形、断面鍋底状	第10図、第20図34、PL-12
44	〃	D36	100×70	平面楕円形、断面レンズ状	第10図、底部から第 6 群土器
46	〃	D37	90×80	平面楕円形、断面鍋底状	〃、上部から石皿
D46	〃	D36・46	100×60×26	平面楕円形、断面鍋底状	〃、第19図30、PL-12
1	遺物なし	A93	東西150	断面鍋底状、西壁に立石	第 3 図
2	〃	A84	不明	東壁一部のみ	〃
3	〃	A85	90×85×44	ほぼ円形、断面鍋底状	〃
4	〃	A96	70×50	平面楕円形、断面鍋底状	〃
5	〃	A86・87・96・97	直径110	ほぼ円形、断面鍋底状	第 4 図
7	〃	A97	直径60	円形、西側 8 号土坑により掘削 断面鍋底状	〃
8	〃	A97	直径50	円形、7・9 号土坑を切って掘り 込み、断面鍋底状	〃
9	〃	A97	直径50	7・9 号土坑により切られている ため全体不明、断面鍋底状	〃
10	〃	A97	直径40	9 号土坑により切られているため 全体不明、断面鍋底状	〃
11	〃	A88	150×70	平面楕円形、断面鍋底状	〃
12	〃	A67・77	直径160	円形、断面鍋底状	〃
13	〃	A69・79	60×50	平面楕円形、断面鍋底状	〃
14	〃	A79・80・89・90	110×90	平面楕円形、断面鍋底状 壁面に焼土	
15	〃	A98・99	直径80	ほぼ円形、断面鍋底状	第 4 図
16	〃	A98・99	直径110	〃	第 5 図
17	〃	B82	110×80	平面楕円形、断面たらい状 底部中央から焼土	〃
18	〃	B71・72	90×80	平面楕円形、断面鍋底状	〃
19	〃	B62	直径150	円形、断面鍋底状	〃
20	〃	B52	直径100	〃	〃
21	〃	B53・54・63・64	直径150	平面不整円形、断面鍋底状 北壁を18号土坑が切る	〃
22	〃	B53・54	150×90	平面楕円形、断面鍋底状 17号土坑を切って掘り込み	
23	〃	B64	80×70	平面楕円形、断面鍋底状	
24	〃	B74	150×140	平面不整楕円形、断面鍋底状	
25	〃	D 6	70×50	〃	第 3 図
26	〃	D 6・7・16・17	160×140	平面楕円形、断面鍋底状 内部に80×60の土坑掘り込み	第 4・10図
27		B94・95E 4・6	直径120	4 号住居内	第12図
28	〃	E13・14・23・24	250×200	平面楕円形、断面鍋底状	〃
29	〃	E16・17・26・27	250×210	〃	〃
30	〃	E19・29	120×100	平面楕円形、断面たらい状	
31	〃	C91・F 1	直径60	平面円形、断面鍋底状	第 8 図
32	〃	D22	135×110	平面楕円形、断面鍋底状	第 9 図
33	〃	D22・23	165×150	平面楕円形	〃
34	〃	E 6	直径80	4 号住居内	第12図

番号	区分	位 置	寸 法	形 状	遺構・遺物
35	遺物なし	E 6	直径60	4号住居内	第12図
36	〃	〃	直径30	4号住居隣接	〃
37	〃	D33	直径50	平面不整楕円形、断面鍋底状	第9図
38	〃	D23	40×30	平面不整楕円形、断面鍋底状	〃
39	〃	D23	60×40	平面楕円形、断面鍋底状	〃
40	〃	D23	直径40	平面円形、断面鍋底状	〃
41	〃	D24	直径40	〃	
42	〃	D26	90×60	平面楕円形、断面鍋底状	第10図
43	〃	D17・27	130×90	〃	〃
45	〃	E20・30F11・21	直径30	平面円形、断面鍋底状	第8図
47	〃	D27・28	70×50	平面楕円形、断面鍋底状	
48	〃	D38	60×40	〃	
49	〃	D38	70×60	〃	
50	〃	D23・33	160×90	〃	第9図
51	〃	D49	60×50	〃	
52	〃	D50	70×50	〃	
53	〃	D50・E41	直径100	平面円形、断面鍋底状	
54	〃	D50・60	150×130	平面不整楕円形、断面鍋底状	
55	〃	D32	150×130	平面楕円形、断面鍋底状	第9図
56	〃	D42	70×50	〃	〃
57	〃	D43・44・53・54	200×150	平面不整楕円形、断面たらい状	〃
58	〃	D45・55	60×50	平面楕円形、断面鍋底状	
59	〃	D56	60×50	〃	第14図
60	〃	D55	80×50	〃	〃
61	〃	D56・66	100×70	〃	〃
62	〃	D57	70×50	〃	〃
63	〃	D57	直径60	平面円形、断面鍋底状	〃
64	〃	D67	70×50	平面楕円形、断面鍋底状	〃
65	〃	D52	長軸120	形状不明、西側調査区外	第9図
66	〃	D53	直径60	平面円形、断面鍋底状	〃
67	〃	D62	長軸120	形状不明、西側調査区外	第13図
68	〃	D73	70×60	平面楕円形、断面鍋底状	〃
69	〃	D63・64	130×100	〃	〃
70	〃	D76	100×70	平面不整楕円形、断面鍋底状	第14図
71	〃	D76	100×80	平面楕円形、断面鍋底状	〃
72	〃	D76・77	90×60	〃	〃
73	〃	D68	110×80	平面楕円形、断面レンズ状	〃
74	〃	D68	80×40	平面楕円形、断面鍋底状	〃
75	〃	D70・E61	200×100	平面不整楕円形、断面鍋底状	
76	〃	D74・75	直径100	平面不整円形、断面鍋底状	第13・14図
77	〃	D84・94	120×90	平面楕円形、断面鍋底状	第13図
78	〃	D95	110×90	平面楕円形、断面鍋底状	〃
79	〃	D95・G 5	140×120	平面不整円形、断面鍋底状	〃
80	〃	D96・G 6	160×90	平面不整楕円形、断面鍋底状	
81	〃	D57	直径80	〃	第14図

第2表 埋甕一覧表 「遺構」は平面図と遺構写真、「土器」は実測図と写真

番号	区分	位置	土層	形状	遺構	土器
1	逆位	A78	Ⅱ層上面	2号埋甕の北側に隣接、掘り込み不明	第4図	第21図35、PL-13
2	〃	A78・88	〃	1号埋甕に隣接、掘り込み不明	〃、PL-7	第21図36、PL-13
3	〃	A94・D4	〃	掘り込み不明	第3図、〃	第21図37、PL-13
4	正位	D4	〃	3号住居に隣接、掘り込み不明	〃、〃	第21図38、PL-13
5	逆位	D4	〃	上部に石を含む、掘り込み不明	〃、〃	第21図39、PL-13
6	正位	D5	Ⅲ層上面	掘り込み不明	〃、〃	第21図40、PL-13
7	逆位	〃	〃	〃	〃、〃	第21図41、PL-13
8	〃	A97	〃	〃	第4図	第21図42
9	正位	〃	Ⅱ層上面	〃	〃	第21図43、PL-13
10	逆位	A98	〃	11号と並列、掘り込み不明	〃、PL-8	第22図44
11	〃	〃	〃	10号と並列、掘り込み不明	〃、〃	第22図45
12	正位	D6	〃	底部のみ出土、掘り込み不明	第3図	第22図46
13	〃	D7	Ⅲ層上面	掘り込み不明	第4図、PL-8	第22図47、PL-14
14	〃	B72	〃	〃	第5図、〃	第22図48
15	〃	B73	〃	〃	〃、〃	第22図49、PL-14
16	〃	B68	〃	底部出土、掘り込み不明	第6図	第22図50、PL-14
17	〃	B68	Ⅱ層上面	掘り込み不明	〃、PL-8	第22図51、PL-14
18	〃	B78	〃	〃	〃、〃	第23図52、PL-14
19	〃	〃	Ⅲ層上面	〃	〃、〃	第23図53、PL-14
20	〃	B92	〃	〃	第5図、〃	第23図54、PL-14
21	逆位	〃	Ⅱ層上面	〃	〃	第23図55、PL-14
22	正位	〃	Ⅲ層上面	〃	〃	第23図56
23	〃	B100	Ⅱ層上面	〃	第8図、PL-9	第23図57
24	逆位	C81	〃	〃	〃	第23図58、PL-16
25		D3			第10図	
26		D4			〃	
27	〃	D22	〃	〃	第9図、PL-9	第23図59、PL-14
28	〃	D23	〃	〃	〃、〃	第23図60、PL-14
29	正位	〃	Ⅲ層上面	〃	〃、〃	第23図61
30	〃	D43	〃	31号と並列、掘り込み不明	〃、〃	第23図62、PL-15
31	〃	〃	〃	30号と並列、掘り込み不明	〃、〃	第23図63、PL-15
32	逆位	D62	Ⅱ層上面	掘り込み不明	第13図、〃	第23図64、PL-14
33	正位	D35	Ⅲ層上面	〃	第10図	第24図65、PL-15
34	逆位	D47	〃	〃	〃、PL-10	第24図66、PL-15
35	正位	D29	〃	37号と並列、掘り込み不明	第11図、〃	第24図67
36		D29			〃、〃	
37	〃	〃	〃	35号と並列、掘り込み不明	〃、〃	第24図68
38	〃	D28	〃	掘り込み不明	〃	第35図350～352
39	〃	E12	〃	40号と並列、掘り込み不明	第12図、〃	第24図69
40	逆位	E13	〃	39号と並列、掘り込み不明 上部に平石を蓋状に配す	〃	第24図70、PL-15
41	正位	〃	〃	掘り込み不明		
42	逆位	E23	〃	〃	PL-10	第24図71、PL-16
43	正位	F21	〃	44号と並列、掘り込み不明	第8図、〃	第24図72
44	〃	〃	〃	43号と並列、掘り込み不明	〃、〃	第24図73、PL-16
45	〃	G7	〃	掘り込み不明		

第4章 遺物

1 縄文土器

(1) 縄文土器の概観

今回の調査による出土土器は、未接合の状態では収納用コンテナ300箱に上る。時期は縄文時代早期から晩期、弥生時代中期初頭に及んでいる。およそ90%以上を縄文中期が占め、前期がこれに次ぎ、その他は少量である。縄文早期・後期は特に少ない。縄文中期のなかでは、加曽利EⅢ式前後の後葉段階は出土量が断然多く、初頭段階がややまとまり、中葉段階は少ない。

本章では便宜的に弥生土器も含めて次のように分類する。多量に出土した中期後葉については類別を適宜細別段階や型式比定して記述する。各類の折衷的な個体が存在すること、唐草文系Ⅳ段階の土器と曾利Ⅴ式土器とが近似することなどから、必ずしも明確に分類できない。報告に当たっては、住居跡、土坑、屋外埋甕の順に遺構出土土器を説明し、遺物包含層出土土器は分類に従い時期を追って資料を説明する。

第1群土器 縄文早期

1類 押型文土器、2類 早期末葉の条痕文土器、3類 石山式土器

第2群土器 縄文前期中葉

1類 有尾式土器、2類 有尾式期の沈線施文土器、3類 黒浜式土器、4類 縄文施文土器、5類 底部

第3群 前期後半～末葉

1類 諸磯a式土器、2類 諸磯b式土器、3類 諸磯c式土器、4類 前期末葉の土器、5類 北白川下層Ⅱ式土器、6類 縄文施文土器

第4群 縄文中期初頭

1類 五領ケ台Ⅰ式土器、2類 五領ケ台Ⅱ式土器、3類 五領ケ台式終末期或いは直後の土器

第5群 縄文中期中葉

1類 勝坂式土器、2類 焼町土器

第6群 縄文中期後葉

1類 唐草文系土器（同Ⅰ～Ⅳ段階）、2類 佐久地方に分布する沈線地文土器（おおむね1類に併行）、3類 曾利系土器（曾利Ⅰ～Ⅴ式併行）、4類 加曽利E式土器（同Ⅰ～Ⅳ式）、5類 圧痕隆帯文土器（同第Ⅰ・Ⅱ群）

第7群 縄文後期

1類 後期前半の土器、2類 後期後半の土器

第8群 縄文晩期

1類 晩期前半の土器、2類 離山段階の土器、3類 水式土器

第9群 弥生前期後半～中期初頭

(2) 遺構出土土器

① 住居址出土土器

1号住居址 (第17図1) 無文深鉢の胴下半部である。比較的小形で器壁は薄手である。敷石住居に伴う土器であるが、この地域では中期末葉なら無文土器はほとんど認められないため、第7群1類に属す可能性がある。

2号住居址 (第17図2・3、第27図97～99) 3は主体部の埋甕である。底部から直線的に開く厚手の胴下半部のみで、単位の多い幅広の縦位沈線間に縄文を充填する。これに伴出した99は平行垂下する微隆起帯で縄文・無文部が区画される。2は敷石下から出土した大形深鉢の胴上半部である。口縁部の横位隆帯に接して無文部で渦巻状の意匠を描くらしい。胴中位の破片は口縁部文様とのつながりが不明であるが、下位に向けて懸垂文が見られる。97・98は炉址内から出土した同一個体で、上下に対向する沈線のU字状文が無文部で描出される。いずれも第6群4類の加曾利EIV式であろう。

3号住居址 (第17図4・5、第35図345～349) 4・5とも第3群4類に属し、筒状の胴部を半截竹管による半隆起線文で縦位区画する深鉢である。4は陰刻による円文列、太い凹線文を交えた渦巻文・三角文を描く。5は口縁部が開き、押圧した粘土紐で無文部の上下を画し、口唇部は突起間に隆帯を貼付する。胴部は上位に渦巻、下位にX字状の意匠を配し、狭い凸面で描出する。345～348は5と同じ口縁部文様である。349は口唇部を刻み、縦位の沈線を充填する。

4号住居址 (第18図11～20) 第6群が多量に出土し、11・12は4類、13～16は3類、17は2類に属す。11・12は口縁部には楕円区画文と入り組んだ渦巻文、胴部は2・3条の沈線で縦位区画する。12は4単位の三角突起をもち、胴部に蛇行沈線を描く。13～16は櫛歯状工具による条線を地文とする。13・14は口縁部に渦巻文と楕円区画文がめぐり、4類と折衷した曾利系土器である。13は沈線で縦位区画し、条線を鱗状に充填し2類の地文と通ずる。16は波頂下に太い沈線で縦位の渦巻文・蕨手文を4単位描き、この間にV字状の意匠を配する。15は口縁部文様がなく、全面に条線をコンパス状に施文するもので、曾利系土器とも言い切れない。17はいわゆる両耳壺である。おそらく4個の把手外面・側面に沈線文を施し、肩部の楕円文と連結した小渦巻文が付随する。把手間にはよく巻いた渦巻文を隆帯で描く。18～20は小形の両耳壺である。いずれも無文の口縁部を隆帯で画し、18・19には小突起がある。胴部文様は18は摩滅して不明、19は縦位区画文、20は縄文である。

5号住居址 (第17図6) 第4群1類に属す胴上部のみの炉体土器である。括れ部を陰刻文帯で区画し4単位の貼付文を配す。ここから結節隆帯が垂下して渦巻文が沿い、余白には三角文な

どを描いて陰刻文で縁取り、細線文を施す。

6号住居址（第27図106・107） 第6群2類に属す深鉢胴部である。沈線文を106は曲線的、107は曲線的な鱗状に施す。

7号住居址（第18図21・22） 21は炉址内から出土した1単位の把手が付く小形壺で、逆U字文を描く。22は両耳壺で、胴部に逆U字文と蕨手文を交互に描く。いずれも第6群4類に属す加曽利EⅢ式土器である。

8号住居址（第17図8～10） 第6群4類の加曽利EⅣ式平行垂下文の深鉢である。いずれも炉址内から出土したが個体は異なる。10は縄文が微隆起帯上に被っている。

9号住居址（第19図23～27、第27図100～102） いずれも第6群で、4類に属す23以外、2類の24・25、3類の26・100～102も口縁部は楕円区画文と結合した渦巻文である。埋甕の23は楕円区画文が大きく、胴部の縦位区画沈線、蛇行沈線とも縄文施文後に描く。大形の25は頸部に狭い無文帯が見られ、胴部の縦位区画は隆帯である。24は口縁部文様が沈線で描かれる。地文は縦位の短沈線であり、佐久地方で一般的ではない。26、同一個体の100～102は4類と折衷した曽利系土器であろう。27は口縁部が幅狭の鉢形土器で、肩部に4類の文様を描く。

10号住居址（第25図81、第26図87・88） 敷石をもつ石囲炉に伴うか明確ではないが、D-15グリッドからは第6群2類の88、4類の81・87が出土した。88は羽状沈線の地文である。81は口縁部に4単位の突起をもつ加曽利EⅢ式で地文は複節縄文、87は口縁部が強く内湾する平行垂下隆帯の同Ⅳ式である。

11号住居址（第17図7） 第6群4類の深鉢胴下半部である。上端が尖る4単位の逆U字状文を描く加曽利EⅣ式である。

12号住居址（第19図28・29、第20図31） 石囲炉に伴う土器は明確ではないが、図示した個体は第6群に属す。28は27同様4類の口縁部文様を肩部にもつ鉢、29は口縁部が屈曲して外反する無文浅鉢である。31は波状口縁を呈し、横帯文を失って太い沈線で縦位区画文と蕨手文を描く4類加曽利EⅢ式である。

② 土坑出土土器

D-19土坑（第20図33） 第6群4類に属す加曽利EⅢ式の大形深鉢である。口縁部文様帯は渦巻文が小さく付随的となり、胴部の縦位区画沈線文は上端が閉じる。地文は複節縄文である。

D-22土坑（第20図32） 第6群2類の深鉢で、口縁部の渦巻文・横帯下端の隆帯上に圧痕を施す。胴部は3～4条の沈線で縦位区画し、羽状沈線地文を施す。内湾する器形は1類の樽形深鉢由来かもしれない。

D-36土坑（第20図34） 第6群1類の樽形深鉢で口唇部内面を蓋受状に作る。口縁部に無文部を残して隆帯の横帯文がめぐり、口縁部の渦巻文を起点として胴部を8単位以上に縦位区画するらしい。この間に上向きの剣先文を伴う大柄渦巻文を描く。地文は一部羽状の斜行沈線である。

D-46土坑（第19図30） 第6群4類の深鉢である。胴部を縦位区画する2本一對の沈線と上端でつながる蛇行沈線を、縄文施文後に描く。

③ 埋甕

すべて第6群に属するため、類別のみ記す。隣接する埋甕どうしはまとめて説明する。

1・2号埋甕（第21図35・36） 1号の35は2類、2号の36は4類である。35は口縁部に6単位の渦巻文がめぐる。渦巻自体が横位隆帯でつながり区画文が目立たない。胴部は隆帯で縦位区画され、羽状沈線を施す。36は口縁上部に4単位配した渦巻文から、左下ヘクランク状に伸びる隆帯が文様帯下端で小渦巻を作る。胴部上端でつながる沈線文が狭い無文部で縦位区画する。これらは加曽利EⅡ式の新しい時期の土器であろう。

3・4・5号埋甕（第21図37～39） 3号の37は縦位に半回転ずつ入念にコンパス施文した蛇行条線文である。4号の38は4類で、楕円区画文と一体化した渦巻文が6単位めぐり、2本一對の低い隆帯が垂下して胴部を区画する。5号の39は4類と折衷した3類である。渦巻文に接して円文を配する。胴部は沈線で縦位区画し、直線的な条線を地文とする。

6・7号埋甕（第21図40・41） 6号の40は4類、7号の41は2類である。40は36と似て口縁部文様帯の上下に渦巻文を配し、下端の隆帯に接して沈線が胴部を縦位区画する。41は口縁部文様帯を有し、縦位区画した胴部はやや不揃いの羽状沈線を施す。

8・9号埋甕（第21図42・43） 8号の42は4類で、40と似た文様構成をとる。9号の43は2類で、1類の樽形深鉢を原型とするらしい。渦巻文から横位連結、縦位懸垂する2本併走の隆帯が胴部を区画し、鱗状沈線を施す。

10・11号埋甕（第22図44・45） 10号の44は5類、11号の45は4類である。44は6単位の圧痕隆帯が口縁部を横走して左端に環を作り、ここから胴部を垂下する。胴中位に垂下隆帯に接して横C字状の隆帯を貼付する。内湾する器形や隆帯の形態から、加曽利EⅢ式並行の圧痕隆帯文土器第Ⅱ群に属すであろう。45は口縁部の横位隆帯から垂下する低い隆帯が胴部を6単位の区画し、全面に縄文を充填する。隆帯の脇はなぞりを施す。加曽利EⅢ式であろう。

12号埋甕（第22図46） 4類の底部で、3条単位の縦位沈線間に縄文を施す。

13号埋甕（第22図47） 1類の唐草文系土器Ⅳ段階か、3類曾利Ⅴ式の新しい段階であろう。胴部を等間隔に縦位区画し、無文部と羽状沈線部を交互に配す。沈線は細く鋭い。

14号埋甕（第22図48） 4類の胴下半部の破片で、縦位沈線間に逆U字状文が見える。加曽利EⅢ式の新しい段階であろうか。

15号埋甕（第22図49） 1類の樽形深鉢を原型とする2類である。口縁部に4単位配したS字状渦巻文から圧痕隆帯が垂下し、これを中心にU字状隆帯で胴部を区画する。羽状沈線を施した後、隆帯間に横位弧状の沈線を3・4段描く。

16・17号埋甕（第22図50・51） 16号の50は隆帯下端をU字状に閉じて更に底部付近まで垂下

する。斜行沈線を施し、1類のⅢ段階または並行期の2類であろう。17号の51は摩滅が著しいが、細い沈線による逆U字状区画内に縦位沈線地文の痕跡が見られる。1類Ⅳ段階または並行期の2・3類であろう。

18・19号埋甕（第23図52・53） 19号の53は1類Ⅲ段階の樽形深鉢で、口唇部は蓋受状を呈する。2本単位の隆帯が要所に小渦巻を描いて口縁部を横走し、沈線で双頭渦巻を描く。胴部の縦位区画内に大柄渦巻文を配す。18号の52は51と同じ時期・系統であろう。太い沈線で逆U字状区画し、羽状沈線を充填する。

20・21・22号埋甕（第23図54～56） 20号の54は4類の加曾利EⅢ式である。波状口縁の波頂部内面を突出させ、渦巻文と楕円区画文がめぐり、頸部を円形刺突列で区画し、口縁部文様帯との間を無文部とする。胴部に幅狭の逆U字状文と蕨手文を描く。21号の55は横位沈線区画以下全面に条線文を密に施す。大部分が縦位の直線状であるが、所々横位曲線や蛇行状に施文する。22号の56は1類のⅣ段階であろう。底部付近で2本併走する縦位隆帯下端が閉じ、区画間に縦位沈線を施す。

23号埋甕（第23図57） 4類の胴下半部破片である。縦位の沈線区画が見え、加曾利EⅢ式の新段階であろう。

24号埋甕（第23図58） 口縁端部に沈線がめぐり、刺突列が沿う。胴部に逆U字状文と蕨手文を描き、区画の内外に斜位刺突を施す。地文を無視すれば口縁部文様帯を消失した加曾利EⅢ式であり、並行期の1類または2類であろう。

27号埋甕（第23図59） 4類のキャリパー形深鉢である。4山波頂部の渦巻文の両側に楕円区画文を配す。54同様頸部を無文として刺突文帯がめぐり、胴部は逆U字状文、蕨手文、区画内に蛇行沈線文を描く。

28号埋甕（第23図60） 4類の小形深鉢で、口縁部に楕円区画文と結合した渦巻文を4単位描く。口縁部の隆帯に沿って沈線がめぐり、一部が渦巻状となる。地文は付加条縄文であろうか。

29号埋甕（第23図61） 4類の深鉢である。輪切り状の胴部破片に沈線区画の縄文部と無文部が見えるが、詳細は不明である。

30・31号埋甕（第23図62・63） 30号の62は口縁部文様帯がなく刺突文帯がめぐり、胴部を蕨手文で縦位区画し蛇行状の条線文を施す。4類に3類の地文を施した折衷型であろうか。31号の63は2類である。口縁部に4単位の渦巻文がめぐり、下端の隆帯には単位の中に渦巻文がある。胴部は縦位沈線で区画し、この中を十字状に区画し渦巻文と沈線地文で埋める。

32号埋甕（第23図64） 4類の小形深鉢であるが、口縁部には凹点を施す10数単位のJ字状渦巻文が描かれ、区画文を伴わない。胴部は幅狭の逆U字状文で縦位区画する。

33・34号埋甕（第24図65・66） 33号の65は1類の樽形深鉢である。胴部にはJ字状の大柄な渦巻文を4単位描き、端部は上向きの剣先文である。地文に条線文を施す。34号の66は4類のキャリパー形深鉢で、40同様口縁部に渦巻文を上下に配す。縦位区画の間は縄文施文後に蛇行沈線文

を描く。

35・37号埋甕（第24図67・68） 35号の67は口縁部に狭い無文部を沈線で区画し、胴部は2・3条単位の沈線で縦位区画する。摩滅のため縄文は一部しか観察できないが、口縁部直下は方向が異なるらしい。4類加曽利EⅢ式の新しい段階であろう。37号の68は3類の両耳壺で、口縁部を画す隆帯に把手が付き、ここから縦位区画する。胴部には細めの沈線でよく巻き込んだ渦卷文を描き、縦横方向に地文を施す。

38号埋甕（第35図350～352） 1類Ⅲ段階の樽形深鉢であろう。取上げ後接合できず、破片の一部を図示した。350・351は口縁部付近の破片と思われ、小渦卷文と交互刺突文帯である。352は胴下部で、大柄渦卷文の下端が閉じている。

39・40号埋甕（第24図69・70） 39号の69は4類で、胴部の縦位区画内には縄文施文後蛇行沈線文を描く。70は5類の圧痕隆帯文土器第Ⅰ群である。外反気味の口縁波頂部に上向きの渦卷文を4単位配し、隆帯が右へめぐって隣の単位から折れて垂下し、胴中位で下端が渦卷となる。渦卷文を除き隆帯に圧痕を施す。縄文は横位多段に間隔施文する。

41号埋甕（第27図104） 4類加曽利EⅢ式またはⅣ式の深鉢胴下部の破片である。底部まで縄文が施文される。

42号埋甕（第24図71） 4類である。3山波頂部と単位の間中に楕円区画文と連結した渦卷文を配す、36・40・66と似た口縁部文様である。摩滅して地文は見えないが、縄文施文されていた。

43・44号埋甕（第24図72・73） 43号の72は1類の樽形深鉢を原型とする2類である。2本単位の隆帯で胴部を縦位区画し要所に渦卷文を配す。区画間に横位弧状沈線を描き、地文には縦位沈線を充填する。44号の73はくの字状に屈曲する鉢形土器である。肩部に圧痕を施す隆帯で横帯区画文を描き、中間に蛇行沈線文、地文に縄文を施す。文様帯以外は無文である。1～4類に伴い、肩部は沈線地文が一般的である。

45号埋甕（第27図103） 深鉢胴下部の破片である。3本単位の縦位隆帯で区画し、摩滅しているが細かい綾杉状沈線を地文とする。1類であろう。

④ 土器棺（第28図119）

第9群に属する在地的な大型壺形土器である。土坑内に横倒しに埋納され、ほぼ全破片がそろっていたが、復原できなかった。図は接合できた部分破片から法量を算出した推定復原図である。口径、底径は誤差が少ないが、約74cmの器高は誤差があろう。胴中位よりやや上に最大径があり、丸みをもつ肩上部に稜を作って長い頸部が立ち上がる。肥厚する口縁部に縄文を施し、肩部に波状沈線と平行沈線を2段描く。胴部に半截竹管が原体と推定される条痕文を施し、文様帯付近は横位に近く、胴下部は斜位、底部は縦位である。

(3) 遺構外出土土器（第25図～第41図）

第1群土器（第29図120～129） 縄文早期の土器を本群とする。

1類（120～124） 押型文を本類とする。120～122は山形文が、123は楕円文が施される。120は口縁部で、口端部下に横方向へ施文した後、縦方向へ密接した山形文を施文する。121は、鋭角の山形文が横位施文される。122は鋭角で凸部の幅が広い山形文を縦位施文する。123は縦位施文であるが、無文部が看取できる。本類は122を除いて細久保式或いは細久保式段階に位置付けられよう。

2類（124～128） 内面に条痕が施される早期末葉の土器を本類とする。124は他より古い茅山下層式の口縁部で、縄文地文に凹線文が施される。内面に条痕は見えない。125は斜め方向の条痕上に縦位の絡条体が押圧される。126・127は横～斜め方向の条痕が施される。128は撚糸文Lが横位施文される。条痕はすべて絡条体条痕と思われ、内面はいずれも横方向に施される。

3類（129） 石山式を本類とする。図示した1点のみの出土で、薄手の器面に横方向2条の細かい爪形文が施文される。

第2群土器（第29図130～第30図183） 縄文前期中葉の土器を本群とする。

1類（130～143） 有尾式を本類とする。櫛歯状工具による列点状刺突文が施文される土器（130～143）と、爪形文が施文される土器（144～152）がある。

130は口縁部に沿って4条の列点状刺突文を施文する。131・132は口端部下の文様帯へ縦位の列点状刺突文を施し、その下位へ菱形文を描くと思われる。櫛歯状工具の単位は131が4～5本、132は7～8本。133・134・138・139は、浅い沈線に沿って列点状刺突文が刺突される。134は波状口縁で、口端部下の文様帯に横位刺突を数条施しその下方へ、138は2条の刺突で区画された上方へそれぞれ菱形文を描くと思われる。139は138と同一個体の可能性が高い。143は頸部～胴上部で、頸部に列点状刺突文が、胴部には縄文RLが施文される。140～142は半截竹管の内側を利用した沈線に沿って列点状刺突文が刺突されており、横方向のものと菱形を構成するものとが見られる。130～143は胎土に繊維を含まないか、殆ど含まない状態である事が共通する。

144～147は同一個体で、沈線上へ器面に対して垂直に爪形文を刺突する。文様構成は3～4条の爪形文で頸部を区画し、口縁部文様帯へ菱形文を描いている。148～152は、押し引きの爪形文で文様が構成される。152は頸部付近で、胴部へは縄文LRを施文する。144～152は、いずれも胎土に繊維が含まれる。

2類（153～156） 沈線が施文される土器を本類とする。153は波状口縁で、縄文地文上へ口端部に沿った2条の平行沈線が施文される。また、波頂部へ突起が貼付される。154・155は平縁で、横方向の平行沈線が数条施される。いずれも胎土には繊維が含まれている。本類は有尾式或いはそれに併行する時期に位置付けられよう。

3類（157・158・183） 黒浜式を本類とし、波状文・コンパス文・肋骨文が施文される。157

は2条の平行沈線間へ、沈線と同一原体で波状文が描かれる。158は頸部で、沈線で区画された口縁部文様帯へコンパス文が描かれ、胴部には縄文LRが施文される。183は底部で、直線的な肋骨文が半截竹管で描かれる。胎土には多くの繊維が含まれる。

4類 (159～180) 縄文が施文される土器を本類とする。159～162は無節縄文で、原体は159がL、160～162はL+Rで羽状を構成する。161は底部付近であろう。162は原体を縦位施文する。163～180は単節縄文で、斜縄文・羽状縄文・菱形構成の羽状縄文が見られる。163・165～167は縄文RLを、164は縄文LRを施文するが、それぞれが破片であるため斜縄文を構成する土器の抽出はできない。168～177は縄文LRとRLによって羽状を構成する。178～180は附加条の縄文であろう。すべて胎土には多くの繊維が含まれる。本類は1～3類に伴う縄文施文土器であろう。

5類 (181・182) 底部を一括した。181は縄文RL及びLRを施文する土器で、底面にも施文がなされている。182はやや上げ底状を呈する。胎土には繊維が含まれ、1～4類の底部破片になろう。

第3群土器 (第25図74・75、第30図184～第33図277) 前期後半～末葉の土器を本群とする。

1類 (74・75・184～204) 諸磯a式を本類とする。74は外反する深鉢上半部に半截竹管1条で縦位区画、数条で横位多段区画し、段ごとに方向を変え矢羽根状に施文する。縦横の交点には円形竹管文を施す。75は胴中位に細かな爪形文列がめぐり、丸みのある胴下半部には櫛歯状工具が原体と思われる横位の条線文を施す。類例の乏しい土器である。74・75は同じグリッドから出土した。184～193は肋骨文が施文され、原体は184～189・193の半截竹管、190～192の櫛歯状工具が使用される。直線的な肋骨文または曲線的な肋骨文が描かれ、185・187～189・191・192には更に円形刺突がなされる。194～196は木の葉文が施文され、194のように併せて円形刺突がなされるものも見られる。197・198は鋸歯状文を施文する。半截竹管を原体とし、口縁部文様帯に数段の鋸歯状文が、胴部には単節縄文が施文される。199は1条の押し引き状平行沈線を口縁部に沿って施文する。201は3条の平行沈線上に細かい爪形文が施文されるが、垂直に近い角度で刺突されることが特徴である。204は単節縄文を地文とし、平行沈線と円形刺突で文様を構成する。小破片のために判然としないが、地文の一部を磨り消している可能性がある。200・202・203は単節縄文を施文する土器で、原体はいずれも縄文LR。斜めの刺突が行われるもの、円形刺突が行われるものがある。

2類 (205～229) 諸磯b式を本類とする。205～219は爪形文で文様を構成する。平行する爪形文間に斜めの短沈線を施すもの、円形刺突を施すもの等がある。220～226は浮線文を施文する土器で、数条の浮線文が横方向に貼付されるが浮線上を斜めに刻むものがある。227～229は集合沈線を施文する土器で、229は横区画中に菱形状の文様を構成する。

3類 (230～254) 諸磯c式を本類とする。230は結節沈線文の土器で、渦巻き状の文様が描かれる。231～254は集合沈線が施される土器で、縦位と横位沈線の組み合わせ・斜位沈線・縦位区

画中に斜位または綾杉状の文様を構成するもの等があり、さらにボタン状貼付文を貼付するものもある。231～233は口縁部で、集合沈線上に口端部から短い棒状の隆帯が貼付される。

4類 (255～269) 縄文前期末葉の土器を本類とする。255～259は集合沈線を施す土器で、渦巻き状の文様が構成される。261～265・267は細かい隆帯を貼付する。262～264は、口端部下へ縦位～斜位に、267は外面へ波状口縁に沿って2条の、内面には1条の隆帯がそれぞれ貼付される。265は底部付近で、縄文RL地文上に7条の隆帯が縦位に貼付される。269は三角形及び菱形の陰刻が施される。

5類 (270～278) 北白川下層Ⅱ式を本類とする。270・271は同Ⅱb式で、細かい爪形文が施される。272は微隆帯上に施文されており、270・271と差異が認められる。273・274・278は同Ⅱc式で、刻みを持った隆帯が貼付される。275～277は縄文施文土器で、撚りのきつい0段多条の単節縄文が施文される。

6類 (279～292) 縄文施文土器を本類とする。1類の胴部破片または1類に伴うものであり、いずれも単節斜縄文が施文される。286・287には結節が見られる。

第4群土器 (第34図293～第35図344) 縄文中期初頭の土器を本群とする。

1類 (293～300) 五領ケ台Ⅰ式を本類とする。293～296は平縁、297・298は波状口縁で、293～296・298は口端部に縦位の刻みを持つ。また297の波頂部下には円形突起が貼付される。文様は半截竹管による平行沈線で描かれ、斜位沈線・格子目文・鋸歯状文と斜格子目文の組み合わせ等が見られる。293は内面に円形刺突が施される。また300は地文に縄文が施文される。

2類 (301～328) 五領ケ台Ⅱ式を本類とする。301～317は半截竹管による平行沈線が主文様で、1類に比べて沈線が太く、また格子目文が粗雑になる傾向がある。また橋状把手が付くもの、口端部に突起が発達するものが認められる。315・316は、沈線の他に交互の三角陰刻文が施される。318は単沈線で文様を構成する土器で、口端部に三角形の突起が貼付される。文様は横位区画内へ鋸歯状文及び縦位沈線が施される。319～321は平行沈線の脇に連続刺突を行う土器で、319・320は口縁波頂部に刻みが施される。322～327は平行沈線及び連続刻みで文様が構成される。328は浅鉢で、内面に細かい縦位刻み・竹管による刺突がなされている。

3類 (329～344・357) 五領ケ台終末期或いは直後に位置付けられる土器を本類とする。329・330は半截竹管による平行沈線と連続刻みで文様を構成する土器で、2類322～327よりも粗雑な平行沈線が施される。331～333は隆帯と半截竹管による平行沈線で文様を構成するが、平行沈線が施文されるのは僅かである。334～339は、粗雑な単沈線と連続刺突が施されている。340～343は単沈線と角押文で文様を構成する。340は口縁部に隆帯で楕円を構成し、隆帯下に角押文を施文する。341は口端部直下に、342・343は隆帯の際に角押文を施文する。344は単沈線で文様を描く土器で、2類318の単沈線よりも粗いことが特徴である。357は双頭波頂部の浅鉢で、肥厚する内面に爪形文列を施す。

第5群土器（第25図76～78、第36図353～382） 縄文中期中葉の土器を本群とする。

1類（76～78、353～372） 勝坂式土器を本類とする。78は口縁部が屈曲する浅鉢で、4単位のJ字状隆帯の間に上下を押引文で画した交互刺突文帯がめぐる。第4群3類に近い時期である。353は口縁部に刻みを施す隆帯と沈線を充填する楕円区画文を描く。354は指頭圧痕を残す胴部で、ともに猪沢式である。355は口縁部の隆帯区画に角押文が沿う新道式である。356は丸みをもつ胴下部を縦位区画し三叉文や爪形文を施す藤内式である。76・358～372は藤内式の新しい段階から井戸尻式である。76は短く屈曲する底部から筒状の胴部が立ち上がり、無文の内湾口縁部に三角突起が付く。刻みを施す隆帯で縦横を区画した胴部には、方形区画を重ねて渦卷文・曲線文・三叉文などを半肉彫風に描く。358～362は口縁部の把手や突起である。363～368・371は胴部破片で、隆帯で円・楕円・渦卷文などを描く。隆帯に刻みを施し、360・361とともに区画内に縦位沈線を充填するものが多い。369・370・372は井戸尻式の新段階である。

2類（77・373～382） 焼町土器の仲間を本類とする。曲線的な隆帯文の周囲に太い集合沈線や半隆起線を充填し、縄文を施さない。77は胴下部を隆帯で三角形に区画し、刺突文と横位沈線文を交互に充填する。380・381は口唇部を刻んで沈線帯がめぐり、381には縄文を施す。焼町土器終末段階である。382は北陸的なコイル状突起に似る。

第6群（第25図79～第26図96、第27図105・108～第28図115、第36図383～第40図497） 縄文中期後葉の土器を本群とする。

1類（93・94・111・385～403・405～407・417～429・493） 唐草文系土器Ⅰ～Ⅳ段階の土器を本類とする。

385・386は口縁部に2本単位の隆帯による渦卷文や把手が付く、頸部が無文の深鉢であろう。387・389～393は樽形深鉢の口縁部、388はこれらの把手であろう。389には組紐文と楕円区画内に交互刺突文、391は縦位の交互刺突文がある。392・393は楕円区画文を欠く。394は交互刺突文がめぐる深鉢の頸部であろう。

395～403・405～407は胴部である。2本単位の隆帯が垂下し、地文は比較的細かい綾杉状である。400～403は胴下部がふくらむ部分で結合する。385・386などの深鉢であろう。493は3本の隆帯が400のように縦位渦卷文を描き、中の1本に圧痕がある。

395は隆帯間に押引文を施し、地文は太い斜行沈線である。405は蛇行隆帯をもち、地文は間延びする。

111・417～429は上記より太い沈線で地文を施す。111・419～421は口縁部に隆帯、418・423は沈線がめぐる。縦位区画文は417・422・423・426～429が沈線、424・425が隆帯である。地文にはハの字状（428・429）、直線あるいは雨滴状（111・418・420・421・424）、曲線状（417・426・427）などの変化がある。423は沈線と縄文を併用する。419は過熱のためか発泡している。

本類の編年位置は395がⅠ段階、93・385・386・396～398・400～407・493がⅡ～Ⅲ段階、94・

111・417～429がⅣ段階であろう。

2類 (89～92・94・96・105・108・110・404・408～416) 佐久地方を中心に東信一帯から群馬県に分布する、沈線地文の土器を本類とする。

90は胴部を2本単位の隆帯で区画し、羽状沈線地文とする。89は4単位の波状口縁に楕円区画文と結合した渦巻文を描く。沈線で縦位区画した胴部には曲線を鱗状に重層させて充填する。91は胴部に直線を交互に鱗状施文し、蛇行沈線を描く。105は胴部を細かく縦位区画し、斜行沈線を充填する。これらの深鉢はほとんど湾曲のない器形である。411～415は同種の破片である。410は十字状に区画する。

92・93は樽形深鉢を原型とし、蓋受状の口縁部形態をとる。92は49と近似し、口縁部のS字状隆帯から圧痕隆帯が垂下する。胴部の縦位区画内は直線的な沈線を交互に鱗状に充填する。409はこの胴下部であろう。93は1類との区別に迷う個体である。口縁部の楕円文内にも、胴部の縦位区画内にも渦巻文が嵌入する。

94・108・110は口縁部文様帯がない。108は低い隆帯で円文またはS字状文を描き、鱗状沈線を密に充填する。416も同種の地文である。110は幅狭の逆U字状文の間に曲線的な羽状沈線を描く。94は同様に縦位区画し、方向が不揃いな刺突状沈線を充填する。

96は73と同じ鉢形土器である。肩部には楕円文下端に渦巻文を描き、胴部は縄文地文である。

これらは、おおむね1類の唐草文系土器Ⅲ段階に並行する時期である。

3類 (109・430～433・435～439) 曾利系土器を本類とする。明確な曾利式土器は少量であり、4類と折衷した条線地文の土器を含む。

430は深鉢頸部に右下がり条線文の上に左下がり粘土紐を貼付し、波状粘土紐が沿う。曾利Ⅰ式の新しい段階であろう。431は内湾する口縁部に同じ手法で施文する籠目文土器で曾利Ⅱ式、432・433は右下がりの太い沈線による籠目文土器で同Ⅲ式であろう。曾利式と呼べるのは図示した資料がほとんどすべてである。

109・435～439は13・14・39・62などと似た条線地文の土器で、曲線的に施文するものが多い。曾利Ⅳ・Ⅴ式に並行する。

4類 (79～87・95・112・383・384・444～448・450～464・466～489・495) 加曾利EⅠ～Ⅳ式土器を本類とする。

383・384は強く内湾する口縁部に2本単位の隆帯文がめぐって撚糸文を地文とする、希少な加曾利EⅠ式である。

79～81は口縁部文様帯をもつ深鉢である。79は楕円区画文と連結した渦巻文の間に円文を配し、81は楕円区画文が主導となる。444～447・450・451は同様の口縁部である。445は屈曲が強い。444は横位隆帯に刺突を施す。80・83は胴部の縦位区画内に蛇行沈線を描く。452～455・457～459・461は同様の胴部である。456は縦位区画が見えず、縄文地に沈線で渦巻文を描く。これらは加曾利EⅡ式の新しい段階から同Ⅲ式の古い段階である。95は40と似た口縁部文様をもつ、

同時期の鉢である。楕円区画文の幅が狭い。495も同種であろう。

82は胴部に上下対向の U 字状文、蕨手文などを沈線で描き、おそらく口縁部文様帯はなからう。448・453～455・460・462・463・470～472は同様の深鉢であろう。454は波状文、455は縦位区画文、453・462は蛇行沈線、460・463・471・472は U 字状文、470は結節縄文を施す。464は口縁部が内湾する鉢と思われる。地文は見えない。466・468・469は低い隆帯で渦巻状の意匠を描き、468は地文がない。これらは81・446などに一部並行する時期から後続する、加曽利 EⅢ式の新しい段階である。条線文を縦位に施す487～489はこの時期に属するものであろう。

84～86は微隆起帯で口縁部無文帯を画す。84・85はくびれの強い深鉢で、一対あるいは1個の橋状把手をもち、胴部文様を沈線で描く。84は把手・波頂下に逆 U 字状文が胴下部まで懸垂する1段構成の文様で、下端部を開放する。85は胴上半部に J 字状の渦巻文、下半部に逆 U 字状文を描く。86・87は直線的な器形の大形深鉢で、86は84同様の文様を太い沈線で描く。87は並行垂下隆帯による区画を1単位ごとに縄文充填する。

479～484は84・85のような器形で、文様を沈線描出するものである。480は渦巻文、481は対向 U 字状文、482・484は先端の尖る U 字状文を描く。479は隆帯の両脇に刺突列が沿う。467は波状口縁で、微隆起帯で文様を描く。112・473～478・485・486は口縁部が内湾気味か直立する、86・87のような器形である。473・485のみ胴部文様を沈線で描き、473は地文が縦位の羽状縄文である。84以下は加曽利 EⅣ式であり、後続する後期初頭の資料を含む可能性がある。

5類 (490～492) 北信一帯から上越地方に分布する圧痕隆帯文土器を本類とする。

490・491は狭い無文部を残して口縁部に圧痕隆帯がめぐり、縦回転の縄文を施す。490は口縁内面が肥厚する。492は2本の圧痕隆帯が縦位に併走する。

その他 (113～115・440～443・449・465・494～497) 上記以外の少数土器と、深鉢以外の器種をまとめる

449は口縁部に高い隆帯で縦位に渦巻文を描き、縄文地文である。465は波頂部に渦巻突起をもつ。1類の仲間かもしれないが、大木系の可能性がある。494は波頂部が小さな双頭状で、大振りな刺突文が沿う。串田新式に連なるものであろうか。

113は小形の鉢で、胴上部をめぐる隆帯が突出して、縦に孔が通ずる一対の把手となる。胴部は2類の沈線地文である。114は21と同じ1個の把手が付く小形壺である。口縁部を無文とし、胴部に逆 U 字状文と蕨手文を描く。496は無文の浅鉢、497は小形の壺類であろう。赤彩される例が少なくない。496は加曽利 EⅠ・Ⅱ式頃、114は同Ⅲ式、497は同Ⅳ式頃に属す。

115・440～443は釣手土器である。115・440・441は鉢部に橋状の釣手を架ける二窓式である。115は橋頂部に筒状の突起が付く。橋は中実で基部に耳が付く。橋前後面から鉢の縁に細い平行沈線文を施す。内面から縁は黒変している。440・441は橋頂部の一面に人面、裏面に渦巻文を描き、頭頂部に沈線文を施す。440は円形刺突により目と鼻孔を表現し、口は横位の沈刻である。人面のある橋に蕨手文と刺突文を施す。441は大形で、目は横位、口は縦位の沈刻で表現し、鼻

孔はない。442は鉢部の破片で、縁に蕨手を伴う楕円文を描く。443は釣手付深鉢であろう。

第7群（第40図498～505） 縄文後期の土器を本群とする。出土資料のほとんどを図示した。

498～503は後期前半の土器である。500は称名寺式の古い段階で、口縁端部に磨消縄文を施しJ字文を描くらしい。498は無文部でJ字文を描き、499は二段J字文であろう。ともに同式の中頃である。501・502は堀之内1式期の長野県に特徴的な鉢形土器である。503は加曽利B1式である。504は太い沈線で施文された羽状沈線文土器であろう。505は瘤付土器であろうか。後期後葉と思われる。

第8群（第28図116、第40図506～第41図531） 縄文晩期の土器を本群とする。

506はわずかに肥厚する口縁部に二列の刺突文を施す。晩期前半と思われる。他は後半に属す。

507～516は離山段階である。507・508は口縁部に幅狭の浮線文を施す深鉢である。低い山形の意匠を描く。511～516は数条の沈線帯がめぐる甕・深鉢である。511は507のような意匠となるらしい。512は2段、513・515は沈線が太め、514・516は細めである。510は沈線が1条、514は内面に沈線がある。509は緩く内湾する浅鉢で口縁外面に凹線がめぐり、内面は突出する。

517～531は氷式である。517～520は内湾口縁の浅鉢である。517は浮線文、518は沈線帯をもつ。519・520は無文で、520は内面に突出部がある。522は隆線帯をもつ甕、521・524・525は無文の甕、523・526は深鉢である。527～531は細密条痕を施す甕・深鉢の胴部である。527は明瞭な肩をもち、528・530にはジグザグ文が見える。116は小形の甕で、口縁部の突起内面に沈線を刻み外面に沈線帯がめぐる。胴部は丈が低く細密条痕を施す。これらは氷式後半であろう。

第9群（第28図117・118、第41図532～542） 弥生前期後半から中期初頭の土器を本群とする。

532・533・535・536は条痕文を施す甕である。532は横位条痕文の間に低い山形文を描く。533は口縁部に大振りな刺突を施す。536は意匠を描くらしい。537・538は東海系条痕文である。534は在地系突帯壺である。539・540は櫛歯状工具で波状文を描く壺であろう。541・542は縄文を施す壺である。117は肩部に2段、沈線で流水文風の工字状文を描き、下端が垂下して胴部に方形状の渦巻文を描く広口壺である。118は小形薄手の無文土器で、甕か広口壺であろう。

2 土製品

① 土製円板（第42図1～7）

土器片を整形して円板状に仕上げたものである。1は第3群6類土器を分銅形に整形し、周縁を研磨する。図の左右が土器の天地である。2・3は第6群2類を用い、周縁の整形は打ち欠きのみである。2は長径5cm、厚さ1.4cmと大きい。4は加曽利EIV式頃の土器を用い、周縁を研磨する。5は縄文のみの破片を用いるが、胎土の特徴から第4群の可能性もある。周縁は一部

に研磨し、長径2.7cmと小さい。6・7は無文土器を用いる。摩滅のため周縁の加工痕は観察できない。この他に無文土器を打ち欠いた2点がある。

② ミニチュア土器（第42図8～11）

8は平底鉢形で口縁部に欠損する。節の大きい縄文を施し第3群と思われる。9は無文の丸底鉢形で、口唇部は薄く尖る。10は無文の台付鉢状である。11は短い管状で、図の右端は剥離面のため注口部の可能性がある。口唇部に刻み、周囲に半截竹管による細かい刺突列と沈線を施す。文様は中期前半の可能性があるが、類例を知らない。

③ 貝輪形土製品（第42図12～16）

平面形は楕円形、側面形は截頭台形の腕輪状を呈することから、貝輪の模倣品と考えられる。全点を図示した。15・16は同一個体の可能性があり、4または5個体である。12・13は全体形を窺え、12は長径10.4cmを測る。環体に凹凸があり厚さは一定しない。12～15は内側の縁をやや厚く作り、13～14は節の細かい縄文を施す。いずれも胎土は第6群土器と変わらない。12・13はD30、14・15はD25グリッド出土、16は地点不詳である。遺物整理中に発見したため、出土状態は明らかではない。D30には敷石住居と思われる10号住居址、D25には敷石住居の1号住居址がある。この地点の出土土器からも、胎土の共通性からも、中期後葉から末葉の所産と考えられる。

④ 土偶（第42図17～20）

図示した4点の他に小破片4点がある。17は腕と思われ、直方体の角に刻みを施し、先端に縦位の孔が貫通する。18は胸部で、短い両腕が水平に伸びる。正面・背面に沈線で渦卷文、楕円文を描き、乳房の突起は1個である。19は腕で、両面に平行沈線文を施す。20は鯨面土偶の流れに属す。頭部を板状に作り、細い首から穿孔がある耳部が左右に張り出す。額に刺突列が走り、目を小さな刺突で表現し沈線で半円状に囲む。鼻は表現せず口は横位沈刻である。正面・背面とも赤彩痕がある。17は中期中葉、18・19は中期後葉、20は晩期後葉の土偶であろう。

⑤ 三角埴形土製品（第42図21）

底面を区別しない、整った三角柱状を呈し、長さ8.8cm、高さ6.5cmを測る。3面の正面とも太い沈線で二重円、2側面に円を描く。側面に一部縄文が残るが、全体が摩滅して地文は明らかではない。中心に直径1cmほどの孔が貫通する。B78出土である。

3 石器・石製品

今回の調査で出土した石器全体の内訳は次のとおりである。石製品は石棒のみである。図化することができなかったが、できるだけ多数の資料を写真掲載し、概要を記す。

ナイフ形石器1、石鏃262、石錐43、石匙16、尖頭器？1、鈎形石器1、異形石器1、スクレーパー30、大形刃器11、礫器2、加工痕・使用痕ある剥片222、打製石斧58、磨製石斧14、磨石・凹石類130(特殊磨石1)、多孔石7、石皿8、砥石4、黒曜石・その他石質の原石・石核・剥片・碎片、石棒6

① ナイフ形石器（第42図22）

E-34から出土した。黒曜石製で2側縁を加工し、長さ3.55cm、幅1.5cm、厚さ0.45cmを測る小形品である。無加工の側縁に微細な剥離痕を認めるが、後世の傷であろうか。

② 石鏃（PL-17-1-1～63・2-64～130）

6点を除き黒曜石製である。凹基無茎鏃が圧倒的に多く、平基・凸基（64～71・75）は少数である。有茎鏃（59～63・98～100・130）といわゆる飛行機鏃（127）は縄文晩期の所産であろう。第一次剥離面を残す分厚いもの、著しく非対称形のもの、基部加工が曖昧なもの（1～13）を未製品と見なした。33点を数える。

③ 石錐（PL-17-3-1～43）

2点を除き黒曜石製である。全体が細長い柱状のA類（B・C類以外）が26点、頭部を作り出したB類（21・22・25・30・31・34～41）が13点、剥片に短い錐部を作り出したC類（23・24・42・43）4点がある。

④ 石匙（PL-18-5-1～16）

黒曜石9点、チャート5点他の石材で、小形品に黒曜石を用いる。縦形（1～5）6点、横形（6～16）10点がある。4は縦形、12は横形のミニチュア品であろう。

⑤ 尖頭器等（PL-18-5-17～19）

17は安山岩製の尖頭器であろうか。19は鈎形石器である。軸部の中で欠損し、鈎部は短い。18は異形石器とした。石匙の摘み部のように見えるが欠損品ではない。18・19は黒曜石製。

⑥ スクレーパー（PL-18-6-1～25）

黒曜石24点、チャート4点他の石材である。拇指状を含む円形か楕円形の周縁に刃部を作るA類（1～9・13・14・18・25・27）16点、長身の剥片の側縁に刃部を作るB類（10・11・15・21～24・26・28）10点、不定形のC類（17・20）などがある。

⑦ 大形刃器（PL-17-4-15～20）

千枚岩や細粒砂岩など打製石斧と同じ石材である。縦長剥片（15・16）、横長剥片（17～20）の薄い側縁を連続剥離し刃部を作り出している。

⑧ 礫器（PL-17-4-21）

21は凝灰岩を分厚く剥離し、端部を刃部としている。

⑨ 打製石斧（PL-18-7-1～15・8-16～30）

千枚岩を主体に細粒砂岩などを交える。過半数が残欠か欠損部を認めるものである。1～15・23は短冊形、その他は撥形に大別される。法量の差が大きく、撥形には形態に変化がある。

⑩ 磨製石斧（PL-17-4-1～14）

蛇紋岩、細粒砂岩等を用いる。全点を写真掲載したが、法量の差が大きい。大部分は定角式であるが、9は乳棒状、5・6・8は稜が不明瞭である。

⑪ 磨石・凹石類（PL-20-13～16-1～44、PL-21-17～20-45～90、PL-22-21～24-91

～126)

掌大の円礫に磨痕・くぼみ・敲打痕を有するものを一括し、ほぼ全点を写真掲載した。約90%は安山岩である。3種の使用痕は単独の場合と複合する場合があり、複数面に痕跡をもつものが多い。

⑫ 多孔石 (PL-24-29-1～3)

凹石より大きい安山岩に数個以上のくぼみを有する。

⑬ 石皿 (PL-23-25～28-1～6)

6の緑泥片岩以外安山岩である。1は磨面が広く深い。2は縁が不明瞭で、平坦な磨面が黒変している。3は縁に彫刻が施され、磨面を囲む凹線と短凹線で飾っている。6は被熱により一部赤変している。

⑭ 砥石 (PL-24-30-1～4)

いずれも砂岩である。1は表・裏・側面とも磨面としている。2・3は残欠で薄い。大形の4は風化のため砥石かどうか判然としない。

⑮ 石棒 (PL-24-31-1～7)

全点を写真掲載した。4・7は安山岩、6は緑泥片岩、その他は凝灰岩と思われる。7は角柱状の自然石で、石棒かどうか確実ではない。

⑯ 石核・剥片・碎片類 (第45図、PL-19-9～12)

打製石斧、大形刃器の石材と共通する剥片等のほか、黒曜石、チャート、玉髓、鉄石英等がある。黒曜石については製品を除いた全点を計量し、全重量は29,138.7gであった。PL21-9下段は出土資料中最大の原石である。第49図に2mグリッド単位の分布状態を示した。A-94の978gを最高に、A-77・86・95・96、B-68、D-22・23・30、E-15から500g以上出土した。37グリッドを発掘したA区から32%が出土し、その他の地区では特定の数グリッドに集中する。

⑰ 石器群の分布状態 (第43・44図)

磨石類・多孔石・打製石斧・磨製石斧・石皿・石棒を大形石器等として第43図、石鏃・石錐・石匙・スクレーパーを小形石器として第48図に、2mグリッド単位の出土点数を記号で示した。両者とも黒曜石と共通してA区及び4・9号住居址付近に多い。

第5章 む す び

平成3年度に続く今回の発掘調査により、約1300㎡の調査範囲から敷石住居を含む12軒の住居址と45基の埋甕、約90基の土坑など縄文中期を主体とする集落址を検出した。標高の高い南東部を削平されていたものの、工場跡地にこれほどの遺構が遺存していた結果には驚きを禁じ得ず、遺構密度が高い町内屈指の縄文集落の姿が想像される。

住居址については、2軒の敷石住居址とプランがおおかた把握できた竪穴住居址3軒のほかは

炉址のみが残存した遺構である。縄文前期末の3号、中期初頭の5号は検出例が少ない時期の住居址である。敷石住居址の1・2号はいずれも柄鏡形である。2号は中期末に属し、張出し部が1段高く基部に埋甕がある。方形の主体部の四隅に立石を配する例は稀少である。1号は後期と推定されるが、張出し部が低く石囲み状である。掘り込みが不明瞭ではあるが、敷石住居の好例といえる。その他は4枚石囲み炉の形態と出土土器から中期後半に属し、4・6・7・9号が加曽利EⅢ式、8・10・11号が同Ⅳ式期である。

埋甕は屋内埋甕や土坑内埋納と確認できない単独埋置土器を一括した。45基の約半数は2・3基が群在し、さほど大形の土器も含まれていない。住居址の大半が掘り込みを確認できない遺存状態であったことと住居分布域に重複することから、通常の埋甕や床面倒置土器も含まれる可能性が高く、屋外埋甕とは言い切れない。今回検出した埋甕の性格は検討課題である。

土器は縄文早期押型文土器から弥生中期前半に及ぶ。多数の遺構を残した縄文中期後葉が圧倒的に多く、前期後葉・中期初頭にまとまりがある。中期後葉には古い時期に唐草文系土器と佐久地方に分布する沈線地文土器が多く、加曽利EⅢ式が波及すると伯仲するようになり、同Ⅳ式期には在地的な土器が影を潜めるように変遷するらしい。少数ながら曽利系の条線地文土器や北信の圧痕隆帯文土器が見られ、分布限界に近い例となろう。複数個体の釣手土器は注目される。

その他の遺物の中で、貝輪形土製品は長野県に例が無く、間接的とはいえ海岸地域との交流を示す特筆すべき資料である。三角埴形土製品は深町遺跡に次ぐ出土であるが、県内では現在10例前後が知られるに過ぎない。土器・土製品に比較して石器は図化がかなわず不十分な報告となった。時期が限定できないものの、中期後半の石器組成としては磨石類に対して打製石斧がかなり少ない感がある。

縄文時代以外では、弥生前期後半と思われる土器棺墓が注目される。平成3年度調査地点で明治43年に出土した容器形土偶2点と関連し、墓域が広がっていた可能性もあろう。またナイフ形石器1点が認められたが、前回調査で出土した神子柴型尖頭器を遡る町内最古の資料となる。

上小地方で古くから著名な本遺跡の中心部分は消滅したが、郷土博物館で保管する豊富な出土品と記録類とともに、調査成果を収めた記録保存として、本書が地域史・考古学の研究に活用されることを願って擲筆する。

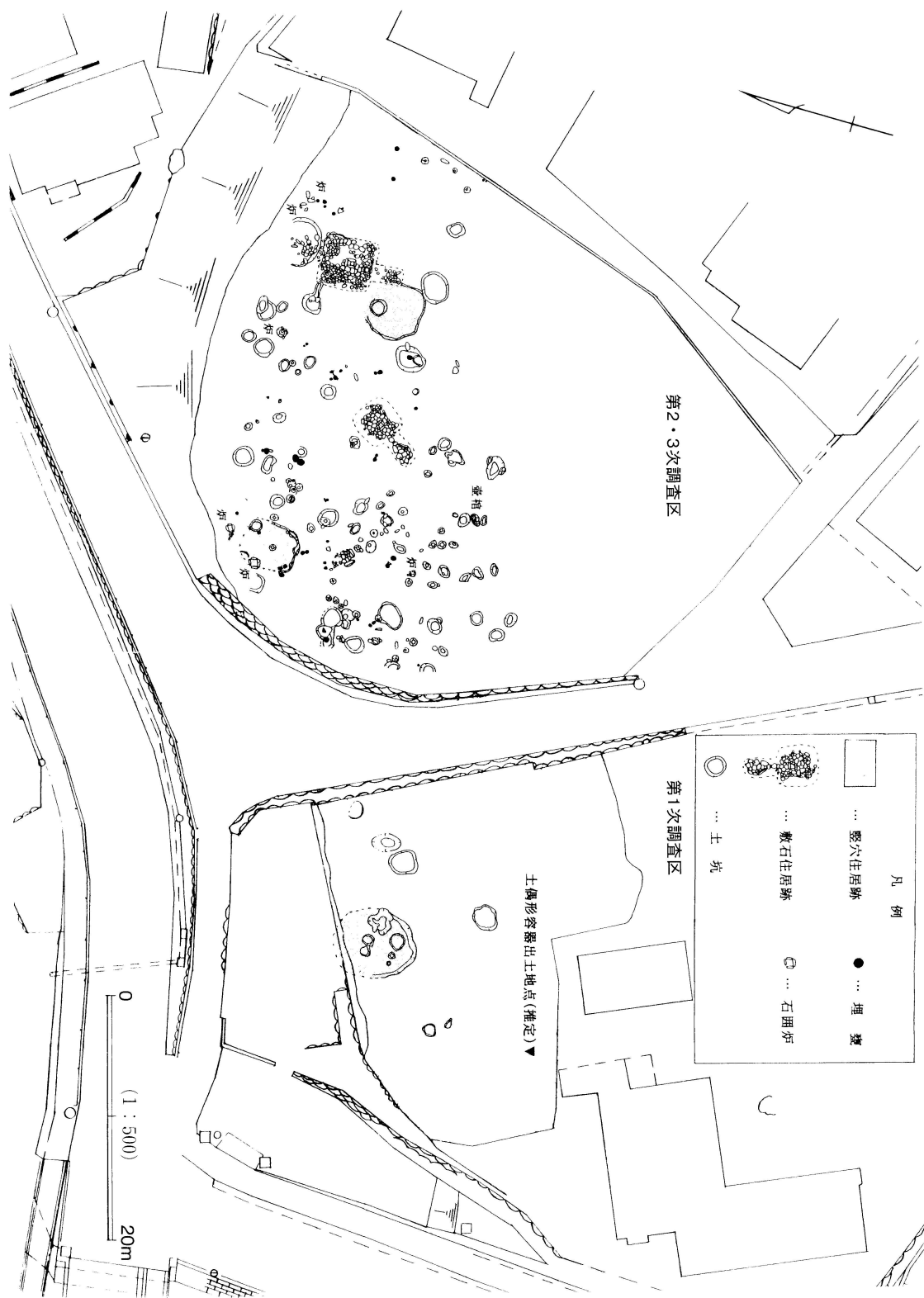
引用参考文献

(編著者名五十音順)

- 網谷克彦 1989 「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
石塚和則 1986 『将監塚 縄文時代』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』4
鶴飼幸雄・守矢昌文他 1990 『棚畑遺跡』茅野市教育委員会

- 久保田敦子他 1991 『林之郷・八千原』上田市教育委員会
- 桜岡政信 1987 「国分寺中間地域遺跡出土縄文時代中期土器について」『研究紀要』4（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 笹森健一他 1987 『鷺森遺跡の調査』上福岡市教育委員会
- 塩入秀敏他 1979 『深町』丸子町教育委員会
- 塩入秀敏他 1993 『岩ノ口遺跡』武石村教育委員会
- 末木健 1984 「曾利式土器圈縁辺部の様相」『山梨考古』14
- 末木健・三上徹也 1988 「曾利式土器様式・唐草文系土器様式」『縄文土器大観』3 小学館
- 鈴木保彦他 1980 『シンボジウム縄文時代・中期後半の諸問題』神奈川考古同人会
- 高野豊文他 1982 『丸子町地域開発史』丸子町教育委員会
- 滝沢敬一・綿田弘実 1990 『下久根遺跡・二反田遺跡』丸子町教育委員会
- 滝沢敬一・賛田明・綿田弘実 1992 『淵ノ上遺跡』丸子町教育委員会
- 谷井彪他 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1982（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中部高地縄文土器集成グループ 1979 『中部高地縄文土器集成 第1集』
- 中沢道彦 1991 「中部高地ブロック」『東日本における稲作の受容』東日本埋蔵文化財研究会
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史考古資料編 全1巻（4）遺構・遺物』
- 野中松夫 1983 『江ガ崎貝塚・御殿場遺跡・荒川附遺跡』蓮田市教育委員会
- 福島邦男他 1991 『平石遺跡—第2次緊急発掘調査報告書—』望月町教育委員会
- 宮下健司 1992 「長野県の土偶」『国立歴史民俗博物館報告』第37集
- 百瀬忠幸他 1991 「吹付遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内その2—』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 百瀬忠幸他 1990 『四日市遺跡』真田町教育委員会
- 森嶋稔・原田政信他 1990 『円光坊遺跡』戸倉町教育委員会
- 山本典幸 1988 「五領ガ台式土器様式」『縄文土器大観』3 小学館
- 綿田弘実 1988 「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『紀要』2（財）長野県埋蔵文化財センター
- 綿田弘実 1989 「長野県東北信地方の中期末葉縄文土器群」『縄文中期の諸問題』縄文セミナーの会
- 綿田弘実他 1992 「考古」『丸子町誌歴史資料編』

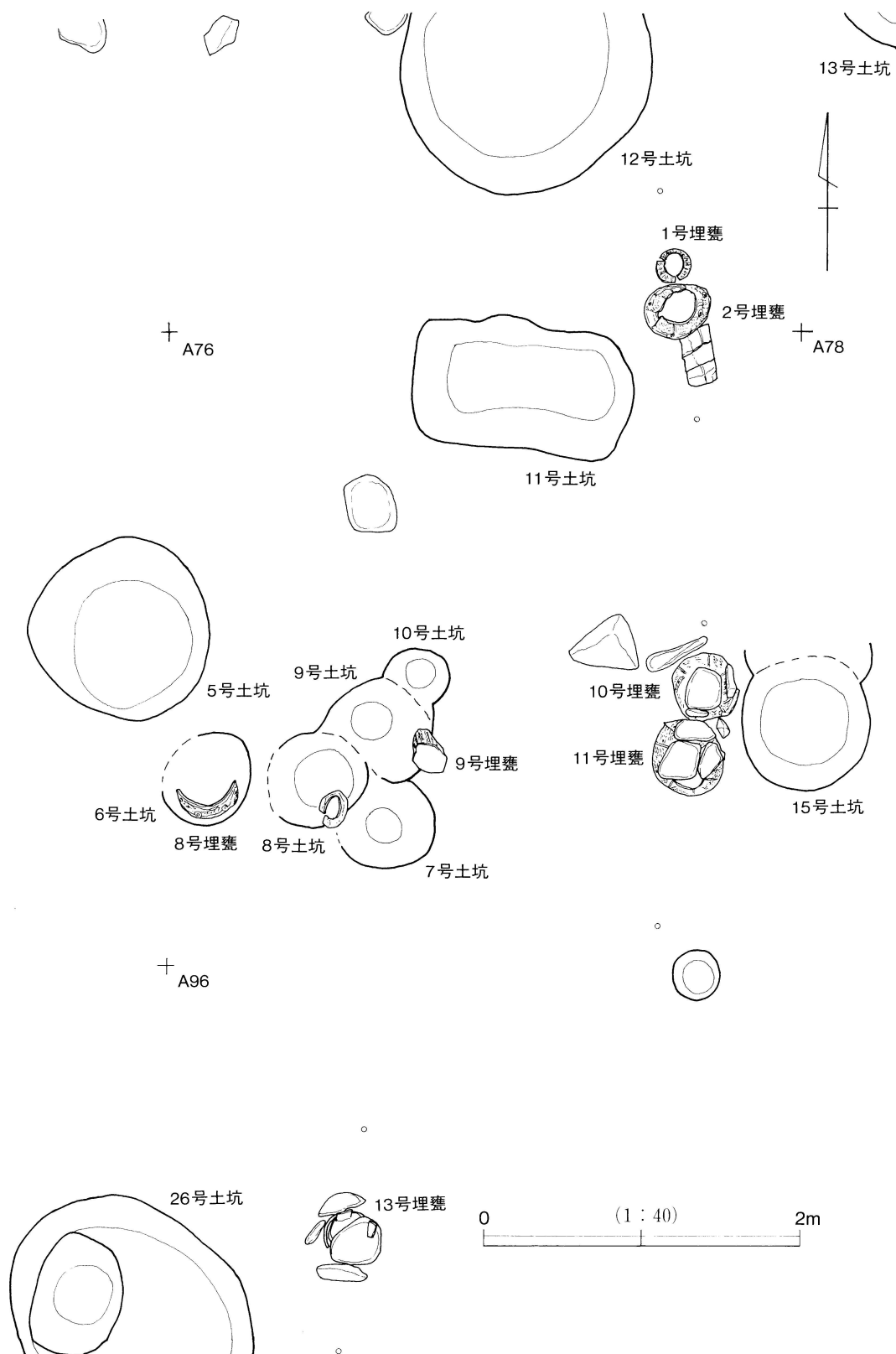
図 版



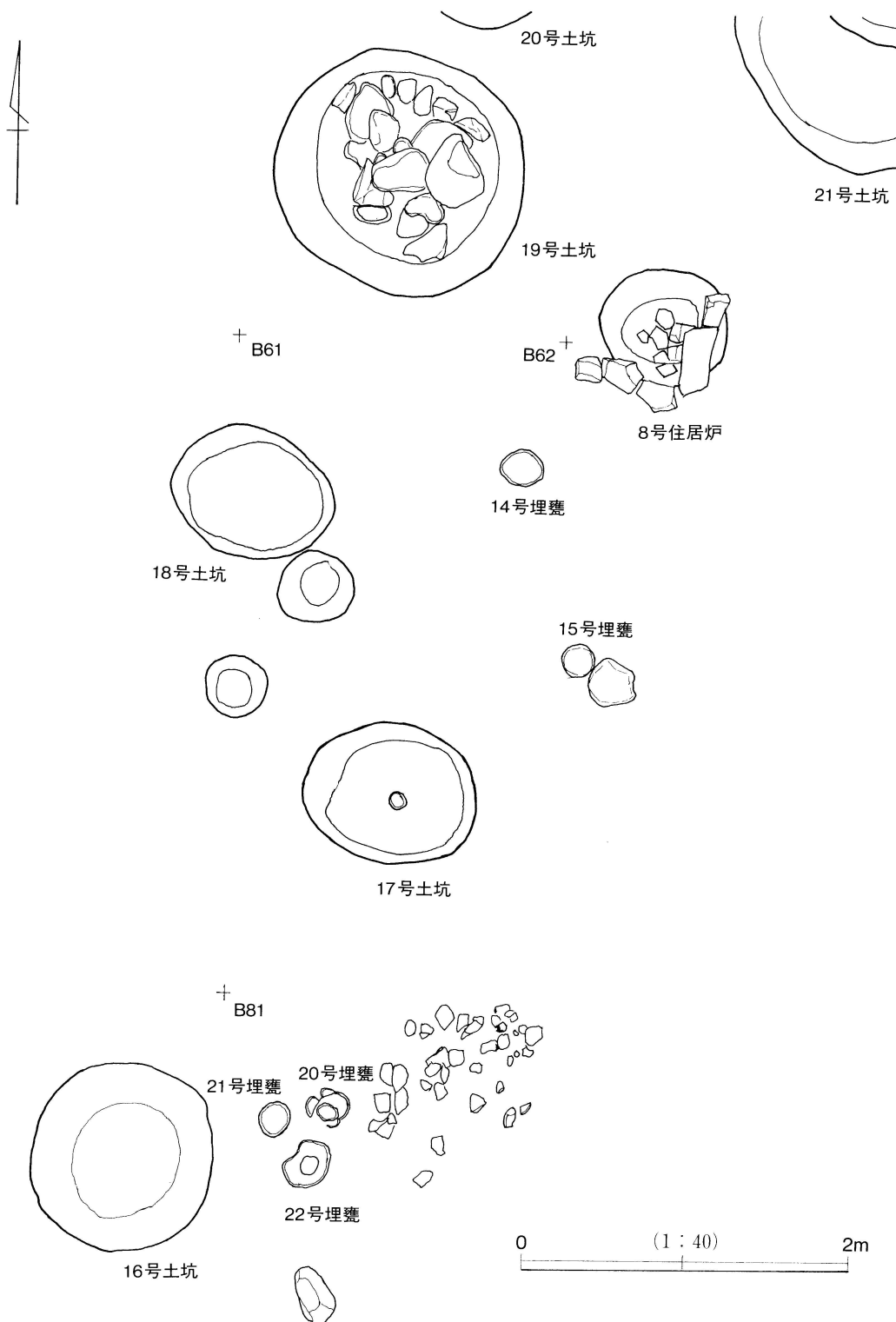
第1図 全体遺構分布図 (第1・2・3次調査)



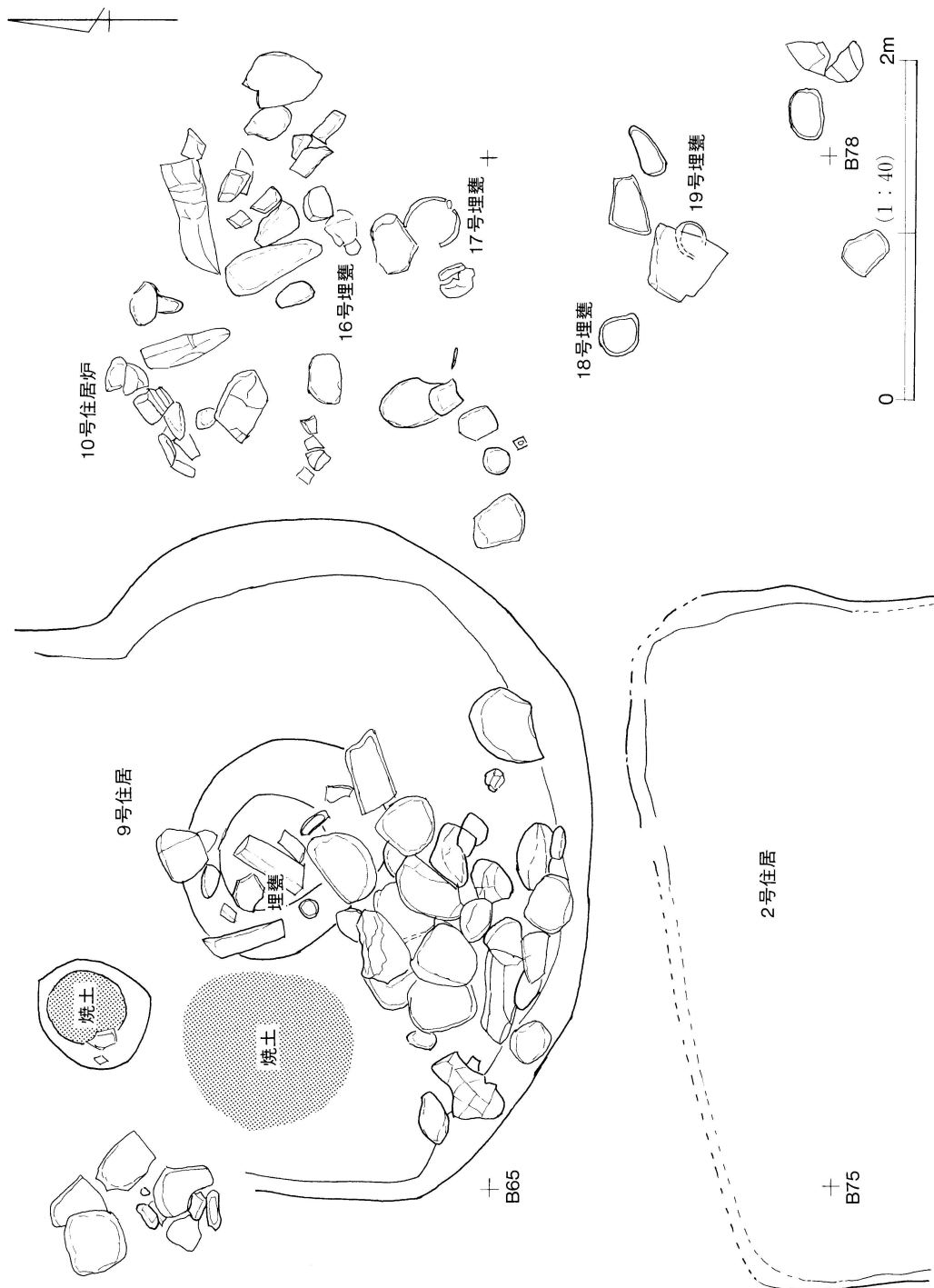
第2図 遺構分布図 (第2・3次調査) 住:住居址、○数字:埋甕、数字のみ:土坑



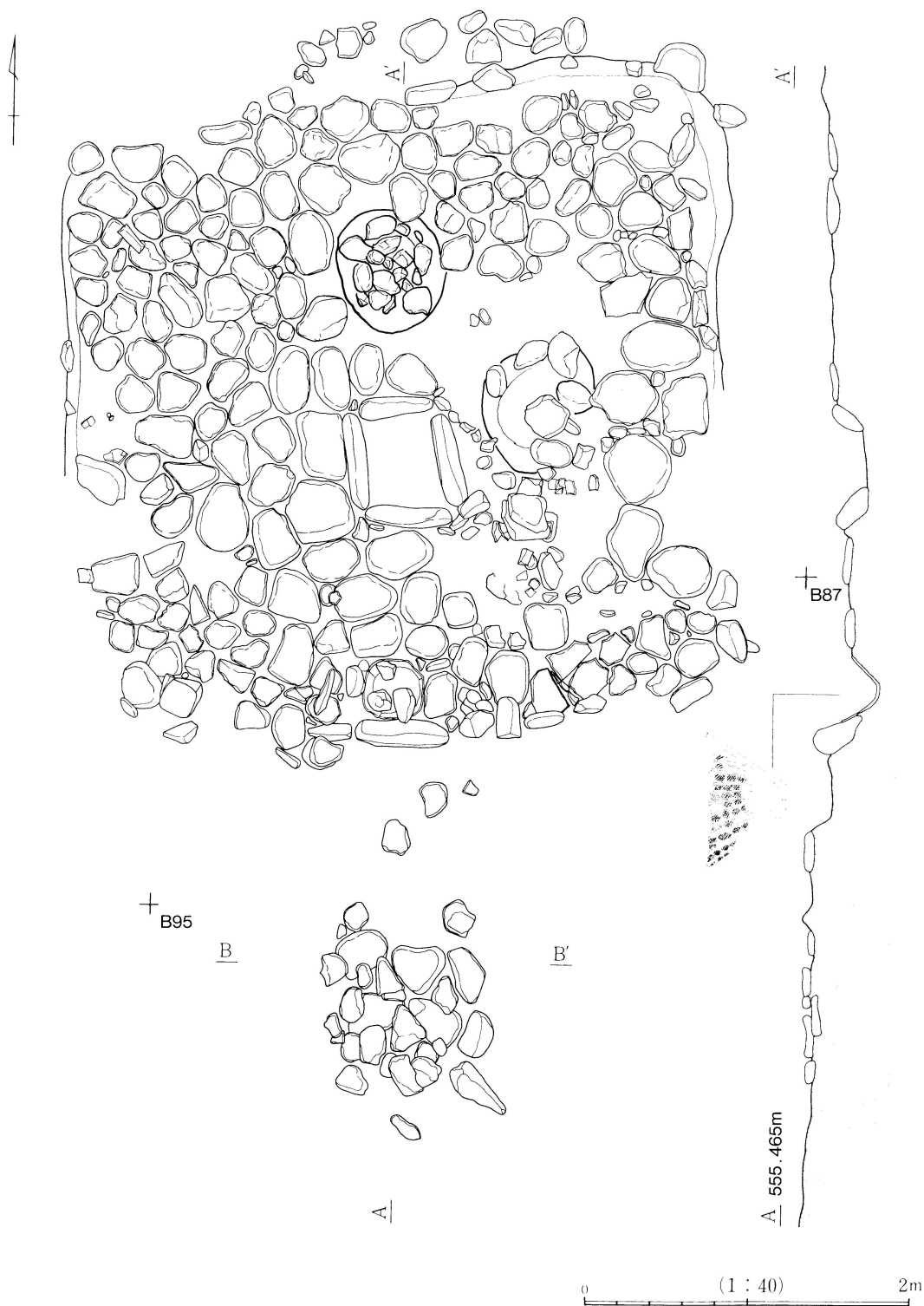
第4図 遺構実測図(2) (A77・78・87・88・97・98、D7・8周辺)



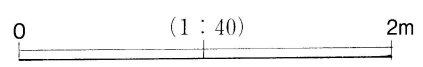
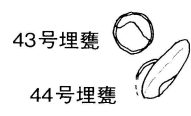
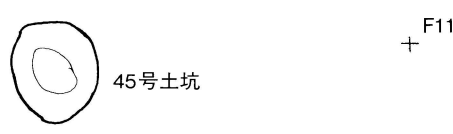
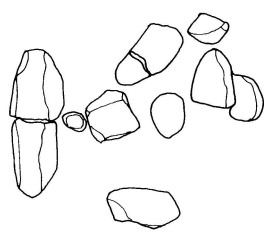
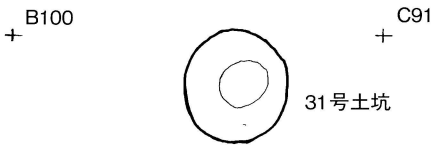
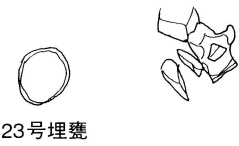
第 5 図 遺構実測図(3) (B61~63・71~73・81~83・91~93)



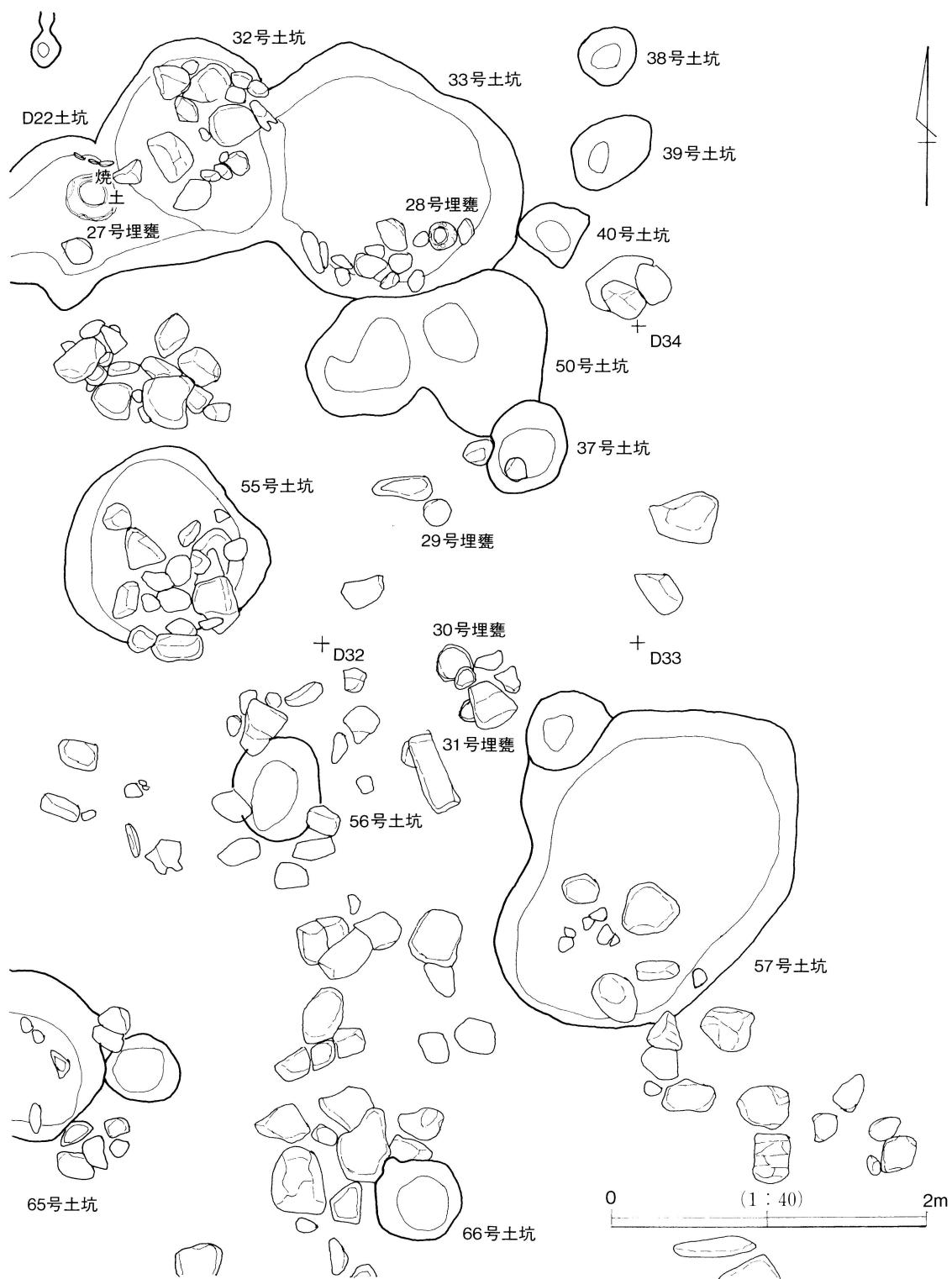
第6図 遺構実測図(4) (B65~68・75~78周辺)



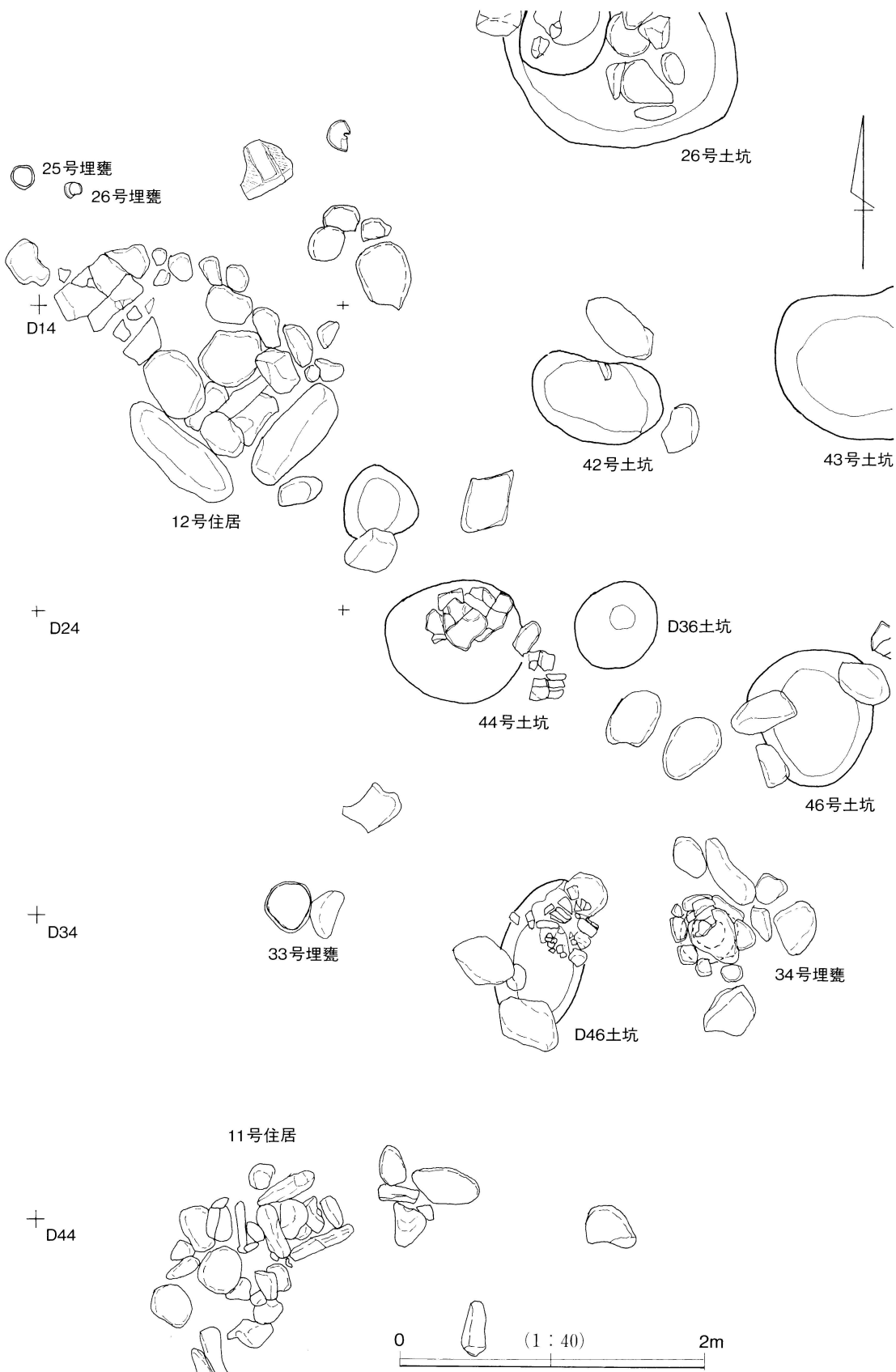
第7図 遺構実測図(5) (2号住居址)



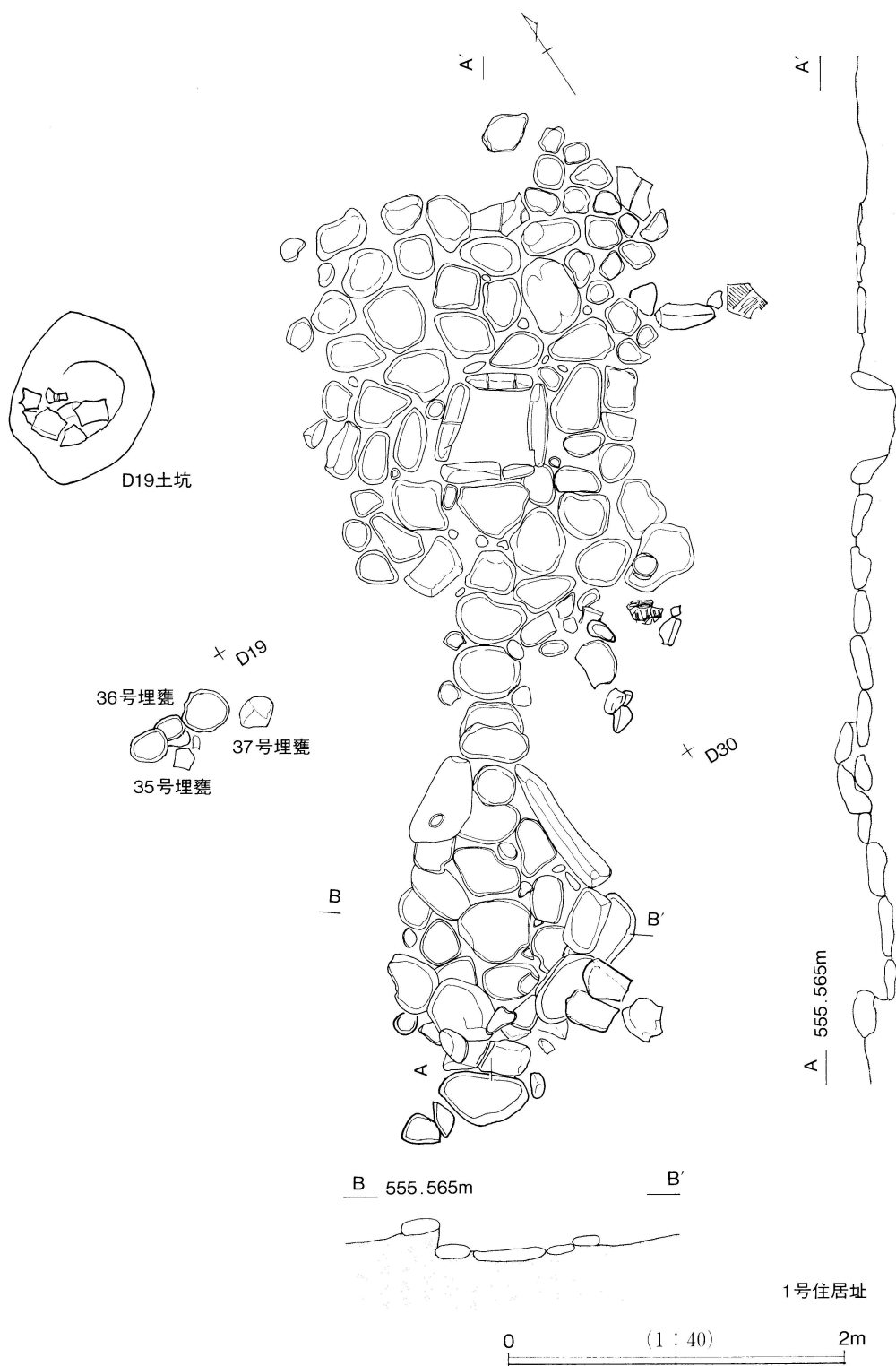
第 8 図 遺構実測図(6) (B100、C91、E10・20・30、F1・11・21周辺)



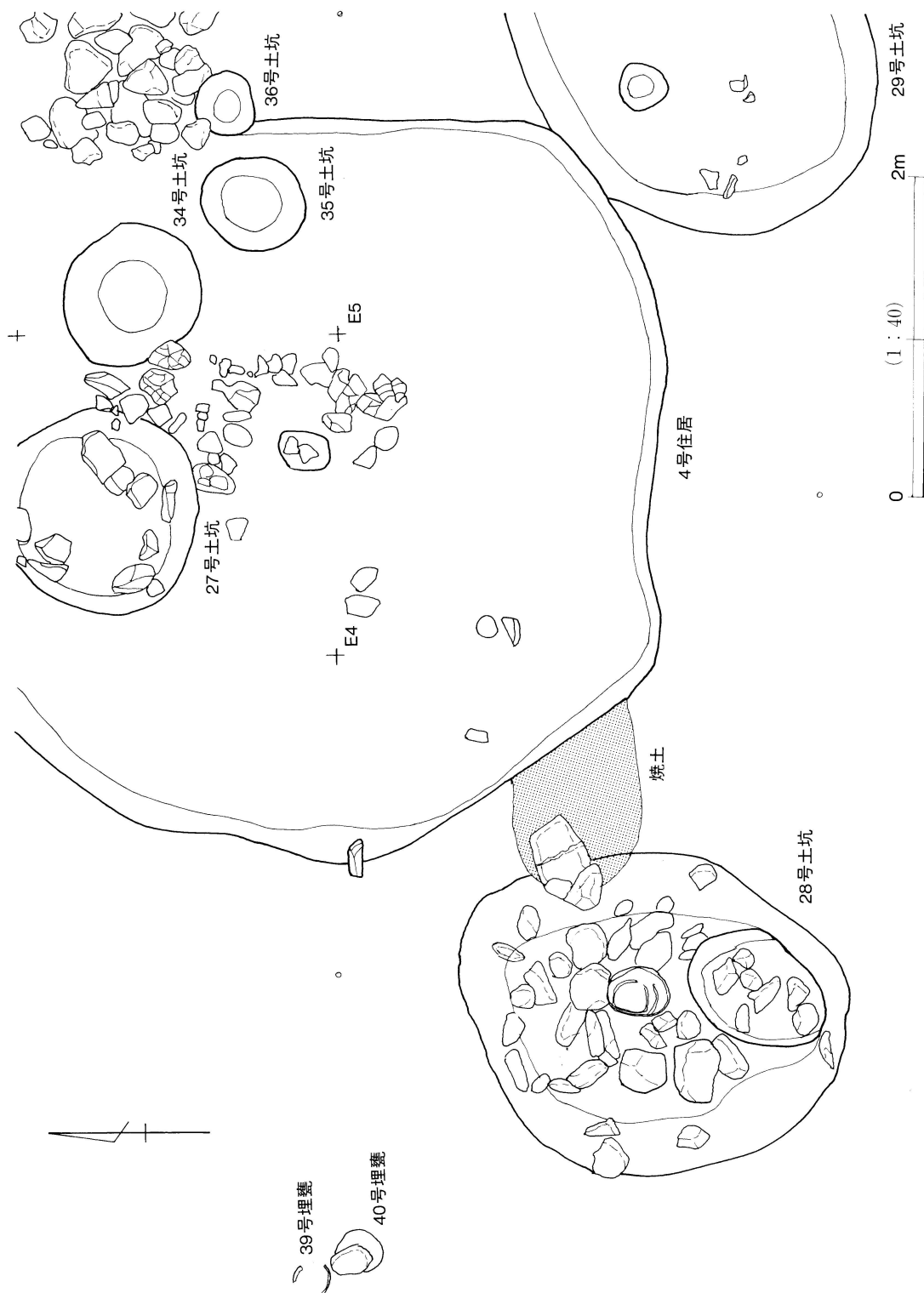
第9図 遺構実測図(7) (D22~24・32~34・42~44・52~54)



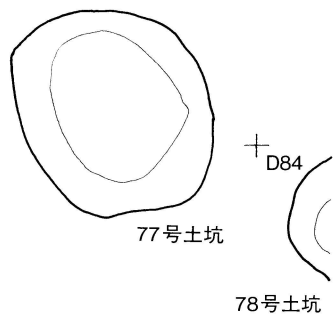
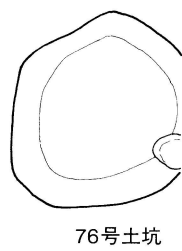
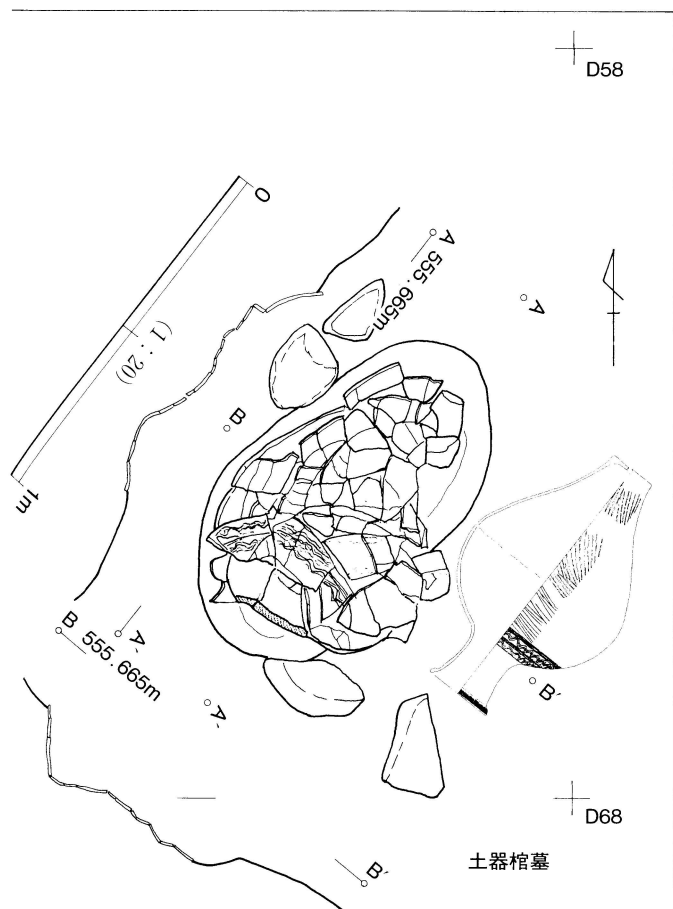
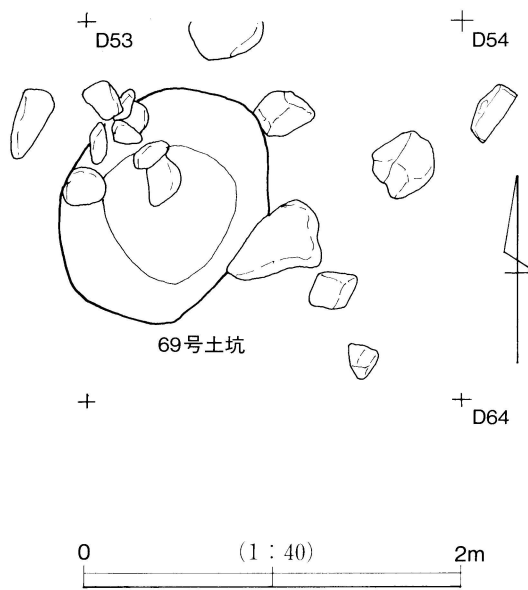
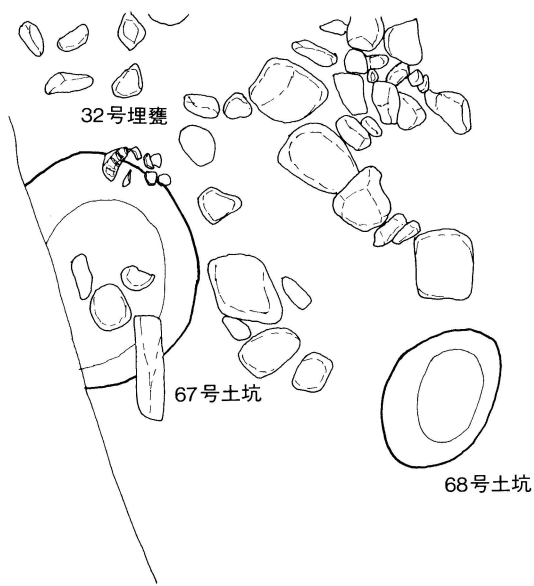
第10図 遺構実測図(8) (D15~17・25~27・35~37・45~47周辺)



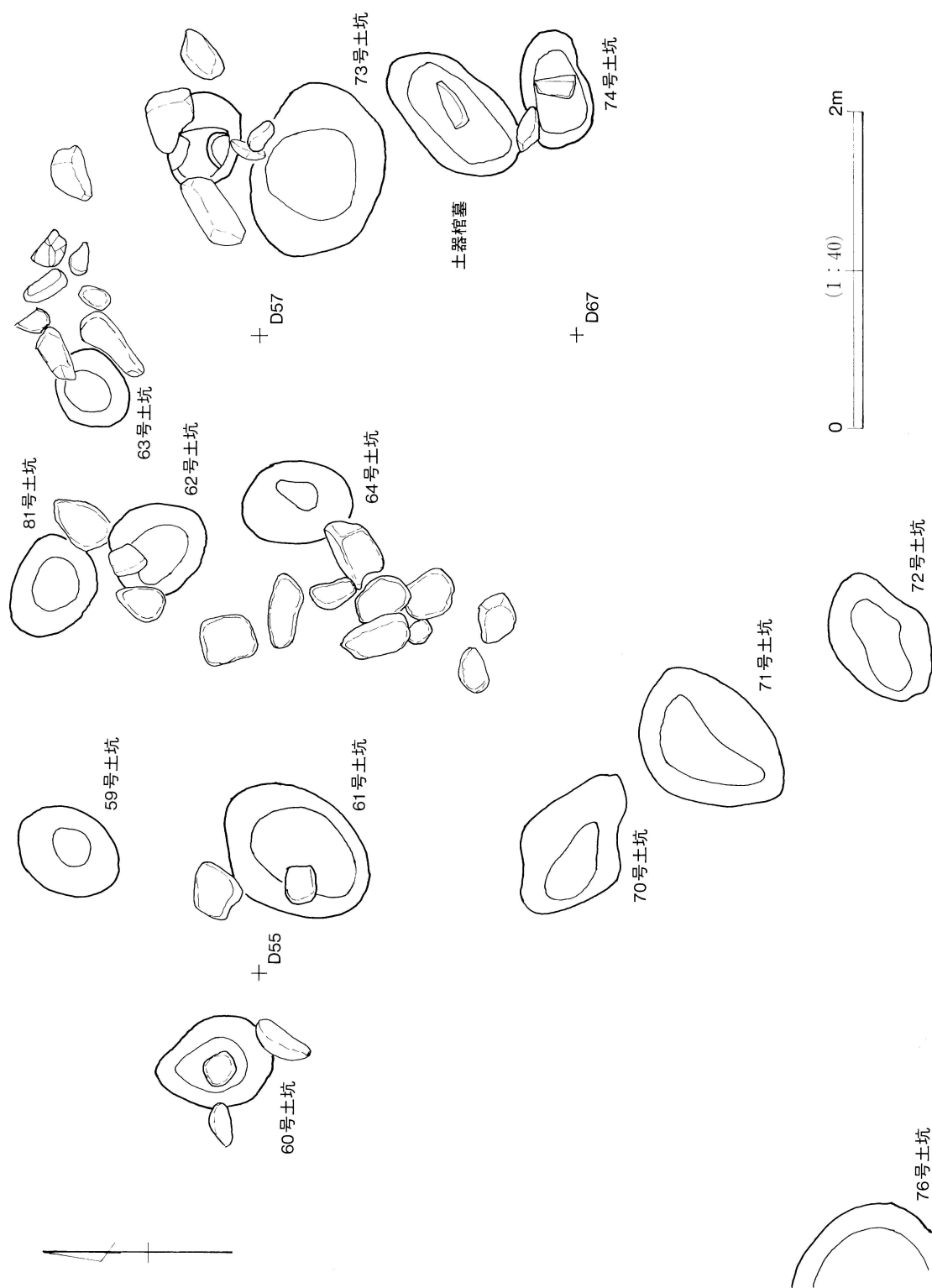
第11図 遺構実測図(9) (1号住居址他)



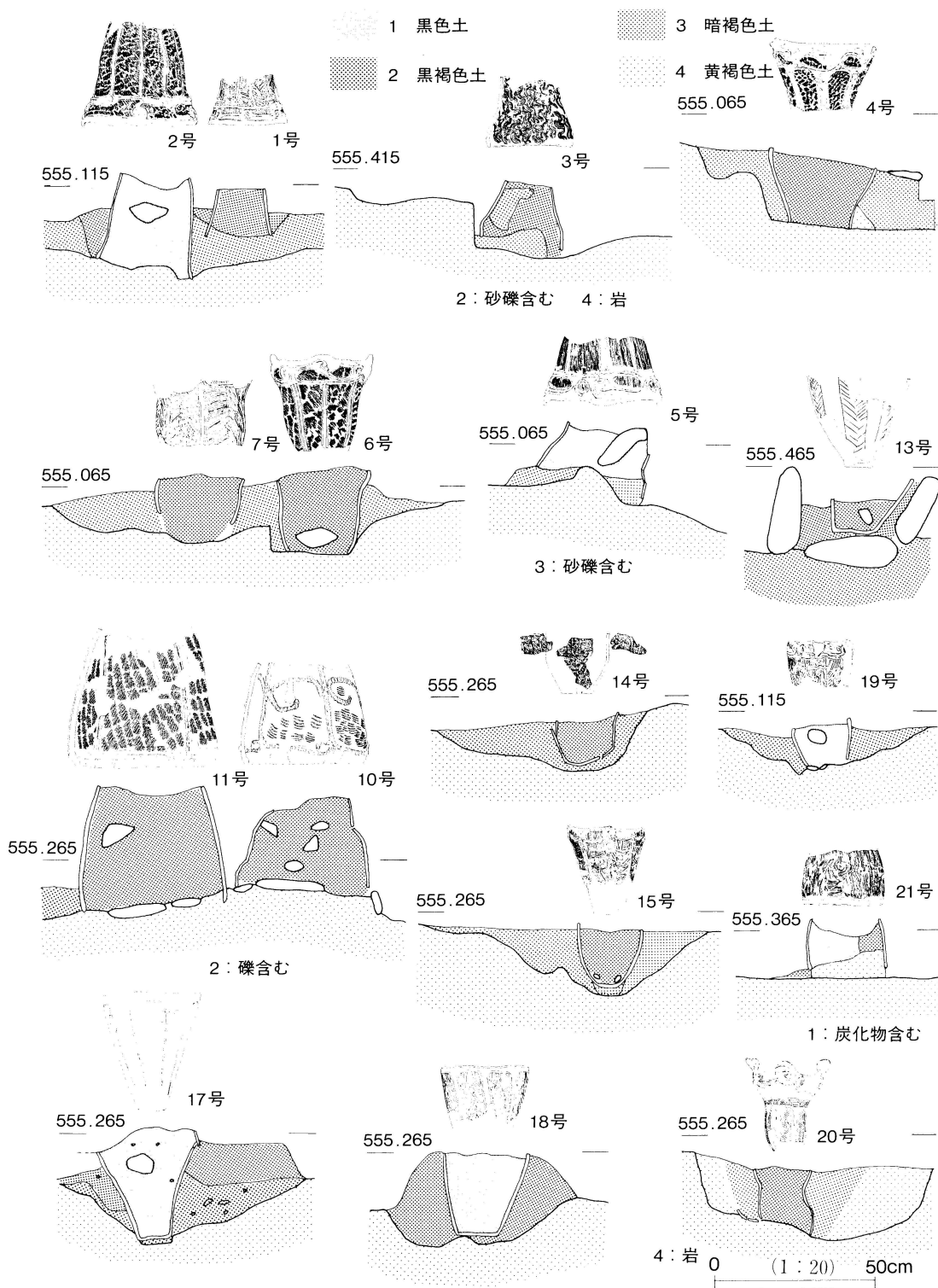
第12図 遺構実測図(10) (E 3 ~ 6 ・ 13 ~ 16 ・ 23 ~ 26)



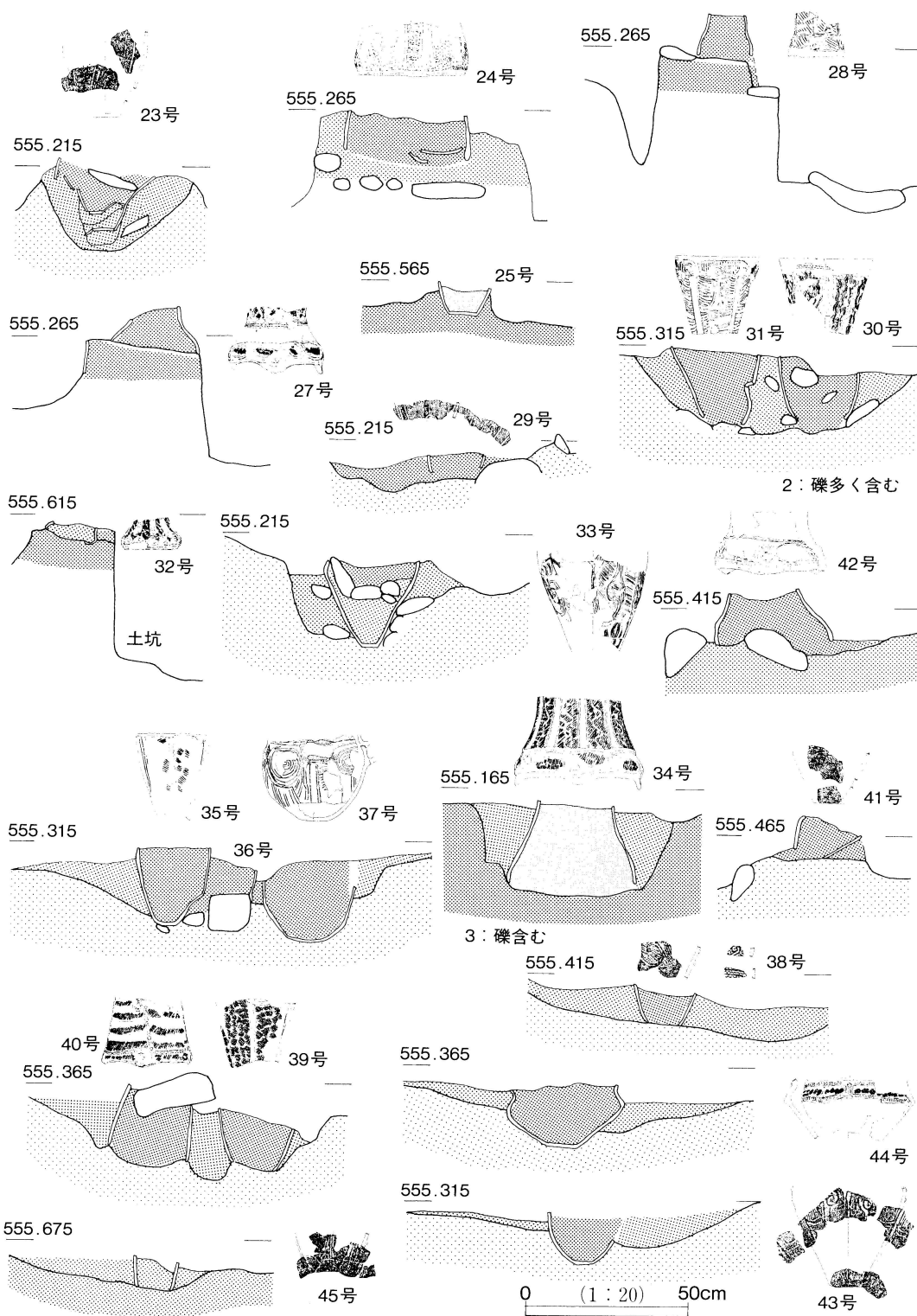
第13図 遺構実測図(11) (D62~64・74・84・94周辺、土器棺墓)



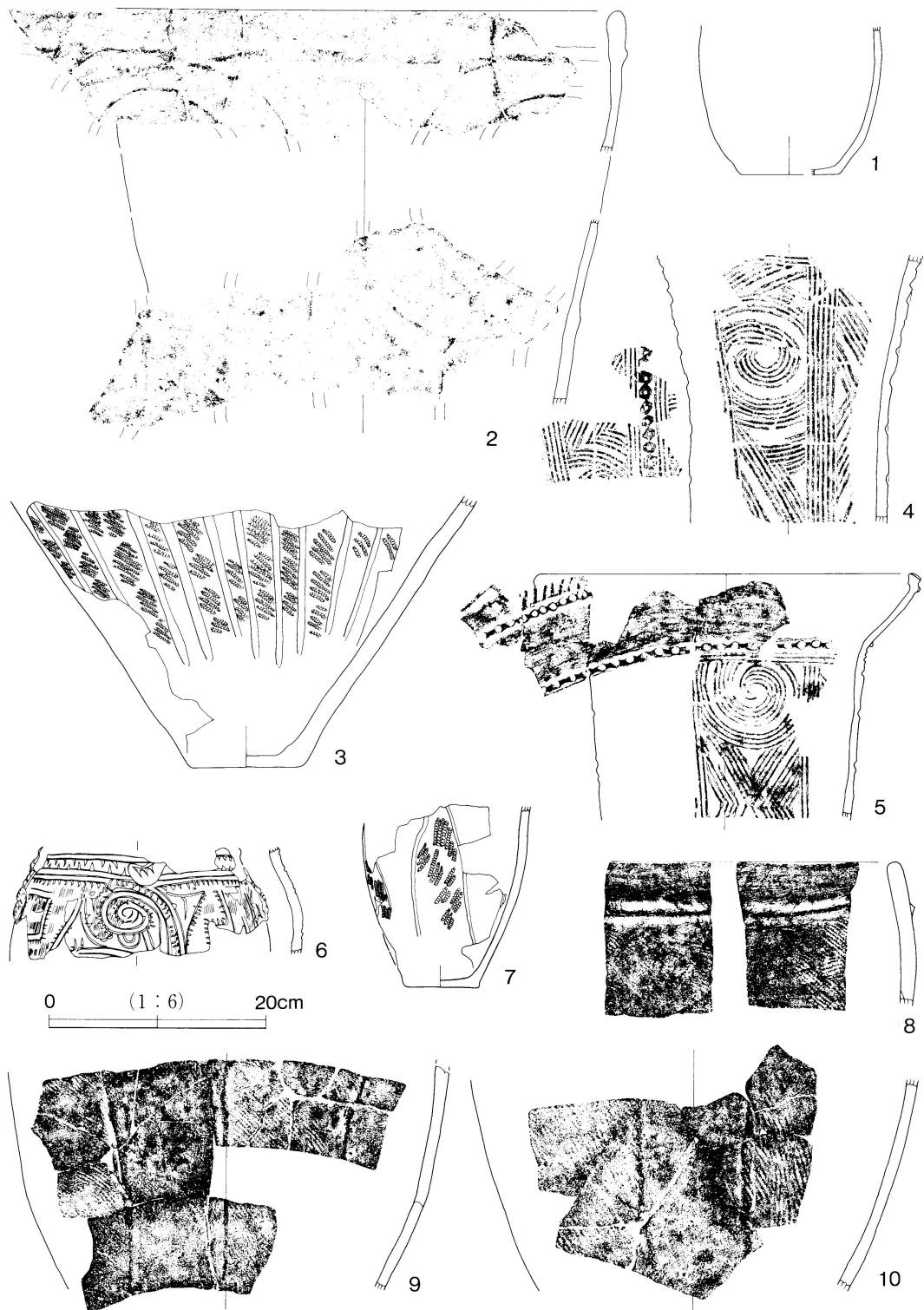
第14図 遺構実測図(12) (D55~58・65~68・75~78周辺)



第15図 埋甕断面実測図(1) (1~21号)



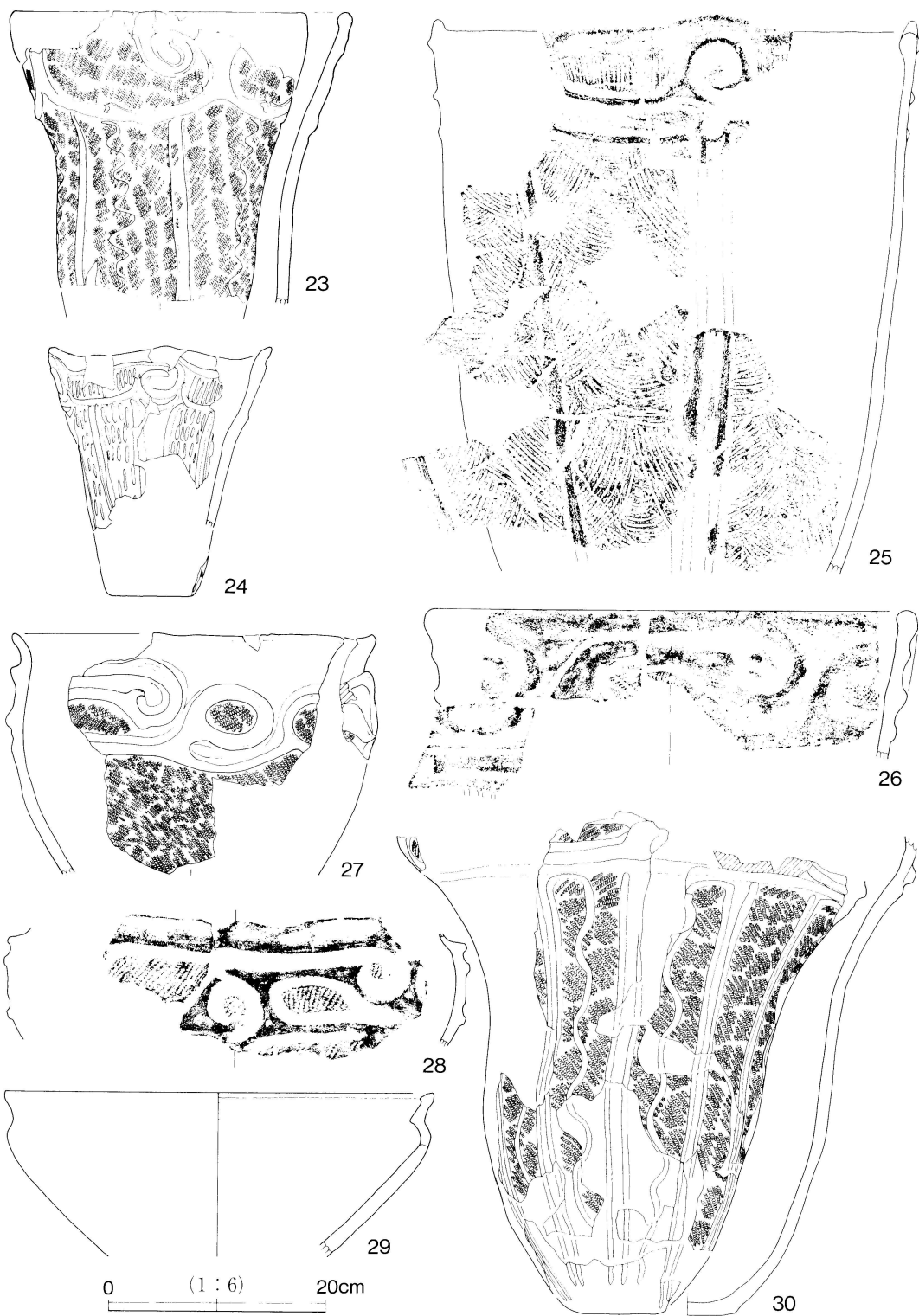
第16図 埋葬断面実測図(2) (23~45号)



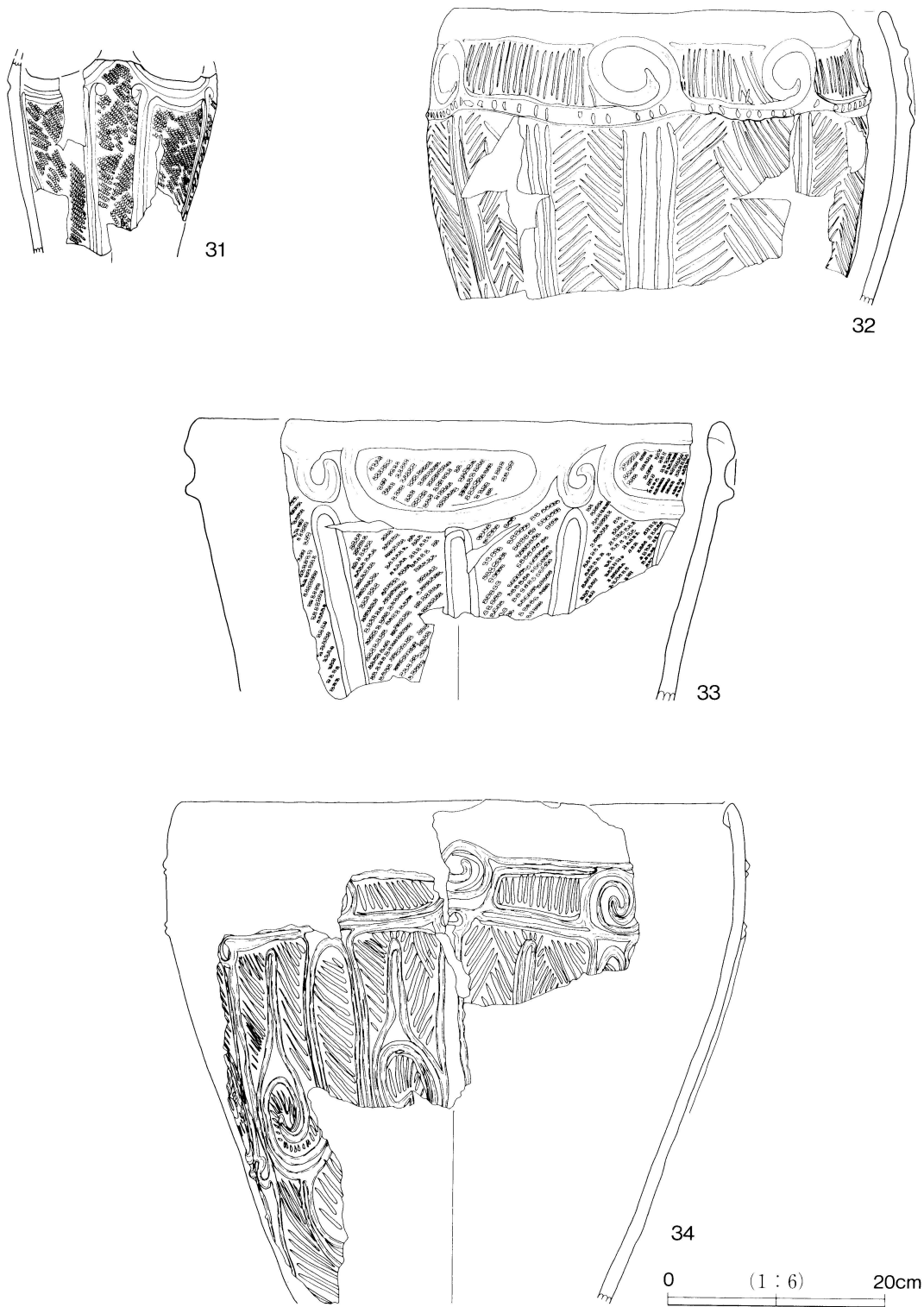
第17図 縄文土器実測図(1) (1 : 1住、2・3 : 2住、4・5 : 3住、6 : 5住、7 : 11住、8~10 : 8住)



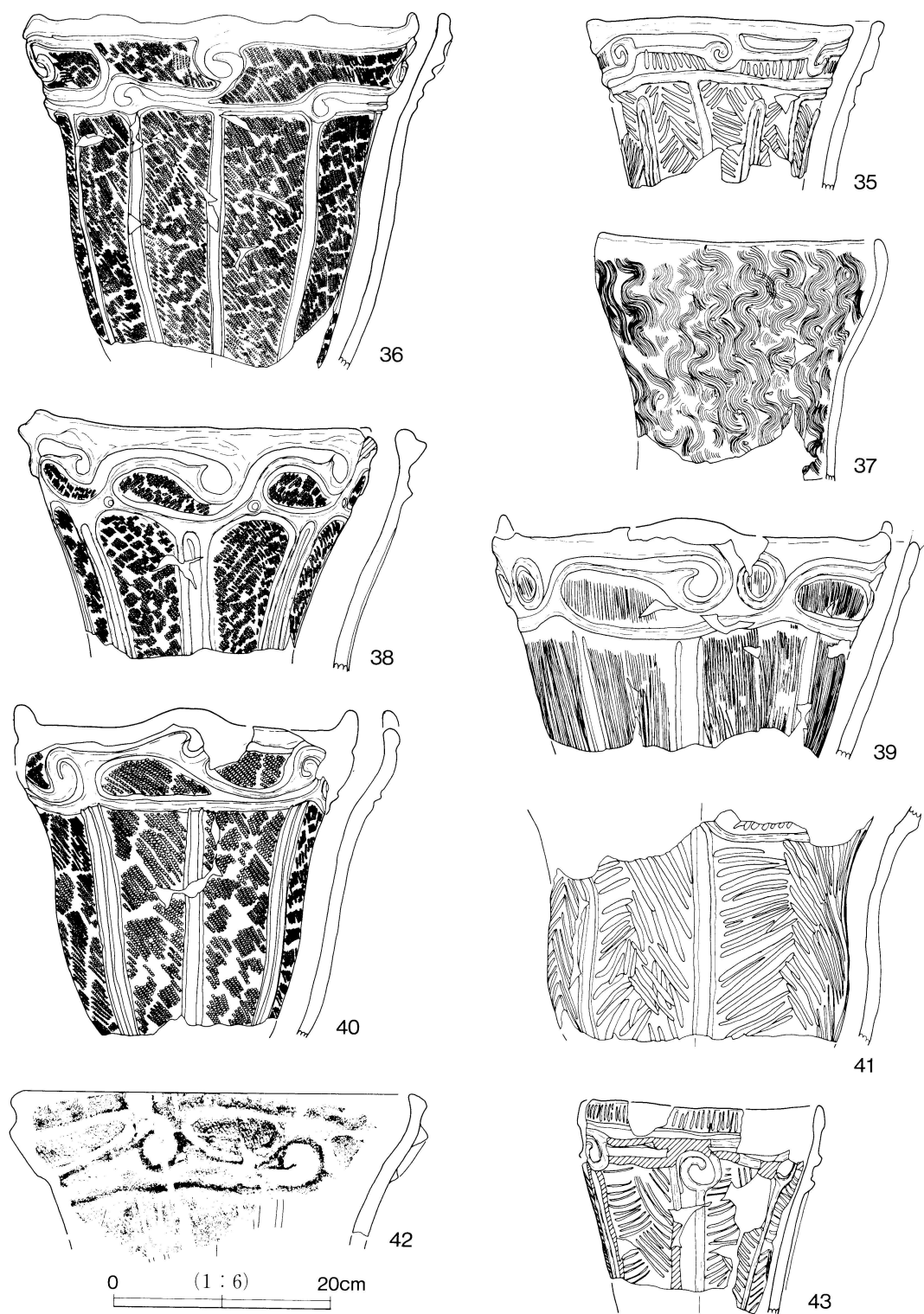
第18図 縄文土器実測図(2) (11~20: 4住、21・22: 7住)



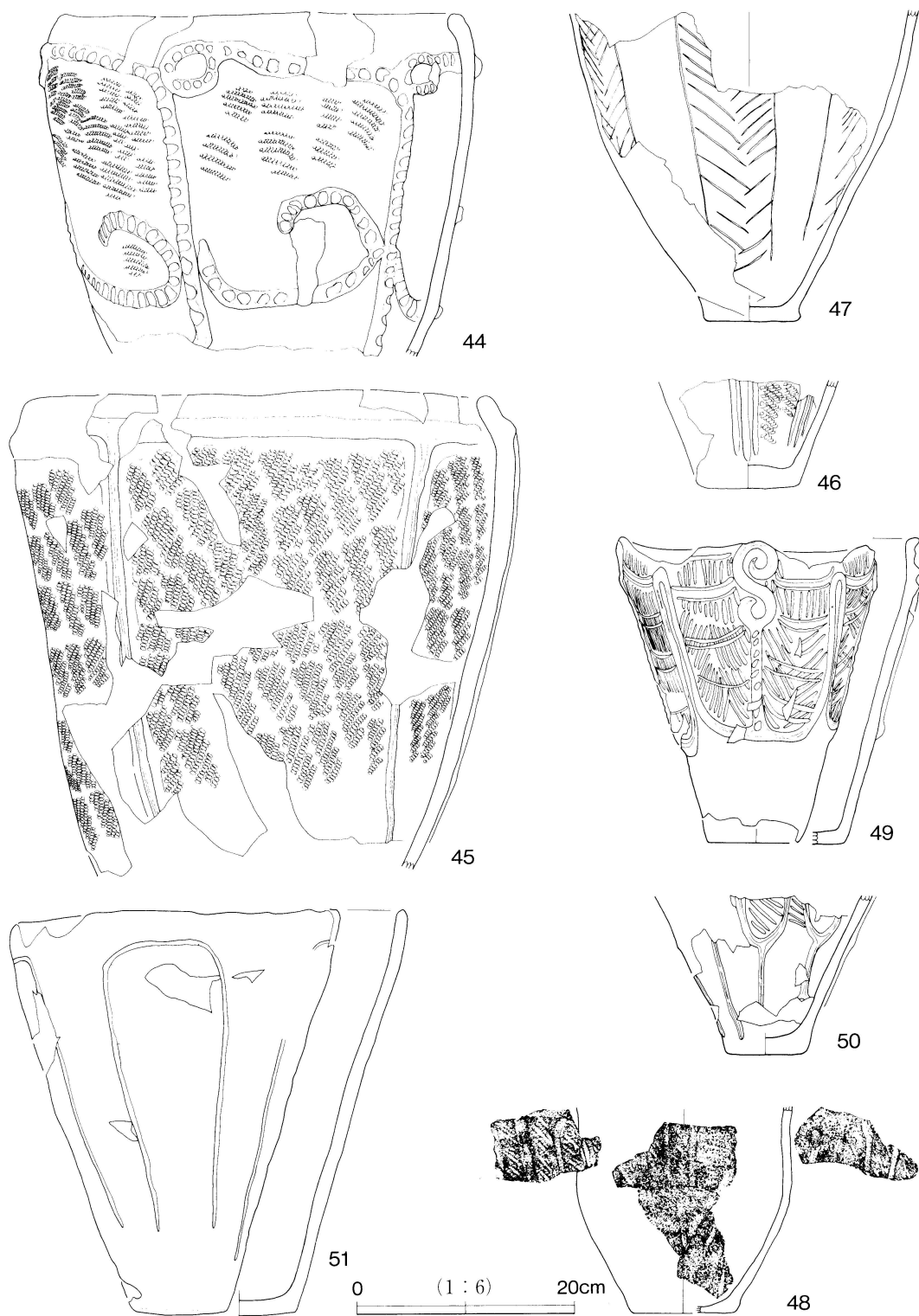
第19図 縄文土器実測図(3) (23~27 : 9 住、28・29 : 12住、30 : D-46土坑)



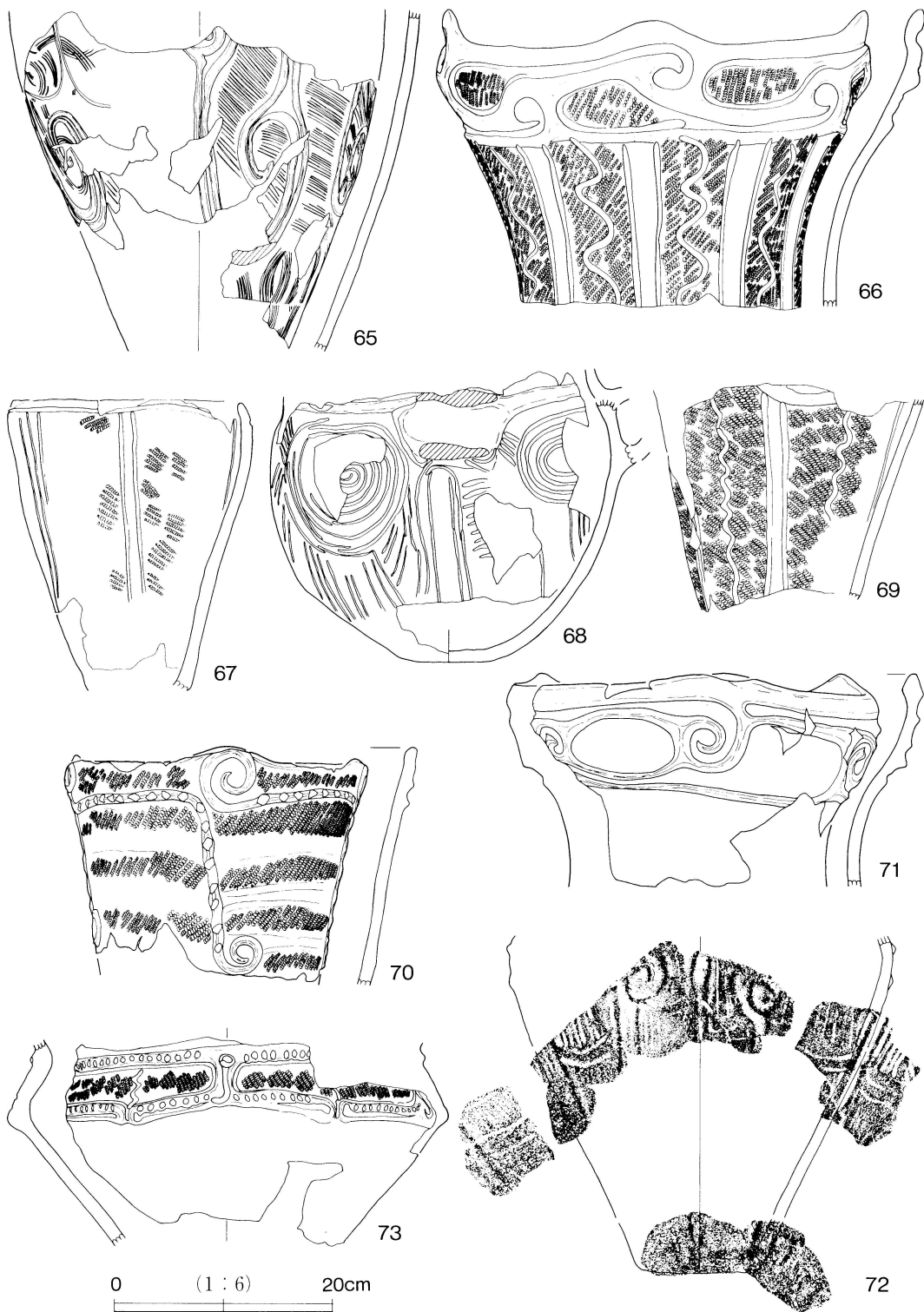
第20図 縄文土器実測図(4) (31 : 12住、32 : D-22土坑、33 : D-19土坑、34 : D-36土坑)



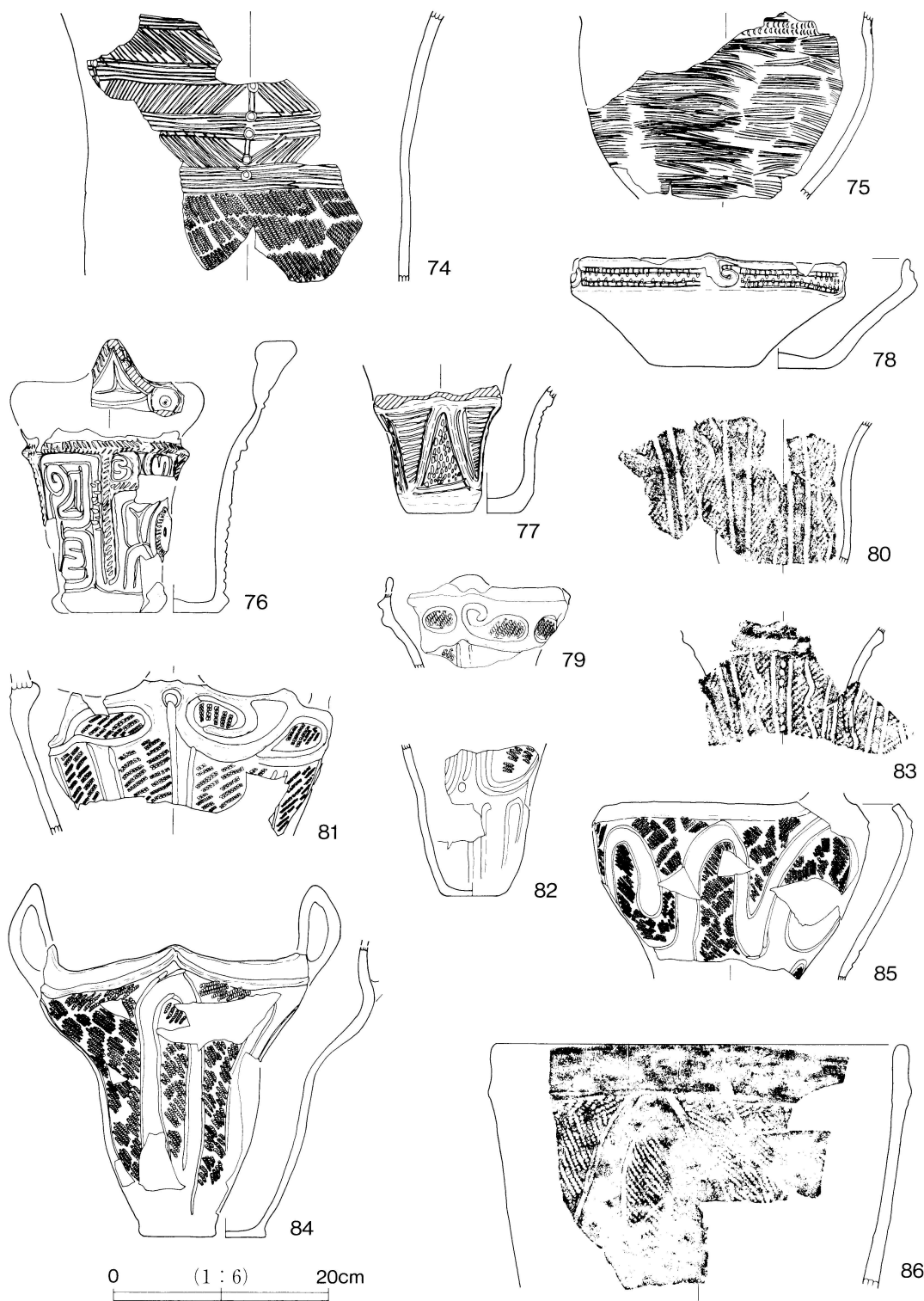
第21図 縄文土器実測図(5) (35：1埋、36：2埋、37：3埋、38：4埋、39：5埋、40：6埋、41：7埋、42：8埋、43：9埋)



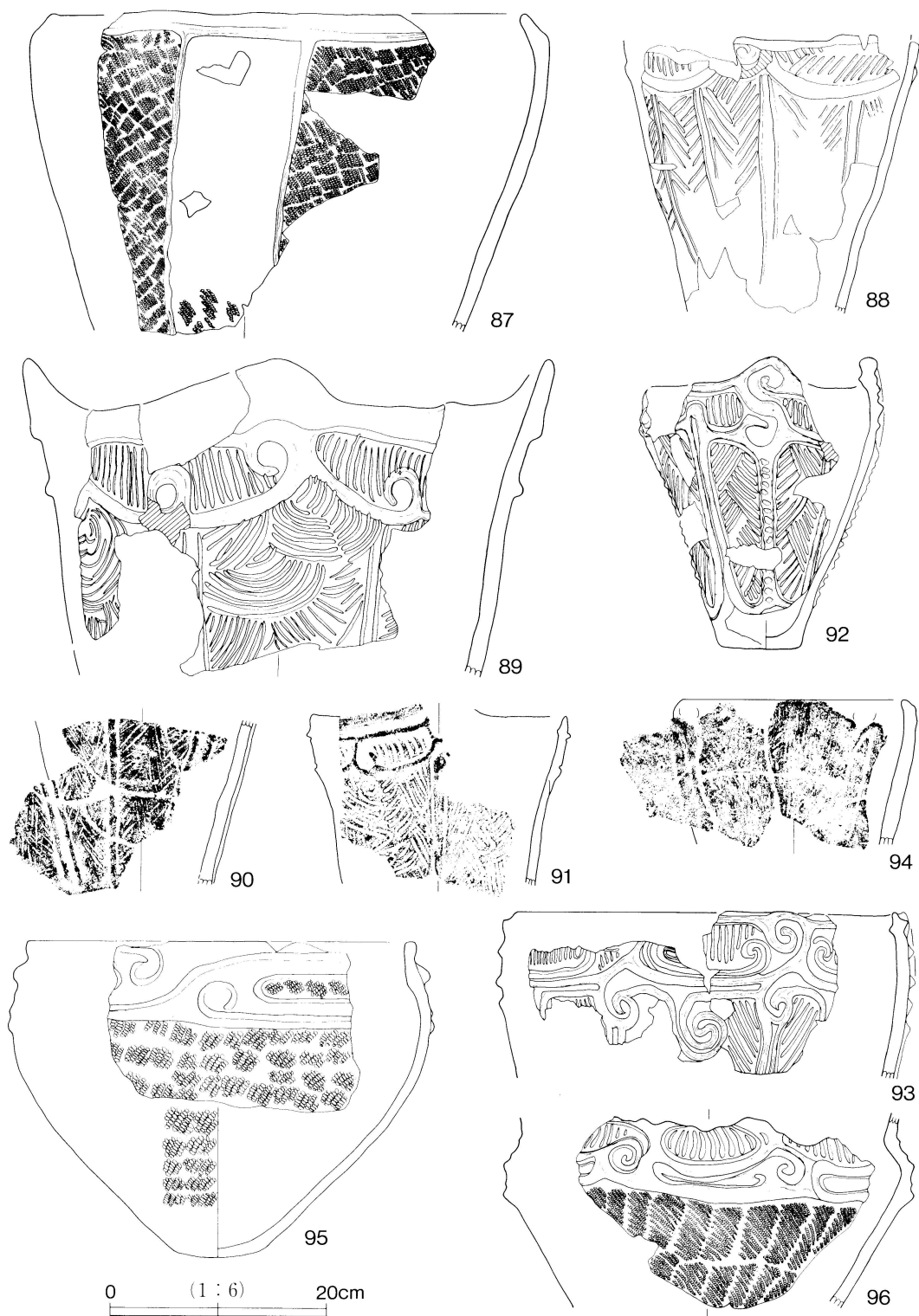
第22図 縄文土器実測図(6) (44: 10埋、45: 11埋、46: 12埋、47: 13埋、48: 14埋、49: 15埋、50: 16埋、51: 17埋)



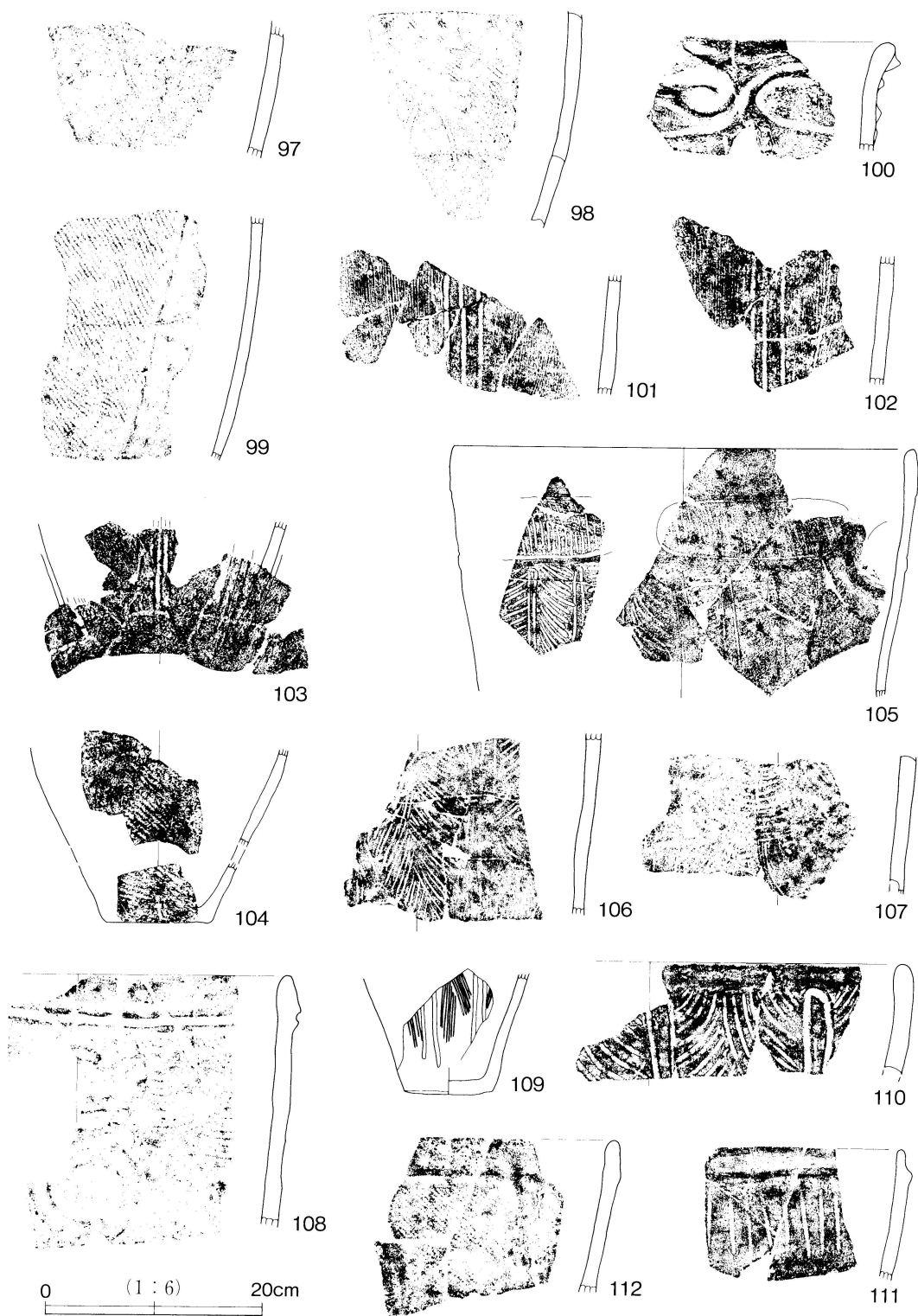
第24図 縄文土器実測図(8) (65：33埋、66：34埋、67：35埋、68：37埋、69：39埋、70：40埋、71：42埋、72：43埋、73：44埋)



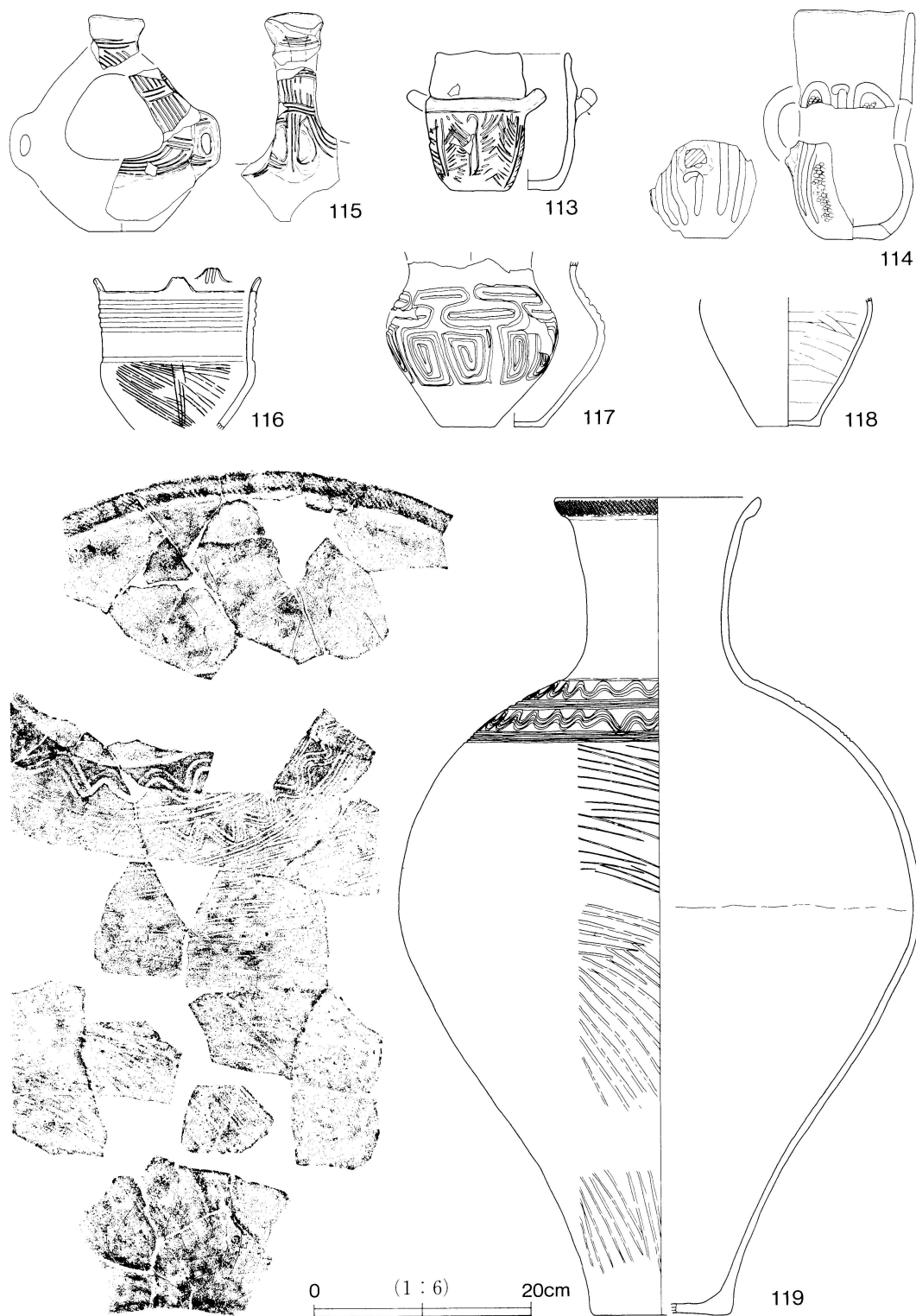
第25図 縄文土器実測図(9) (81:10住)



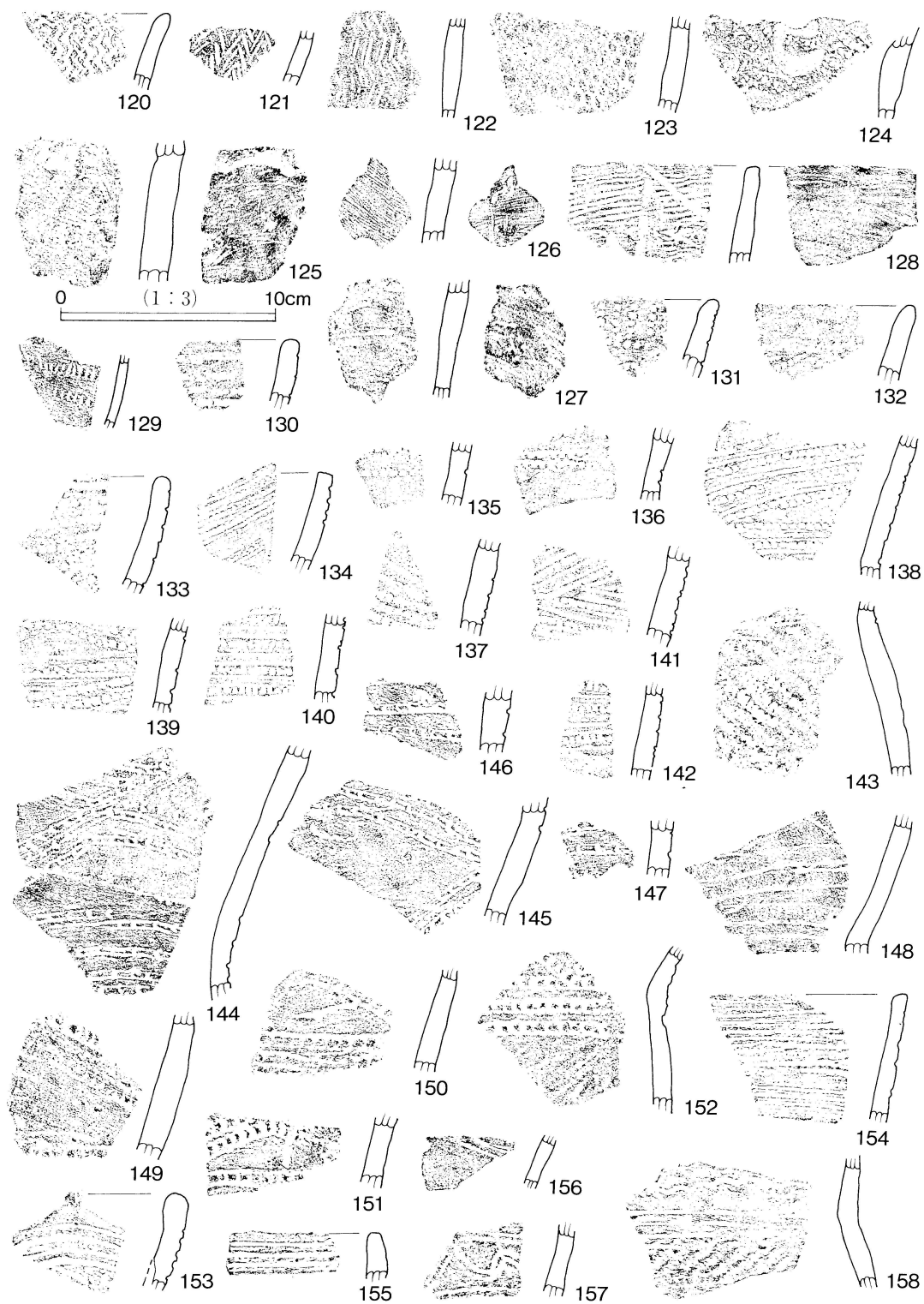
第26図 縄文土器実測図(10) (87・88：10住)



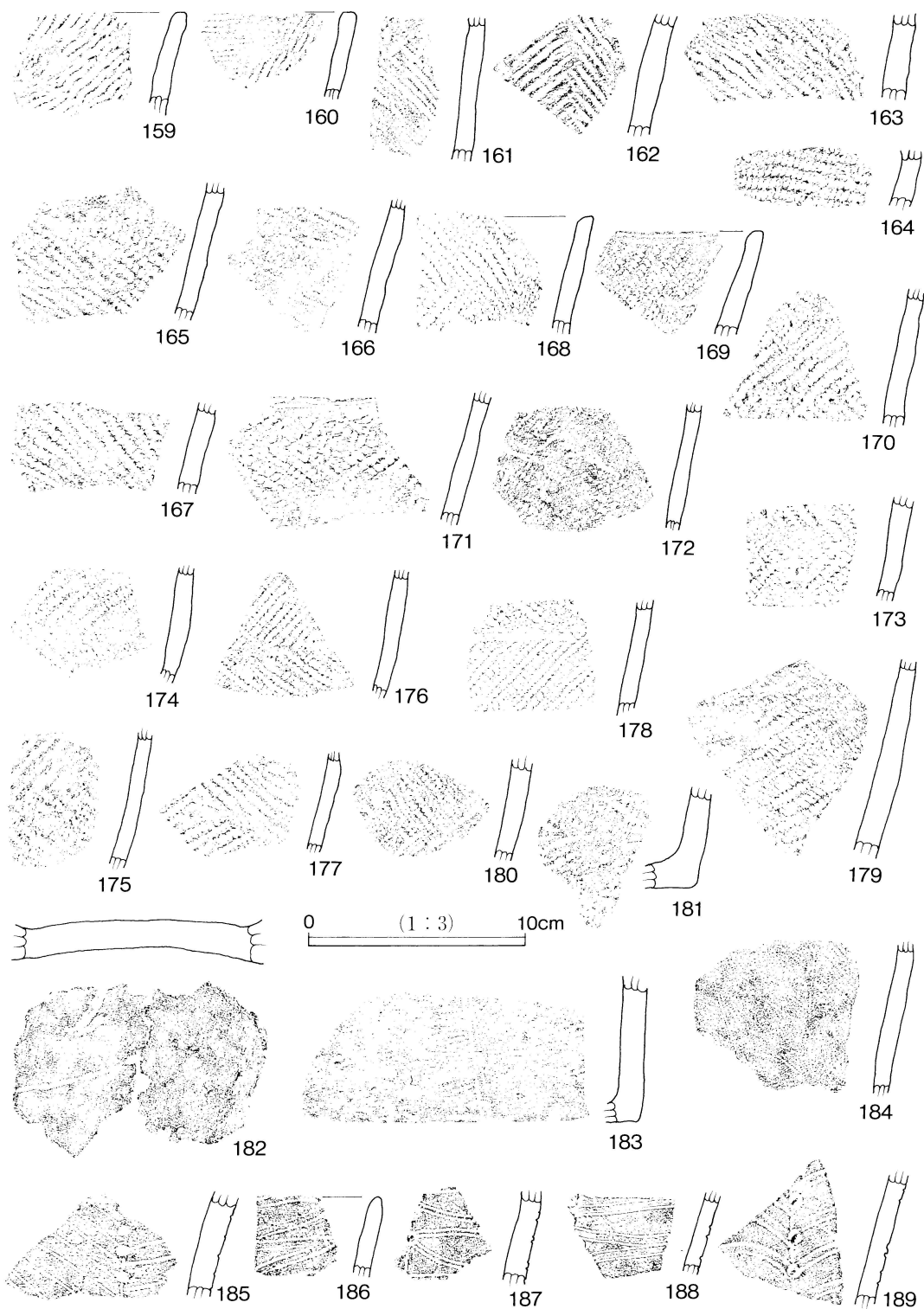
第27図 縄文土器実測図(11) (97～99：2住、100～102：9住、106・107：6住、103：45埋、104：41埋)



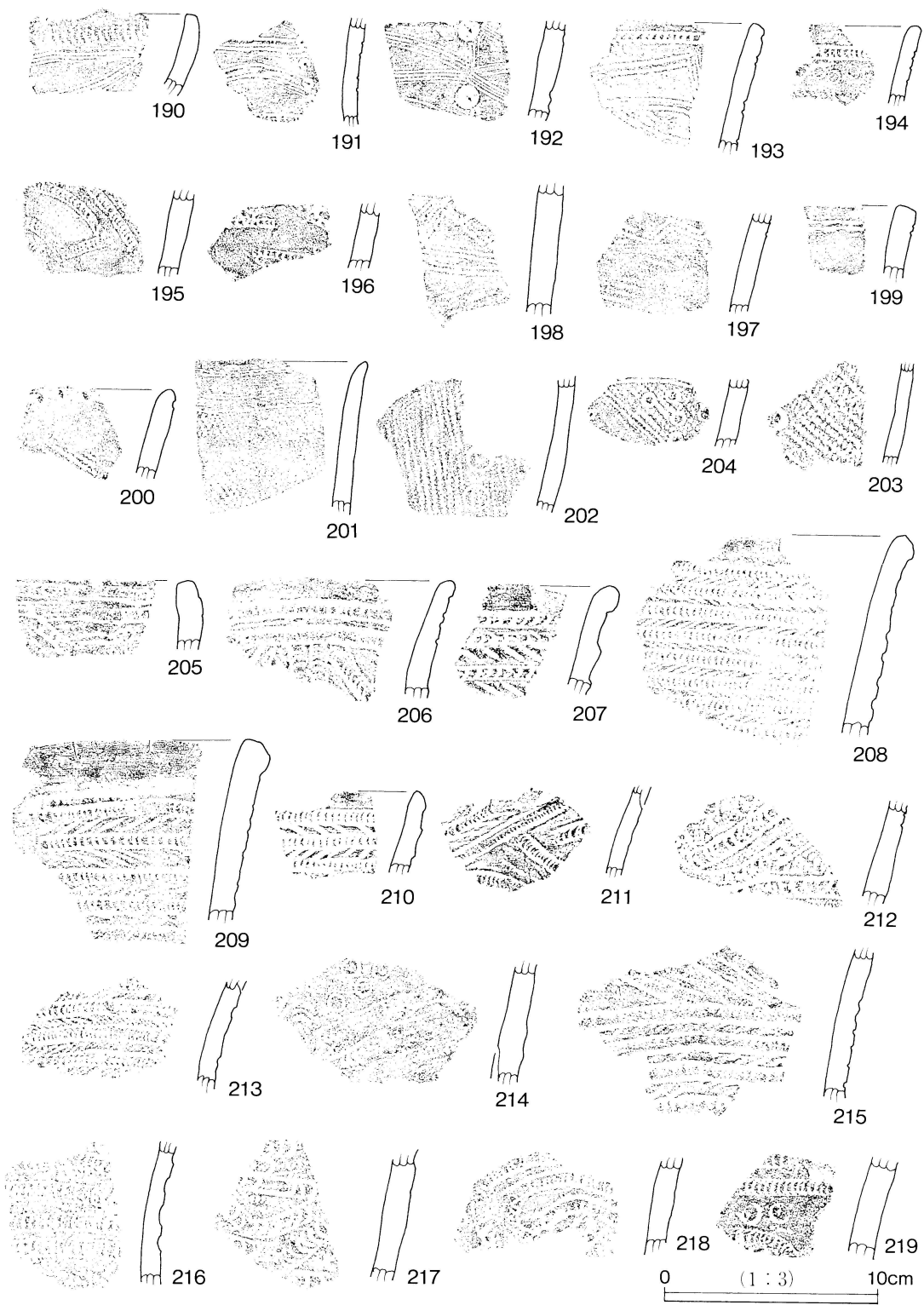
第28図 縄文土器実測図(12) (含弥生土器、118：D66土坑、119：土器棺墓)



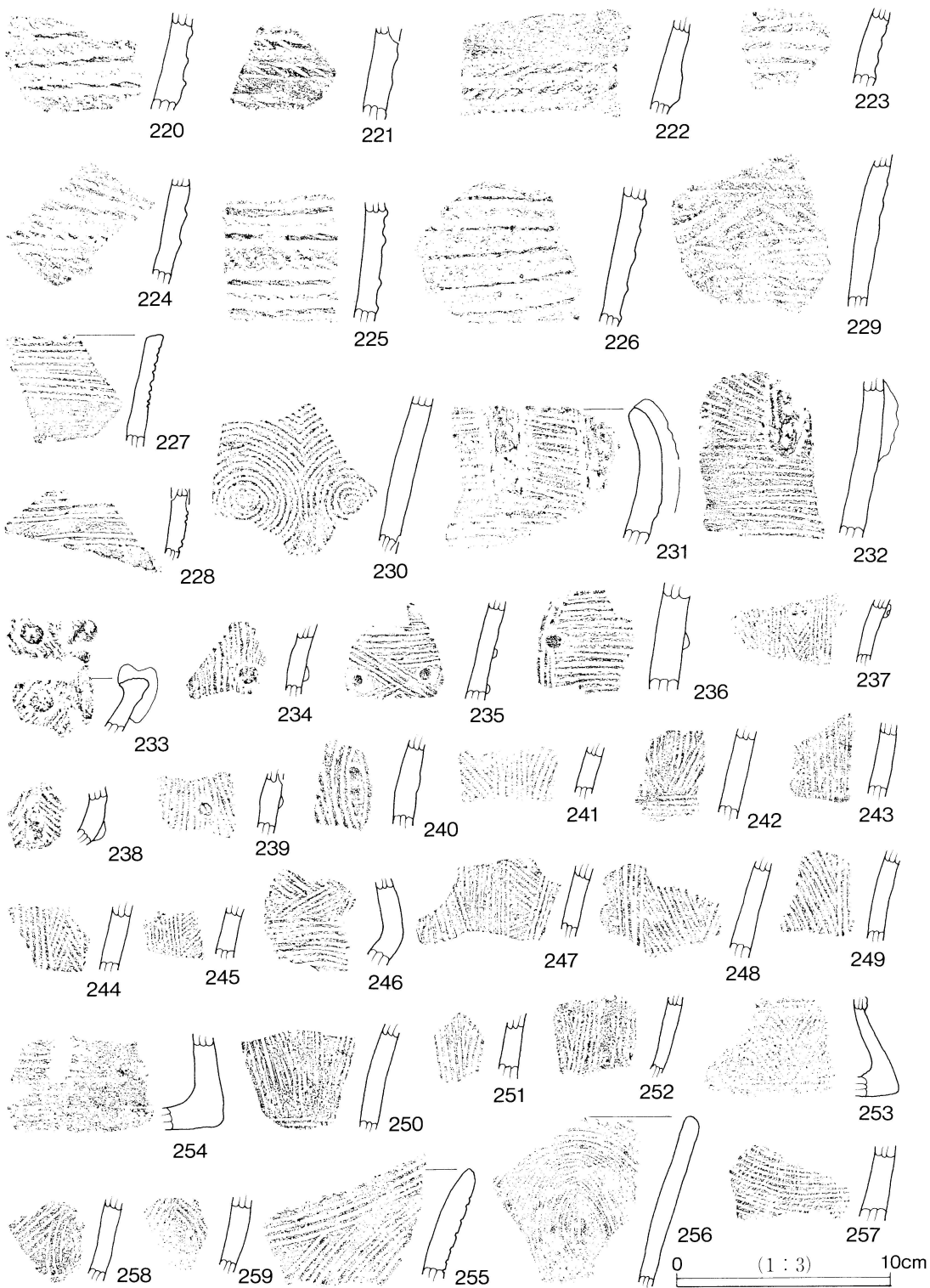
第29図 縄文土器拓本図(1)



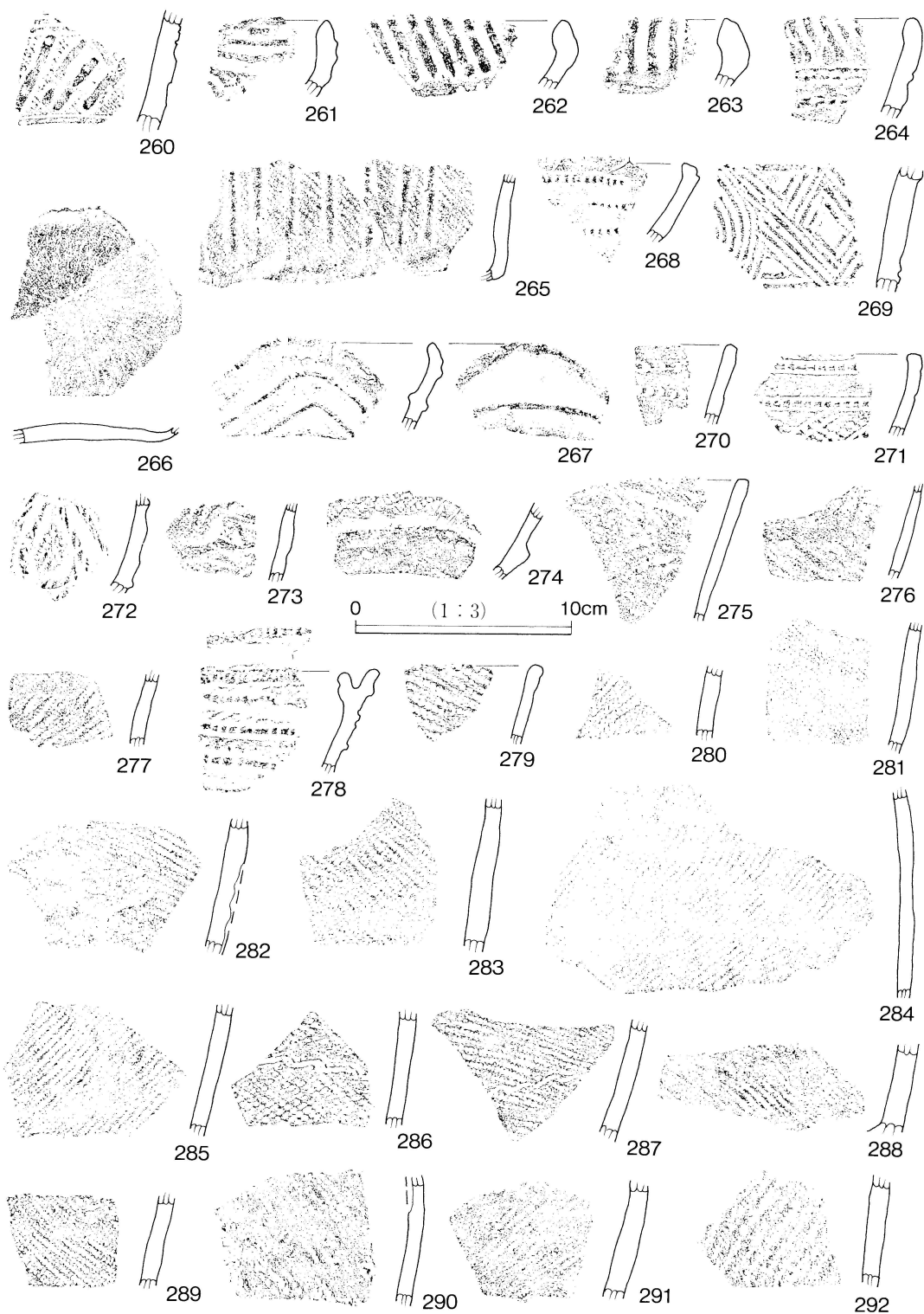
第30図 縄文土器拓本図(2)



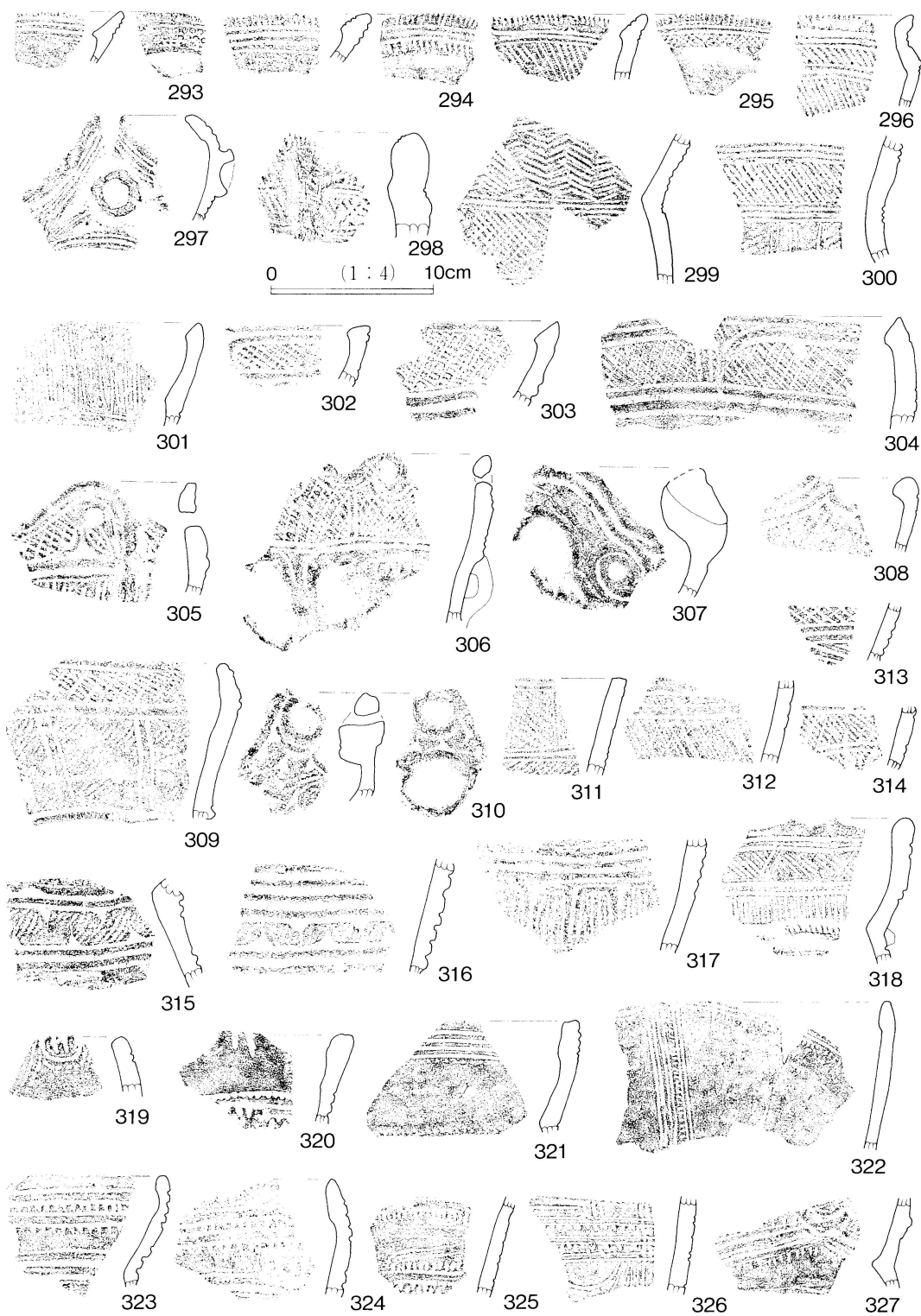
第31図 縄文土器拓本図(3)



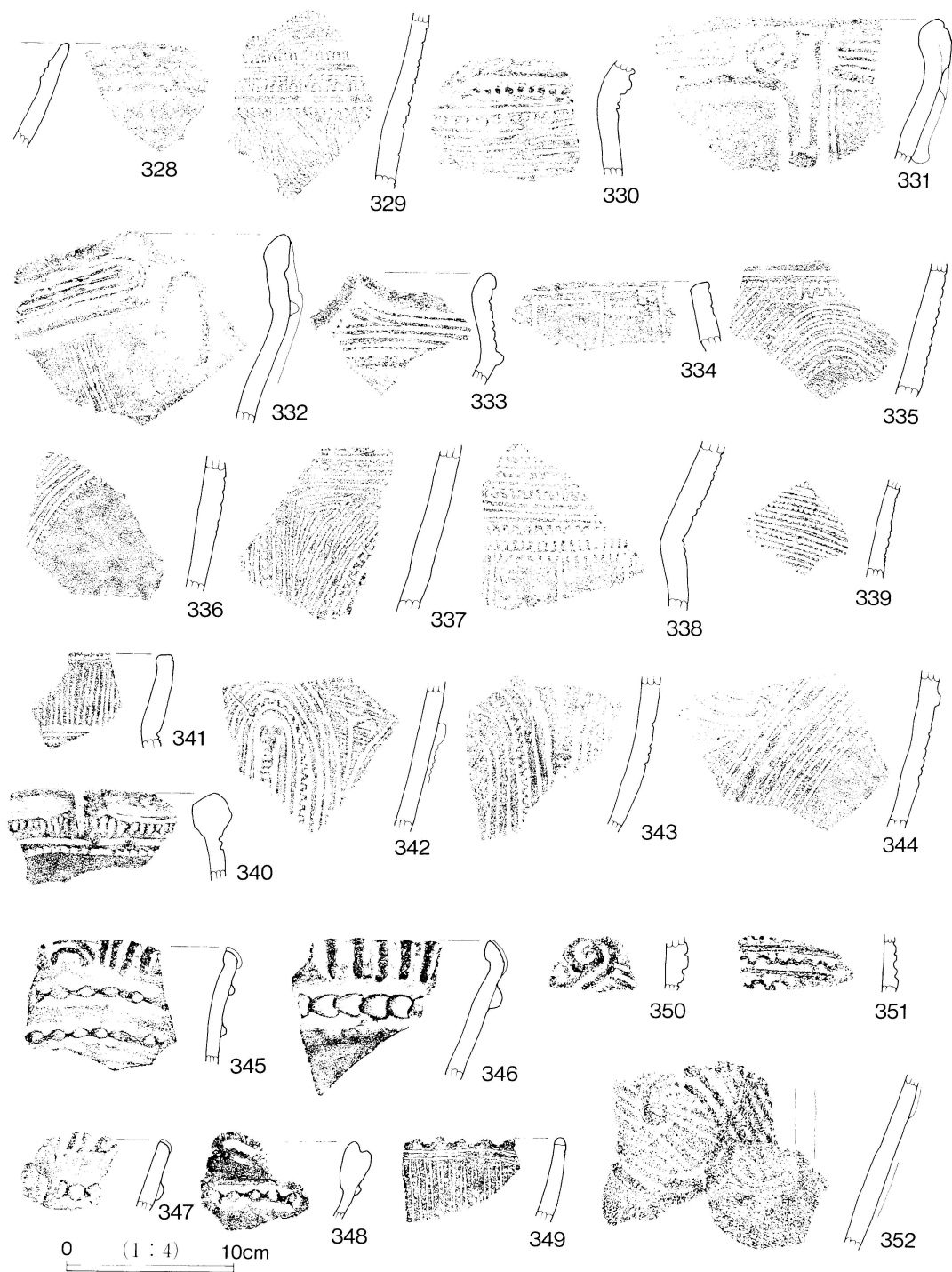
第32図 縄文土器拓本図(4)



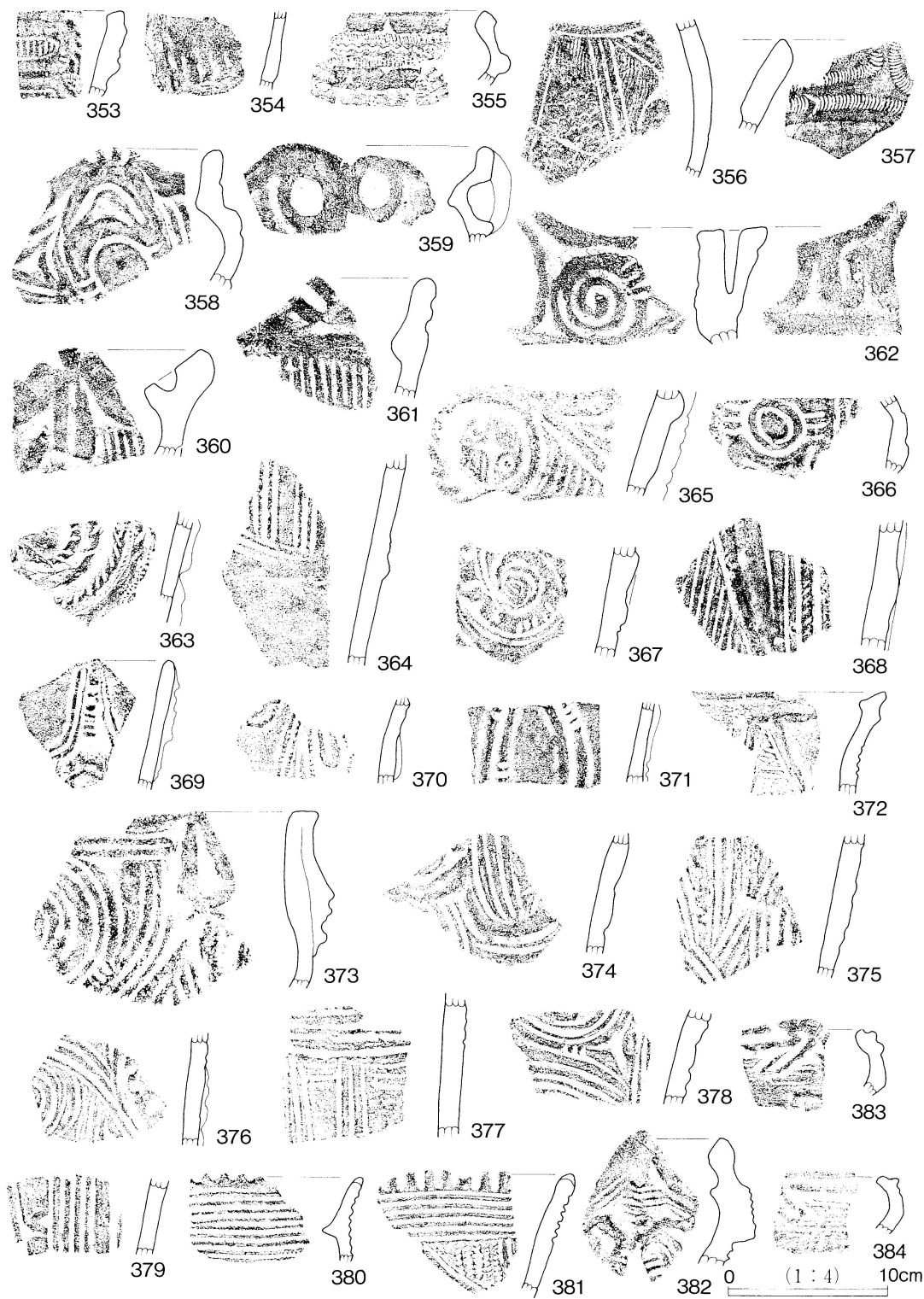
第33図 縄文土器拓本図(5)



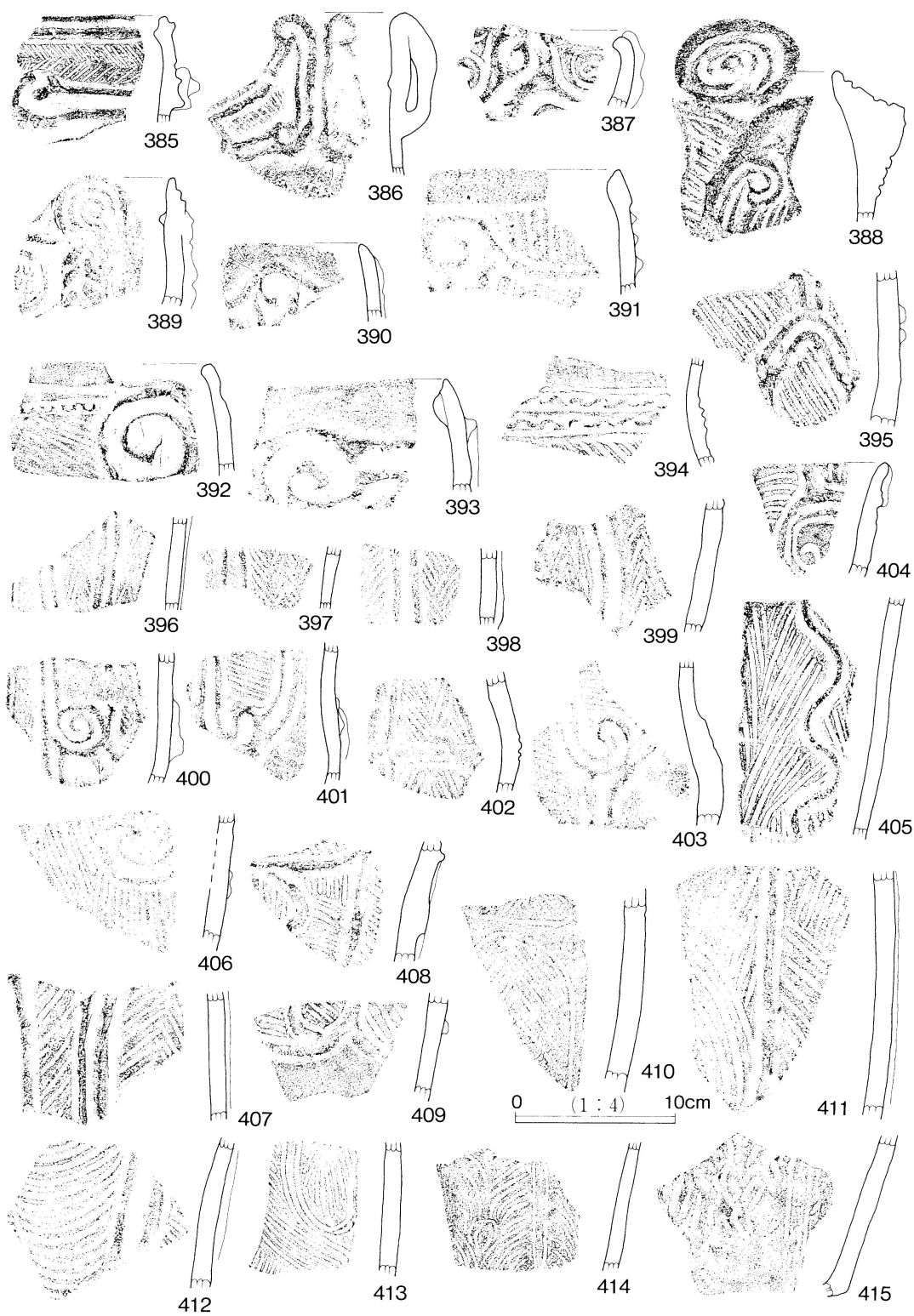
第34図 縄文土器拓本図(6)



第35図 縄文土器拓本図(7) (345~349 : 3 住、350~352 : 38 埋)



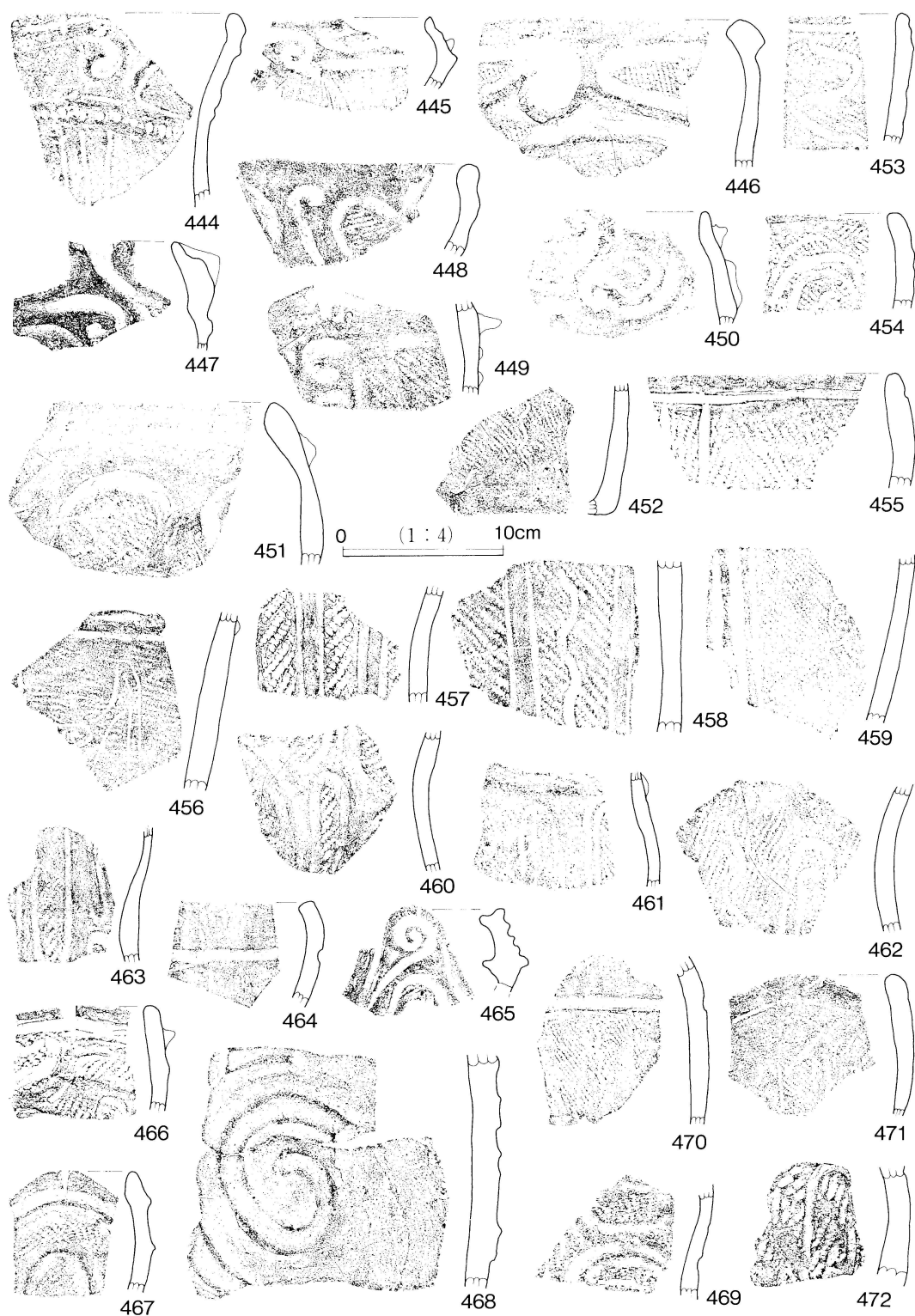
第36図 縄文土器拓本図(8)



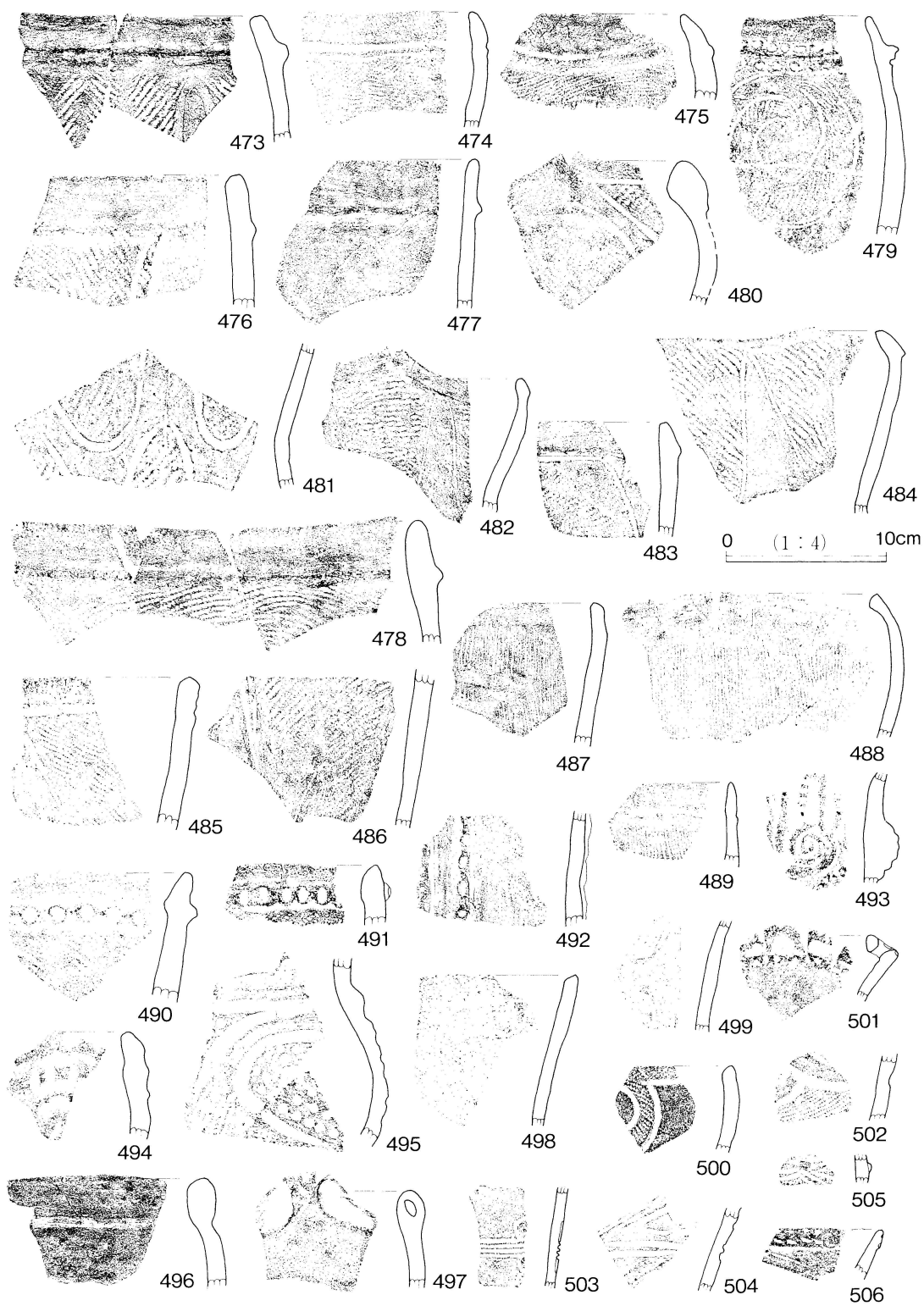
第37図 縄文土器拓本図(9)



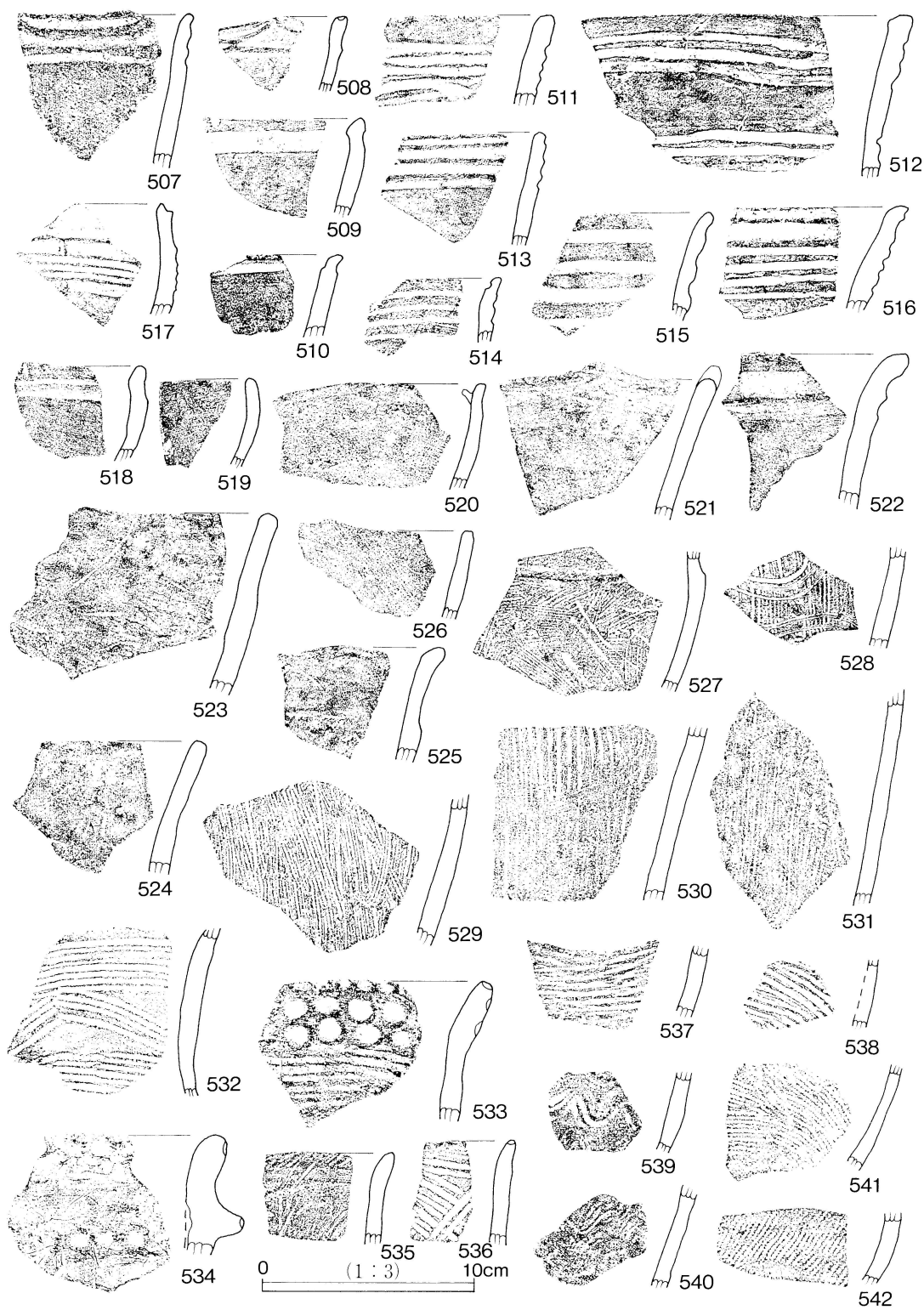
第38図 縄文土器拓本図(10)



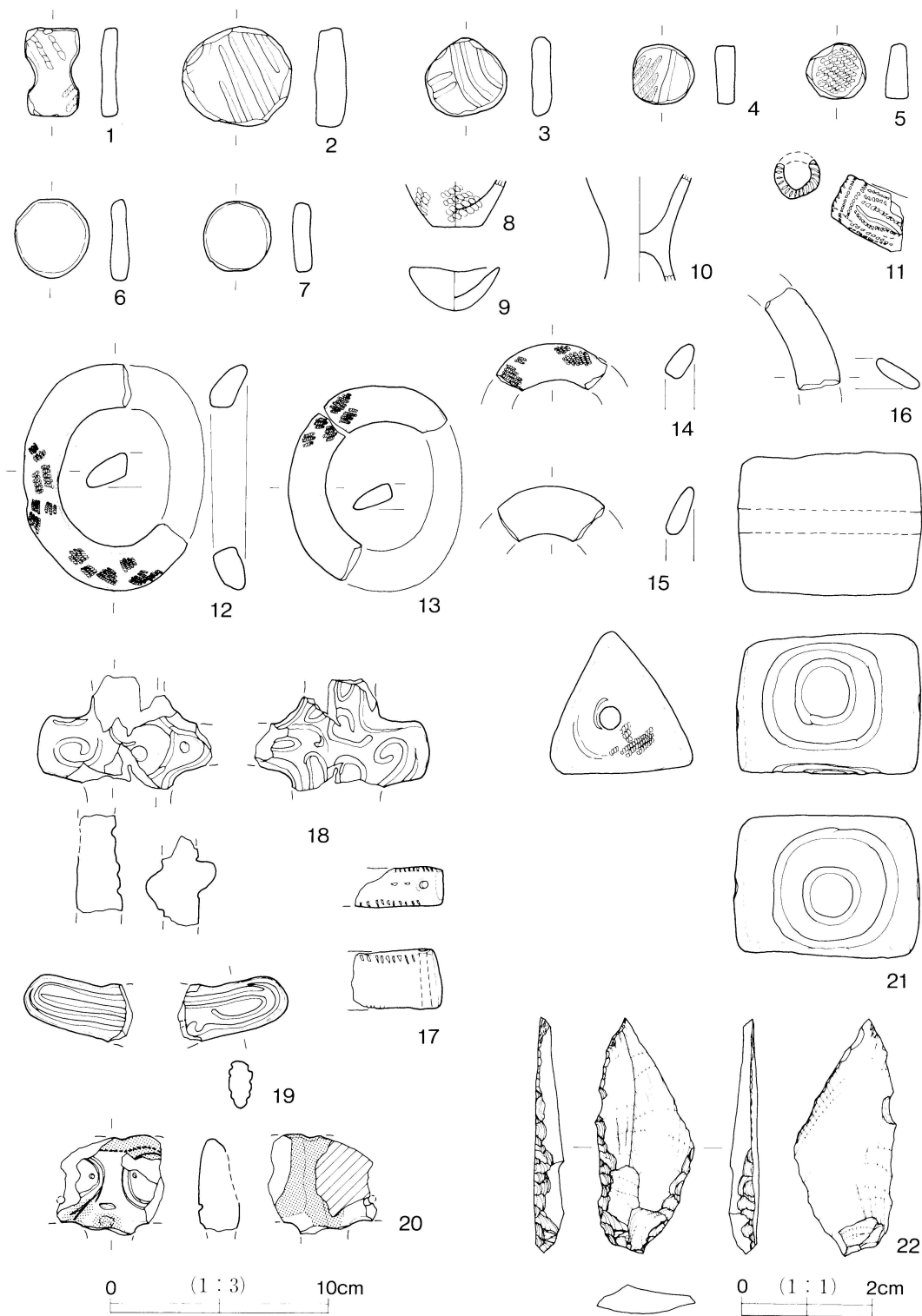
第39図 縄文土器拓本図(11)



第40図 縄文土器拓本図(12)

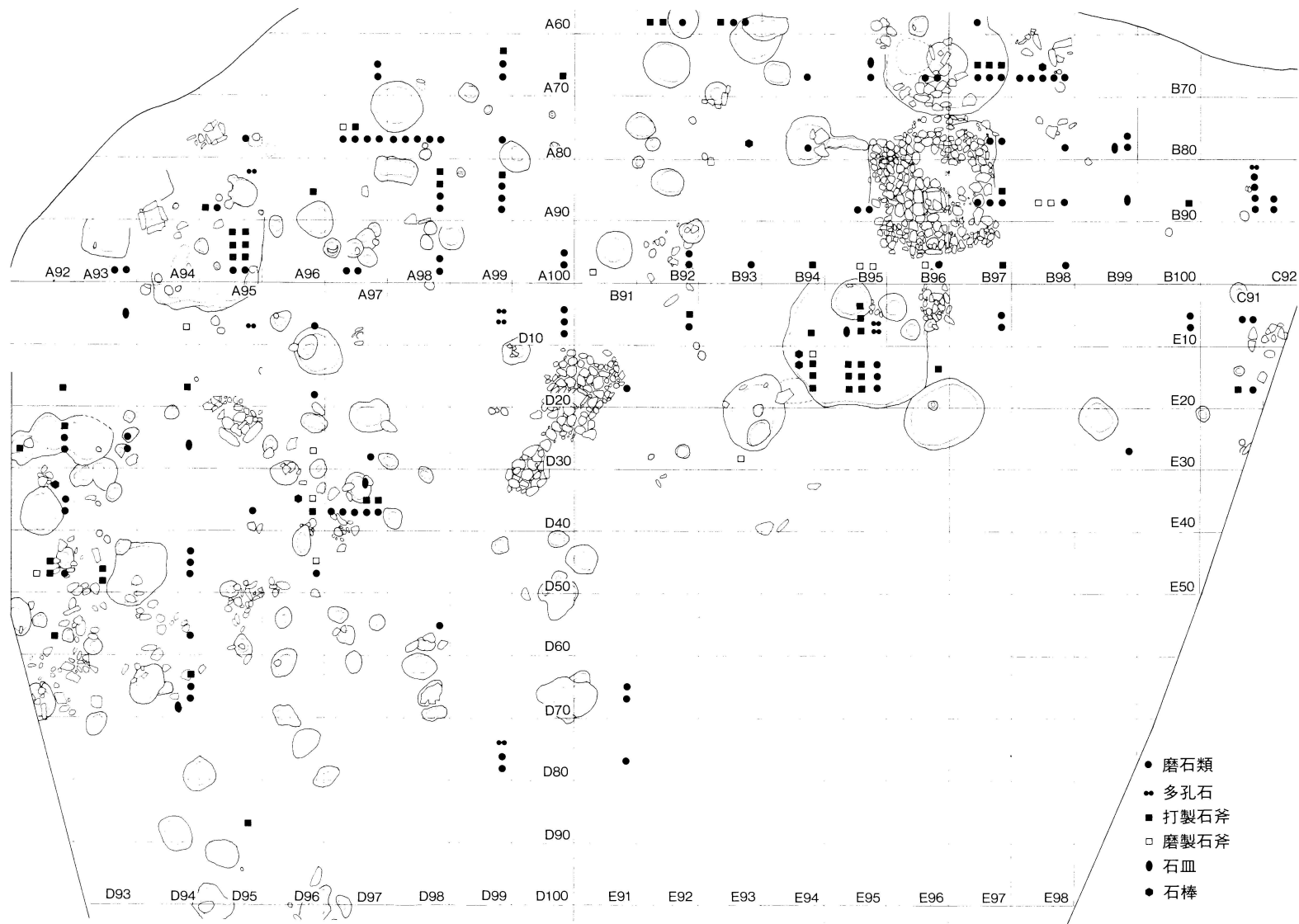


第41図 縄文土器拓本図(13) (含弥生土器)

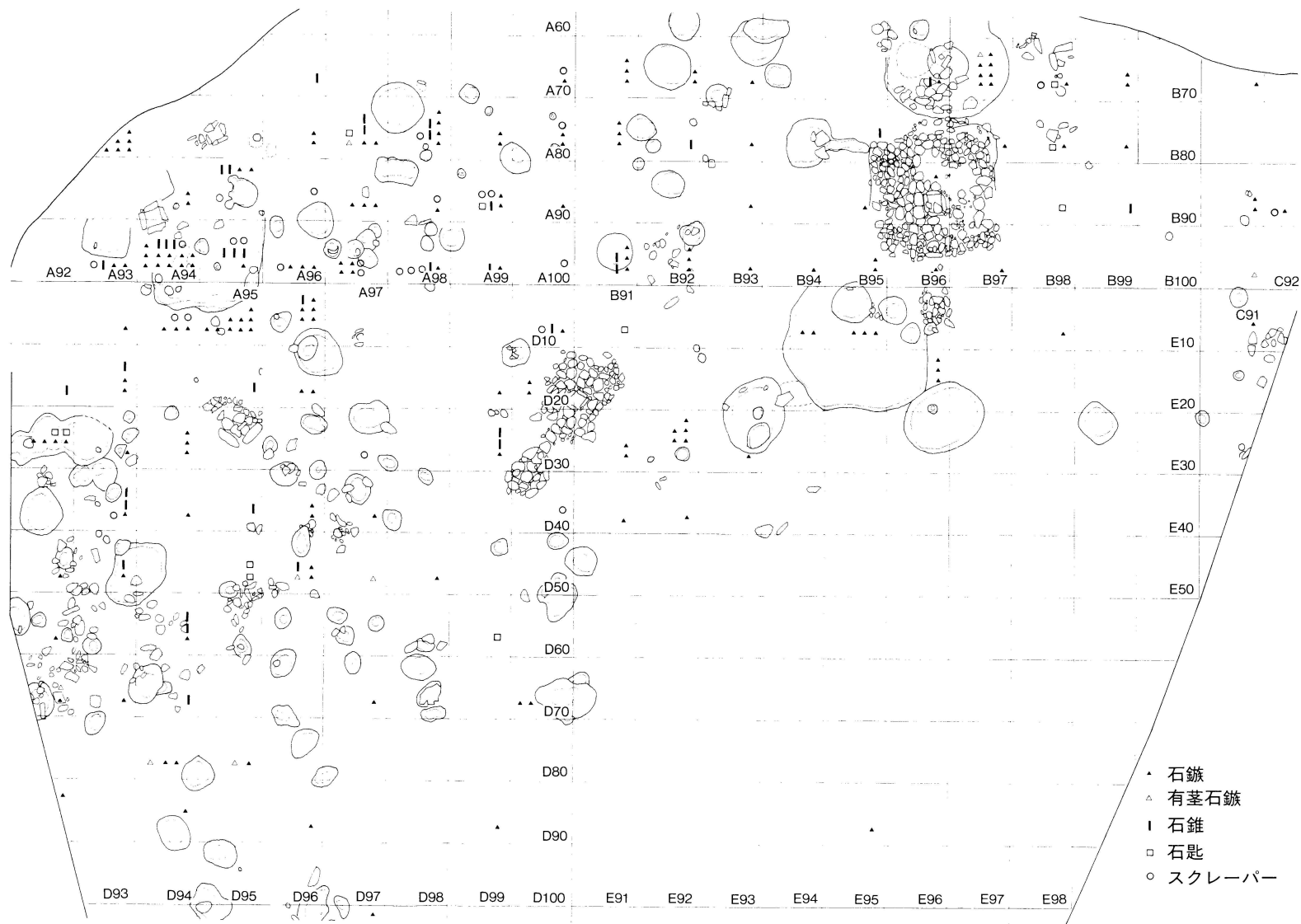


第42図 土製品 (1~21)・ナイフ形石器(22)実測図

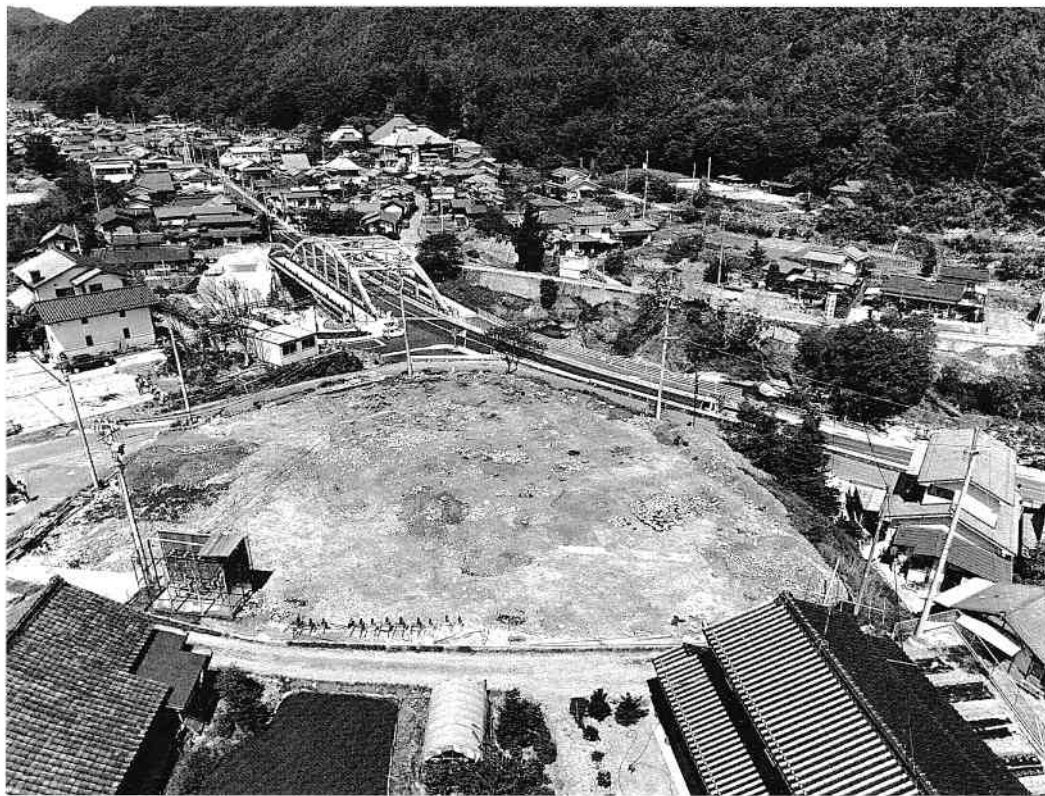
第43図 大形石器等分布図 (1 : 200)



第44図 小形石器分布図 (1 : 200)



写真図版

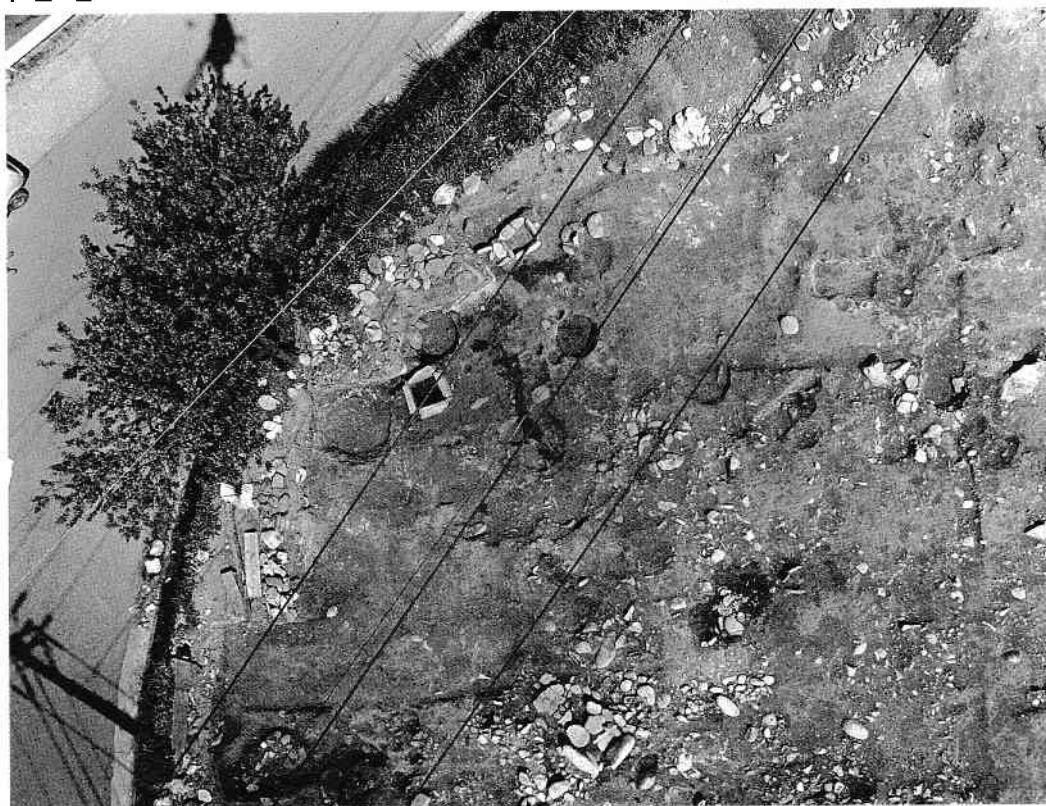


1.全景（東から空撮）

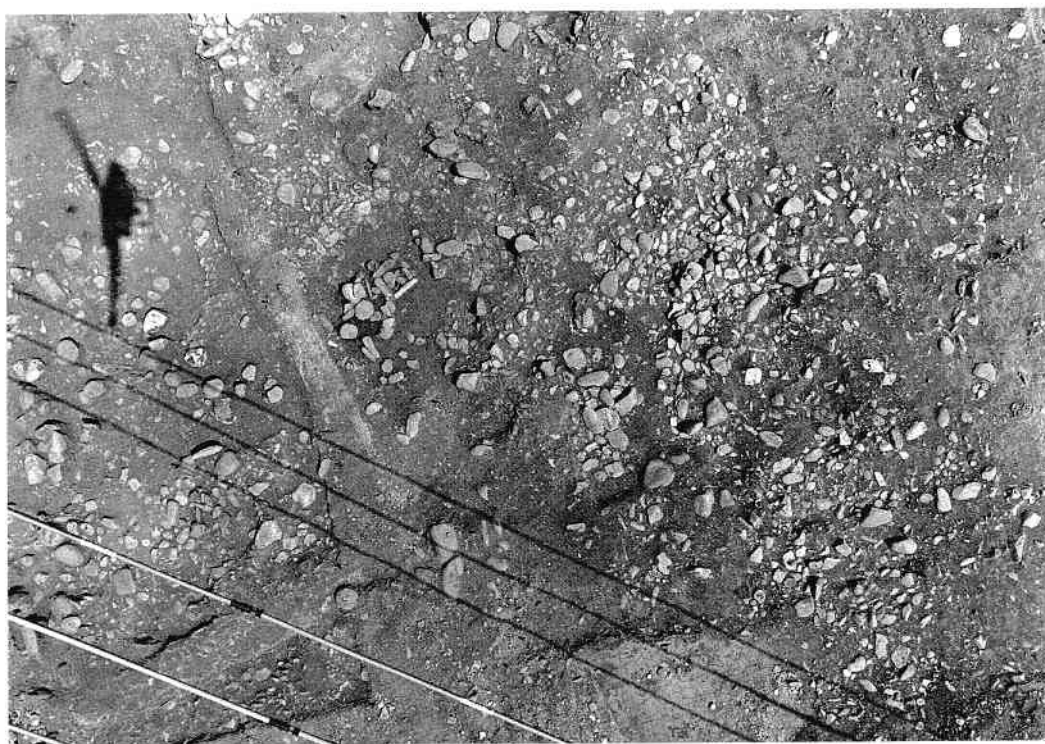


2.全景（垂直空撮）

PL- 2



1 .A 地区空撮



2 .D 地区空撮



1. 遺跡全景（北から）



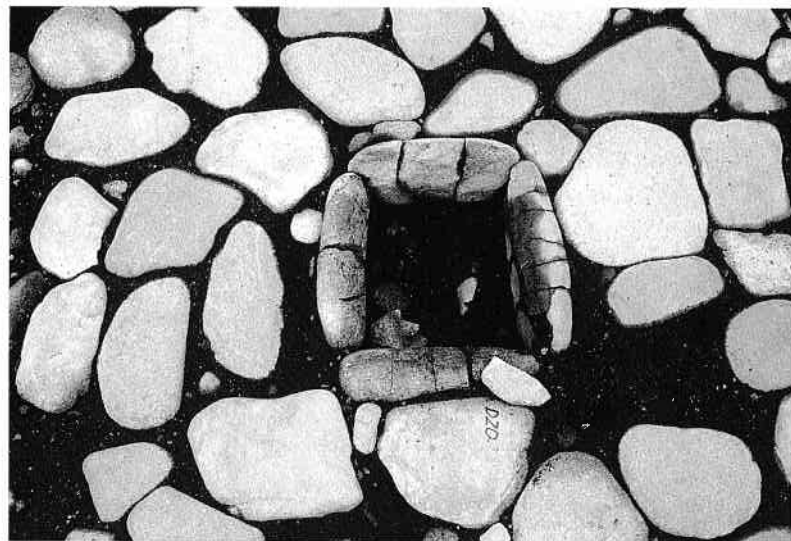
2. 3号住居址



3. 4号住居址



4. 9号住居址



1. 1号住居址炉



2. 1号住居址張出部



3. 2号住居址主体部



4. 土器棺墓



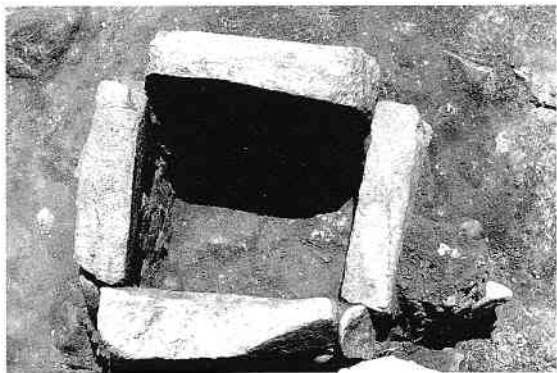
1. 2号住居址炉



2. 同埋甕



3. 6号住居址炉



4. 7号住居址炉



5. 8号住居址炉



6. 10号住居址炉



7. 11号住居址炉



8. 12号住居址炉



1. 2号埋甕



2. 同断面



3. 3(中)・4(前)・5(後)号埋甕



4. 3号埋甕断面



5. 5号埋甕



6. 同断面



7. 6(右)・7(左)号埋甕



8. 同断面

PL-8



1.10(右)·11(左)号埋甕



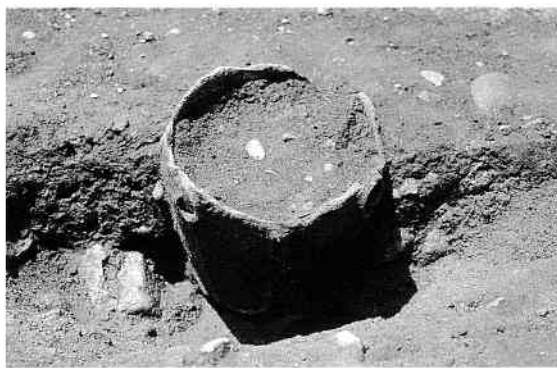
2.同断面



3.13号埋甕



4.14号埋甕



5.15号埋甕



6.18号埋甕



7.17号埋甕



8.同断面



1.19号埋甕断面



2.20号同埋甕



3.23号埋甕断面



4.27号埋甕



5.28号埋甕



6.29号埋甕



7.30(右)・31(左)号埋甕



8.32号埋甕



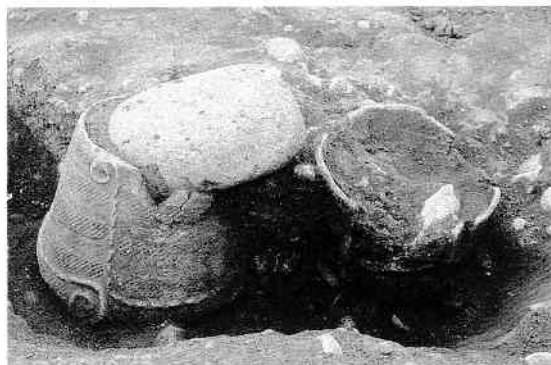
1. 34号埋甕



2. 35(左)・36(中)・37(右)号埋甕



3. 38号埋甕



4. 39(右)・40(左)号埋甕



5. 42号埋甕



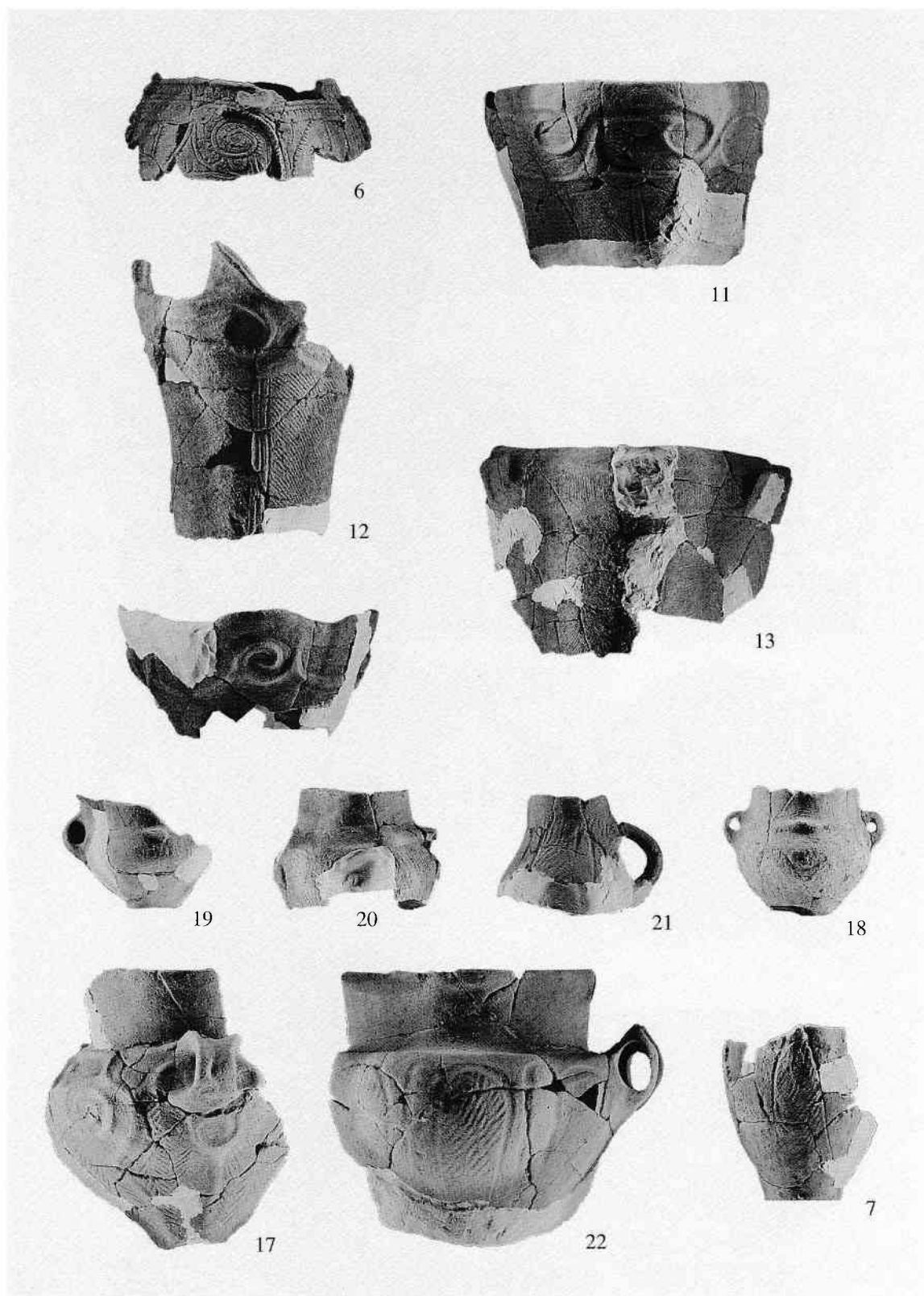
6. 43(下)・44(上)号埋甕



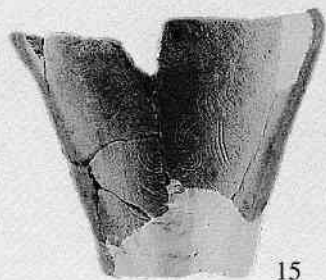
7. E86釣手土器出土状態



8. 調査区中央(手前に1号、後方に2号住居址)



縄文土器 (1)



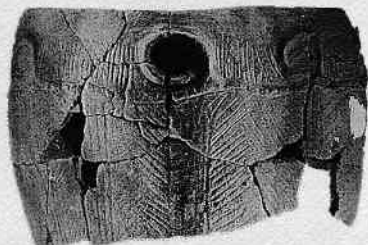
15



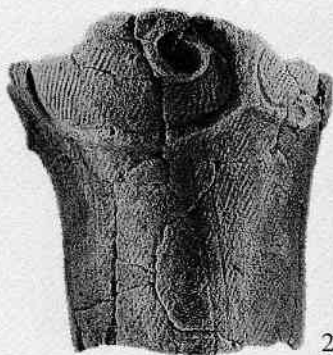
33



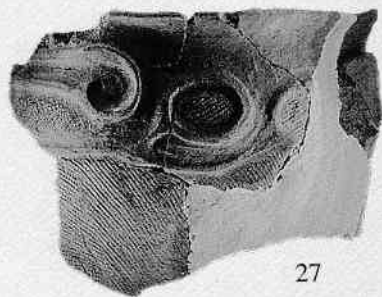
16



32



23



27



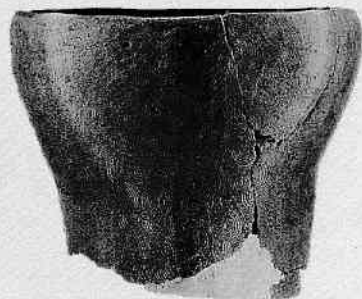
34



31



35



37



24



43



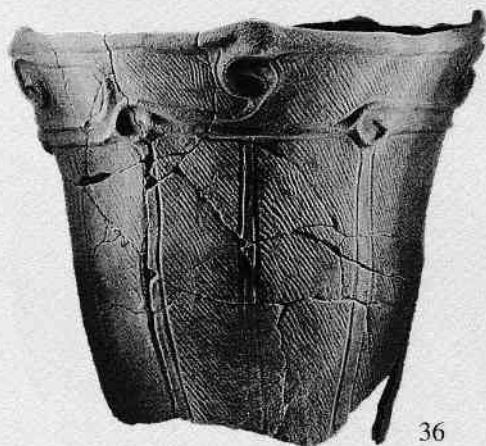
40



41



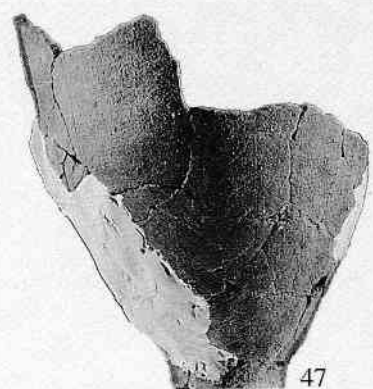
39



36



38



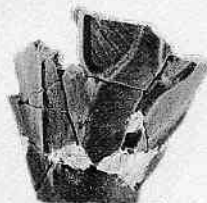
47



49



64



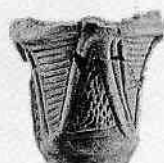
50



51



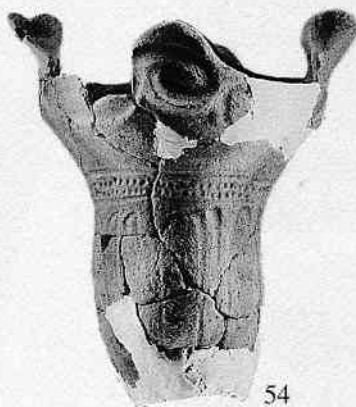
52



77



59



54



76



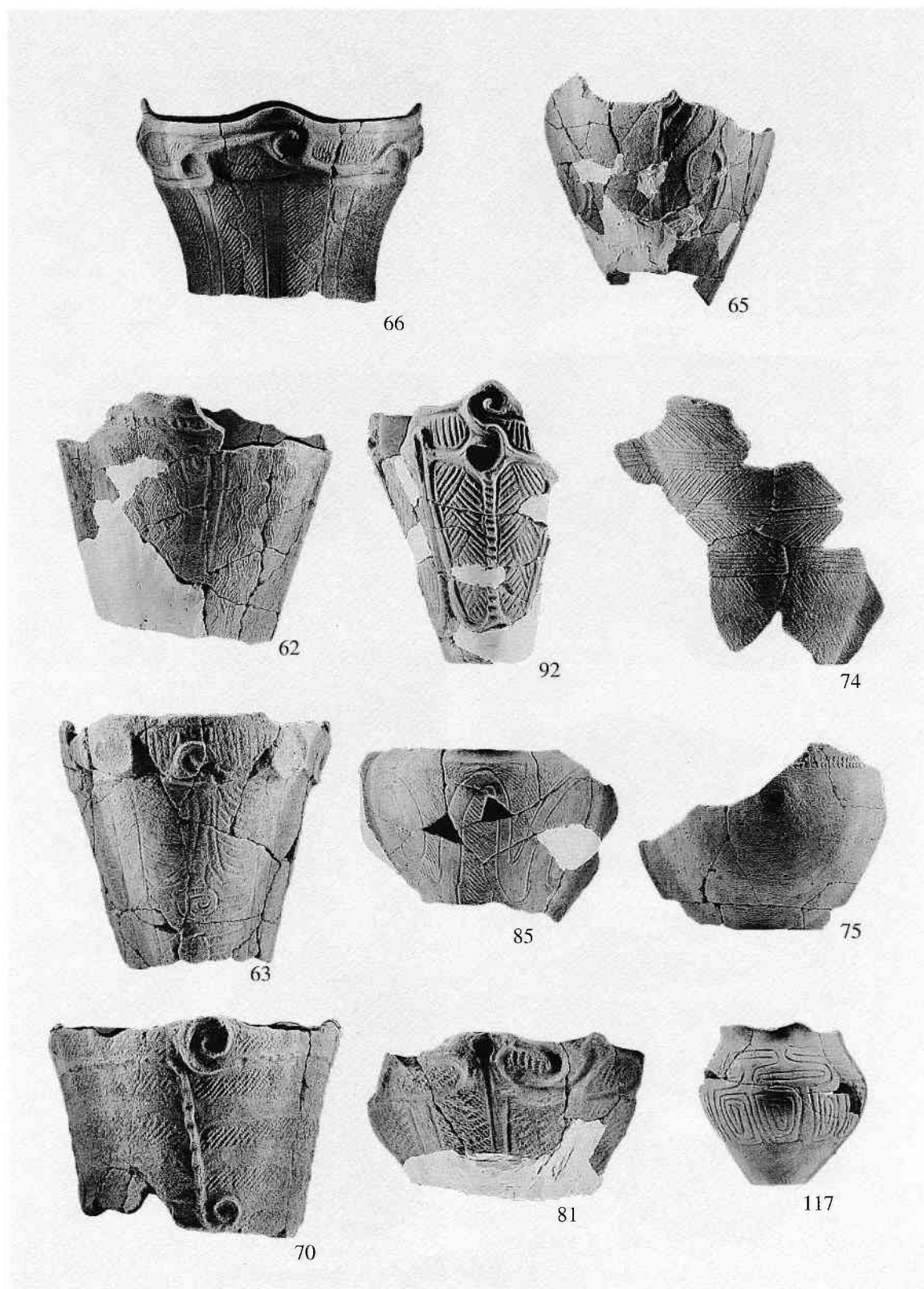
60



53

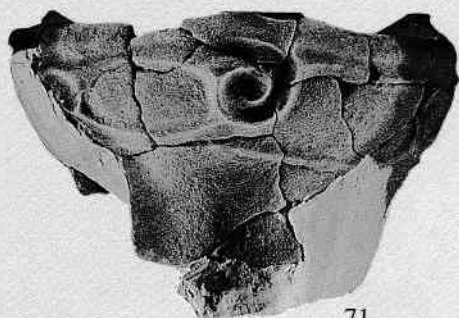


55

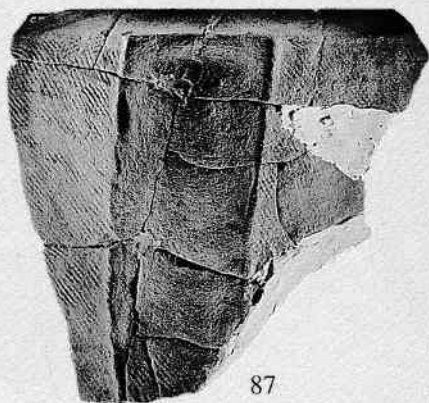




73



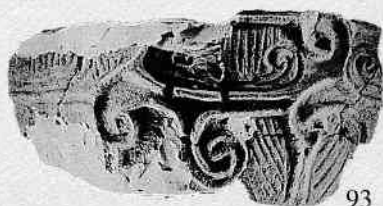
71



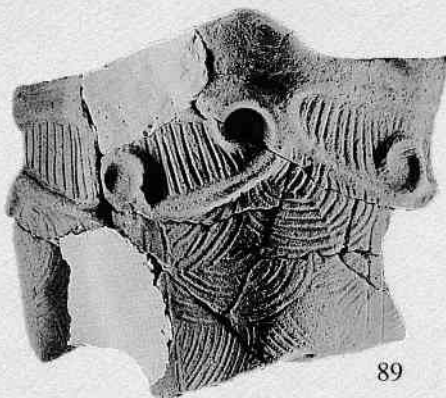
87



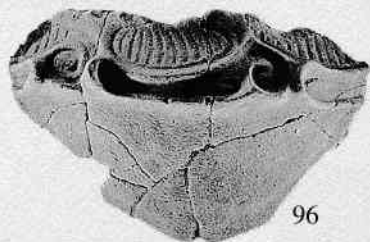
58



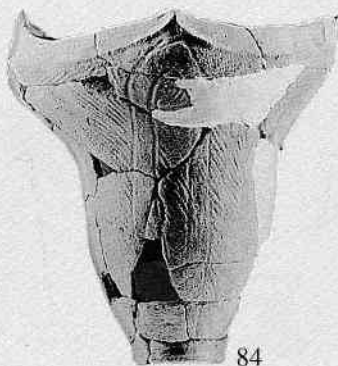
93



89



96



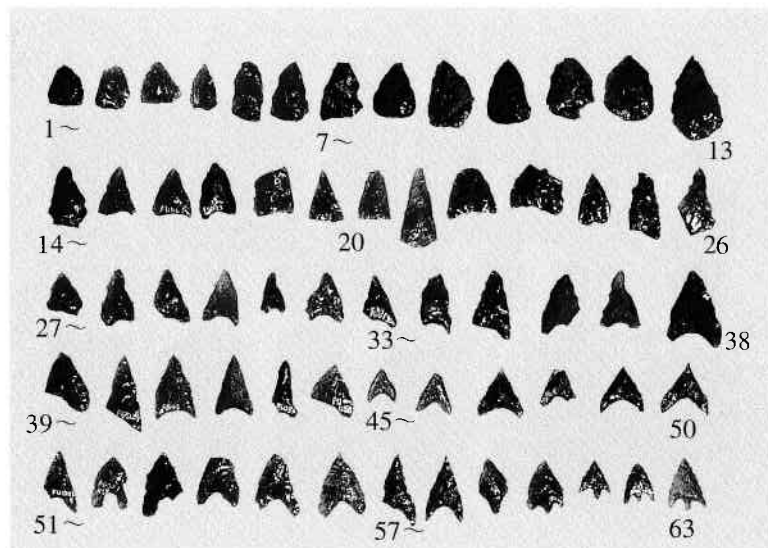
84



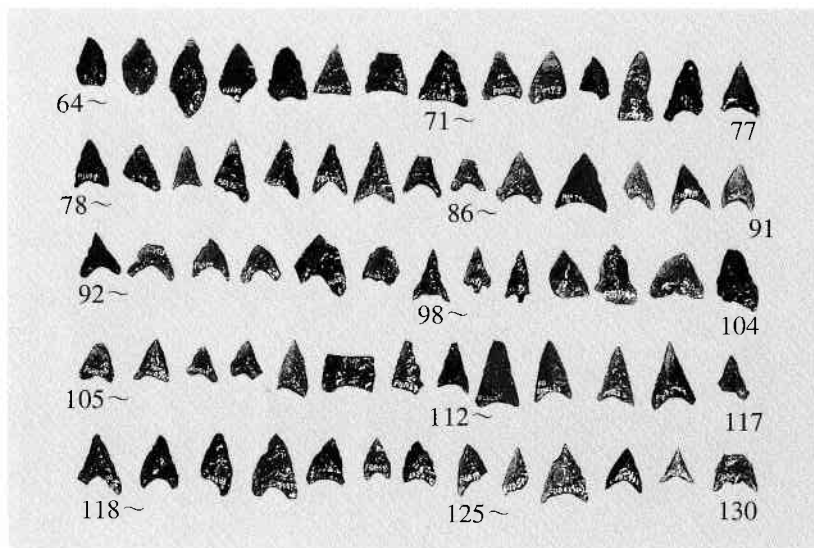
113



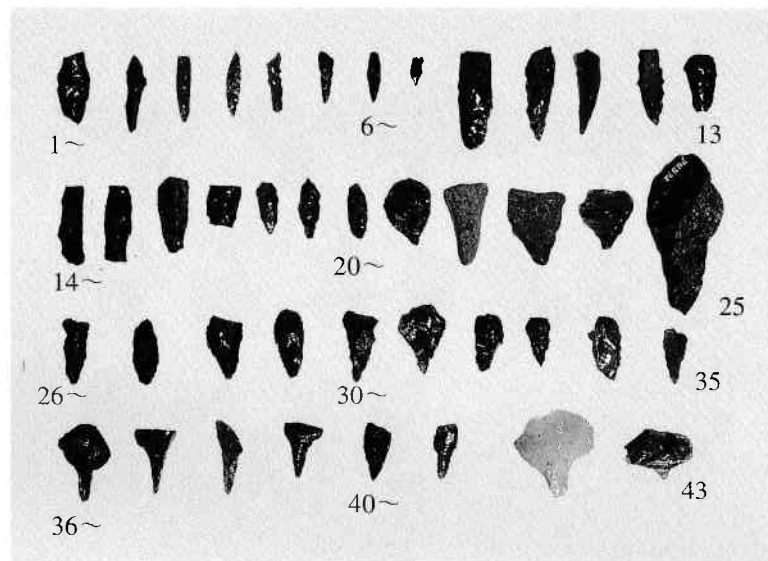
78



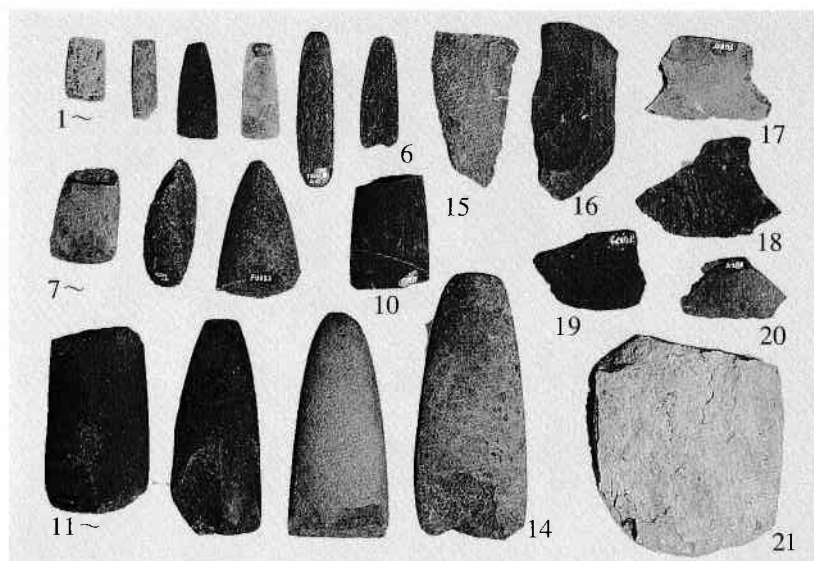
1.石鏃 (1)



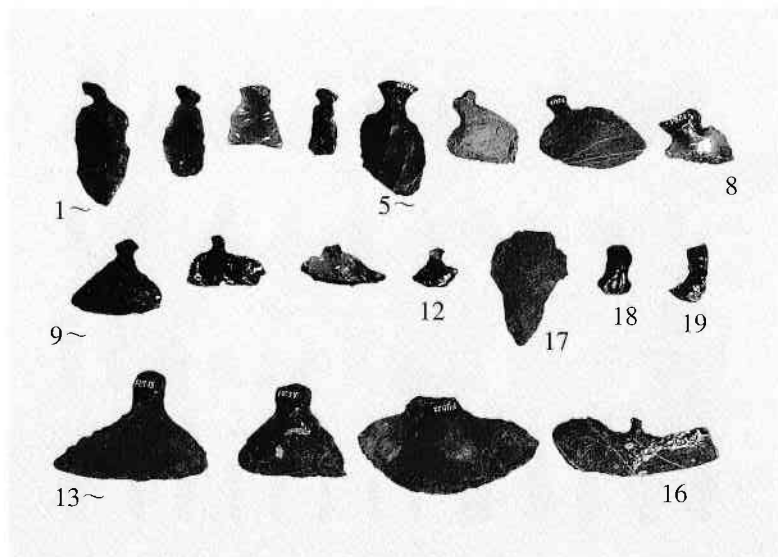
2.石鏃 (2)



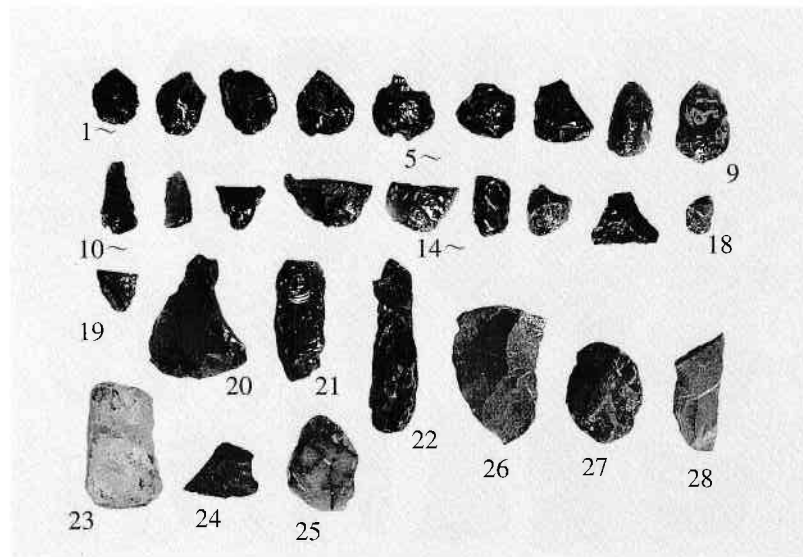
3.石鏃



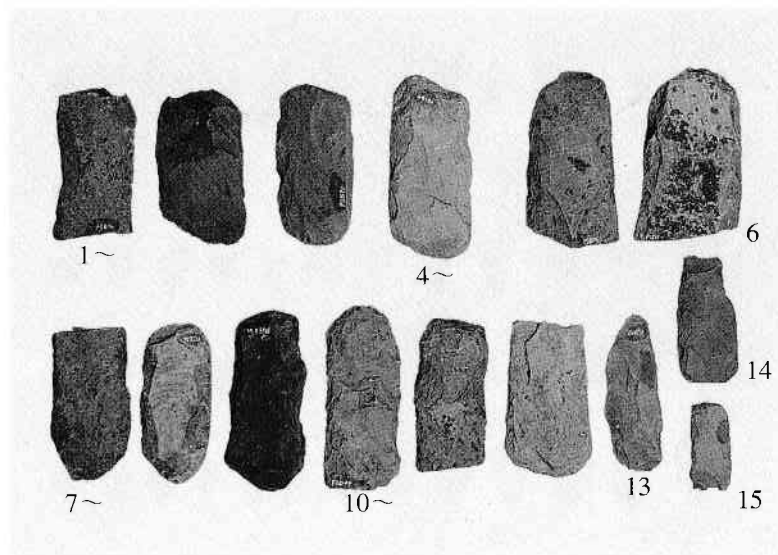
4.磨製石斧、大形刃器、礫器



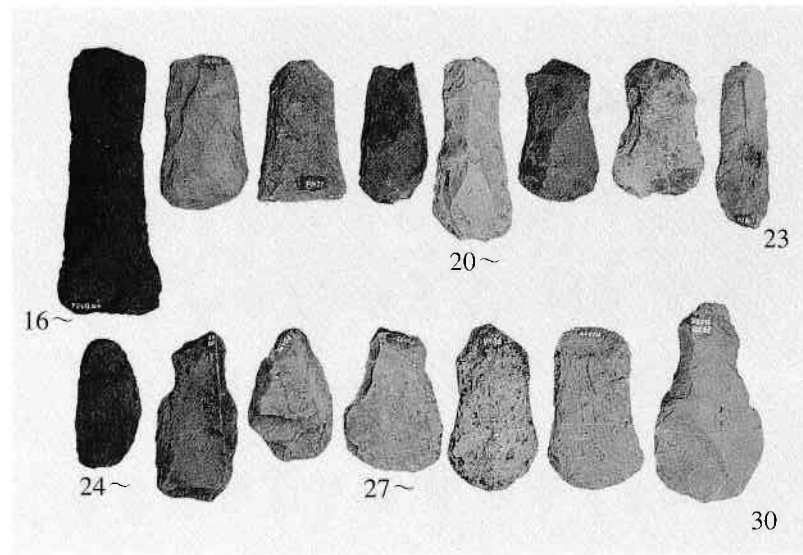
5. 石匙、その他



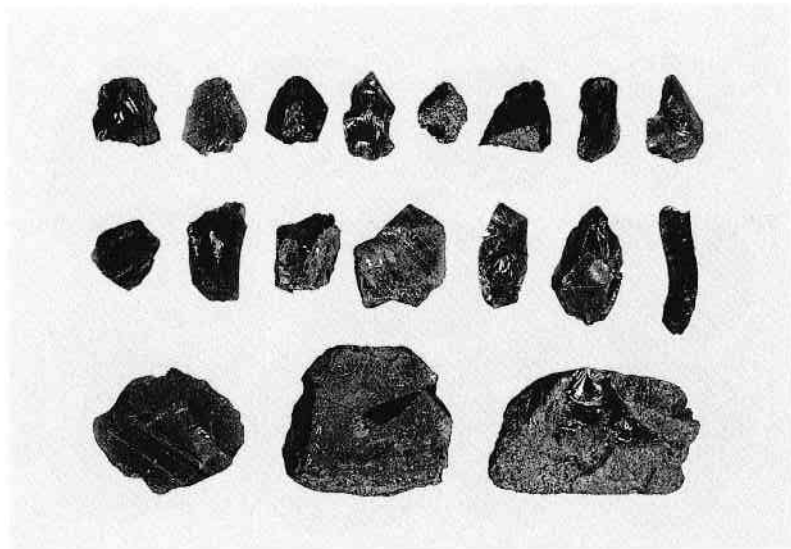
6. スクレーパー



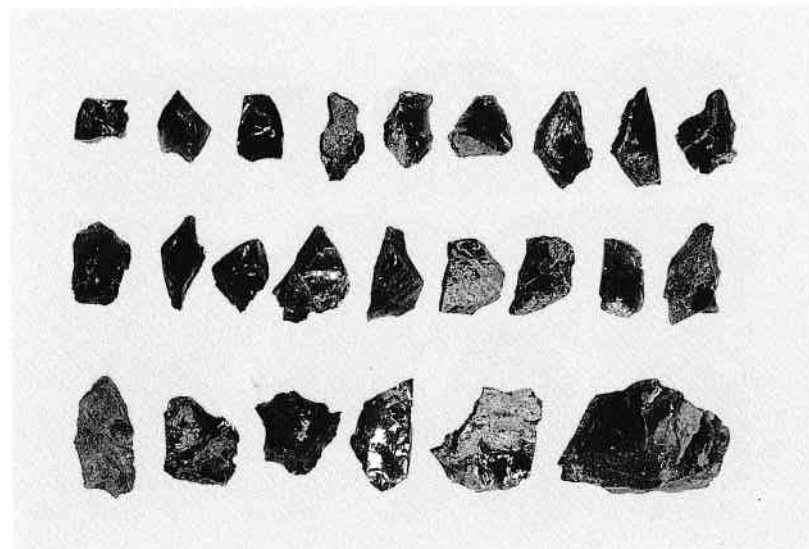
7. 打製石斧 (1)



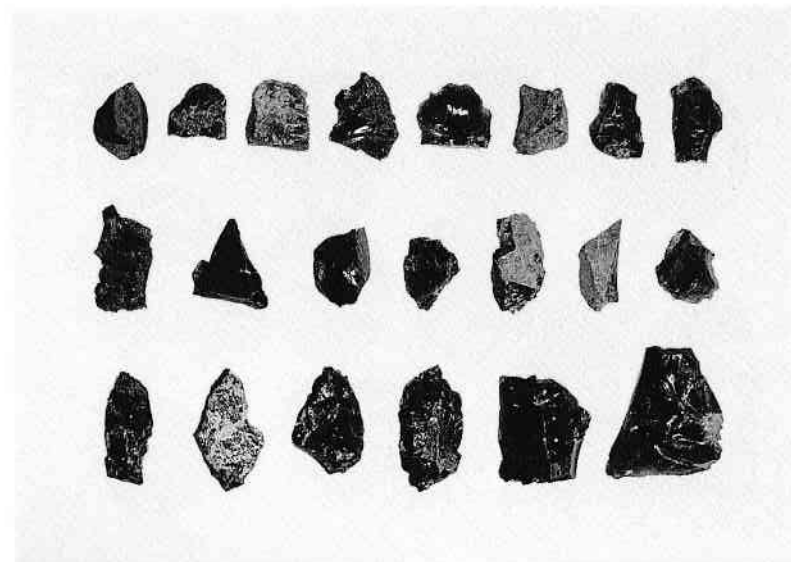
8. 打製石斧 (2)



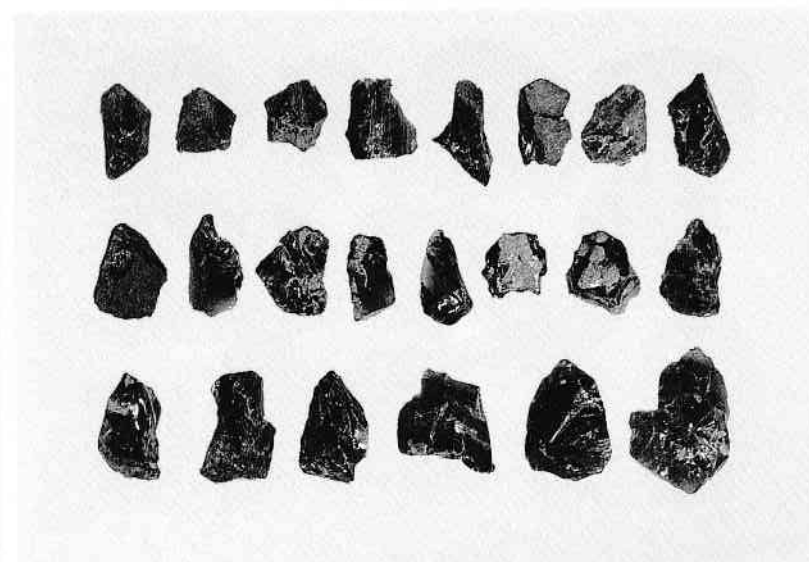
9. 黒曜石 (1)



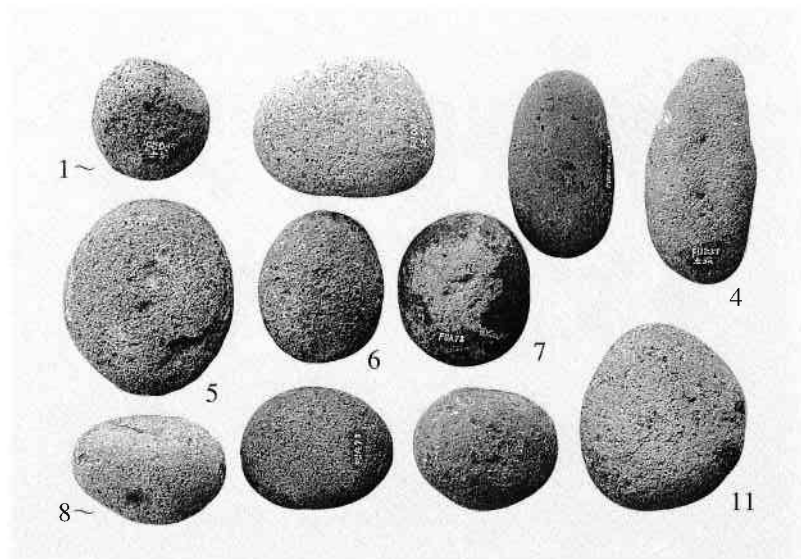
10. 黒曜石 (2)



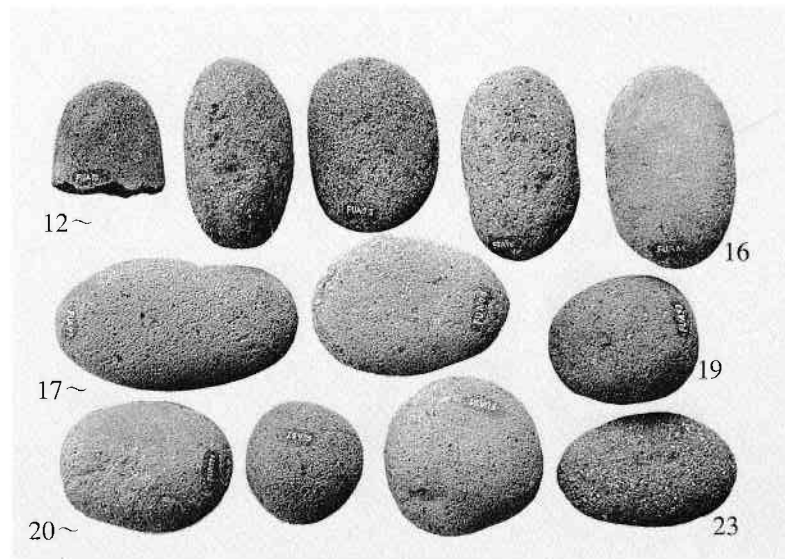
11. 黒曜石 (3)



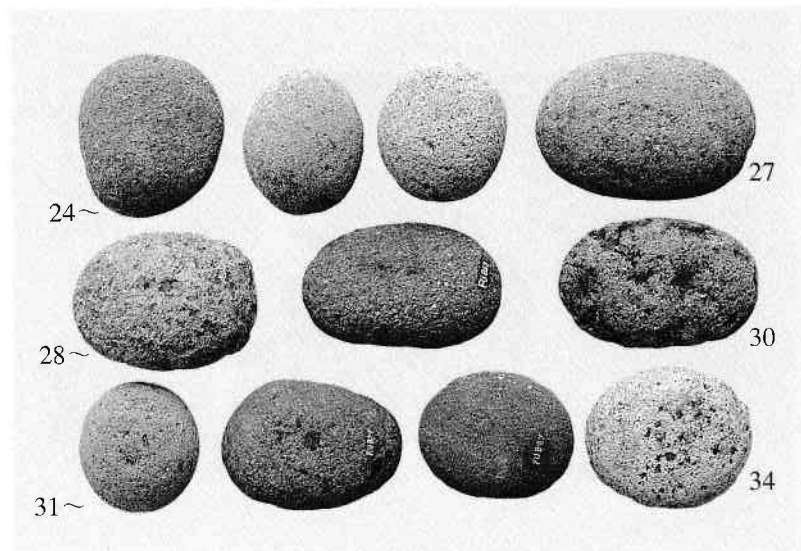
12. 黒曜石 (4)



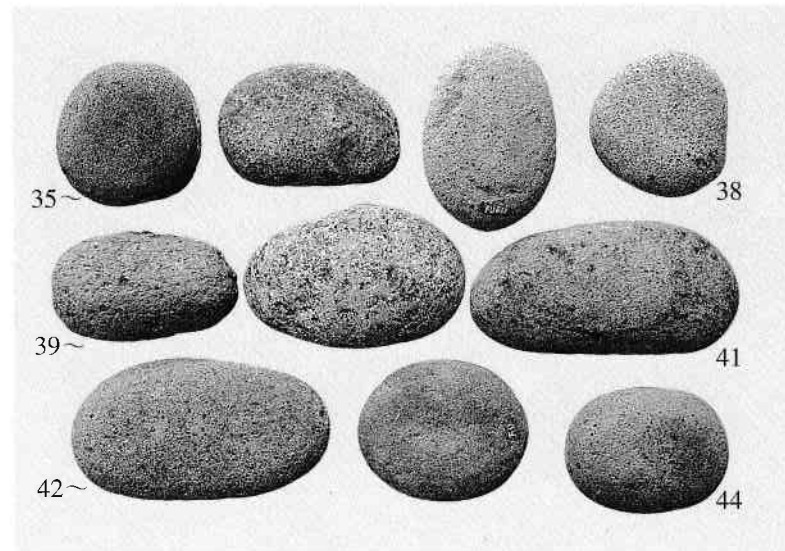
13. 磨石・凹石類 (1)



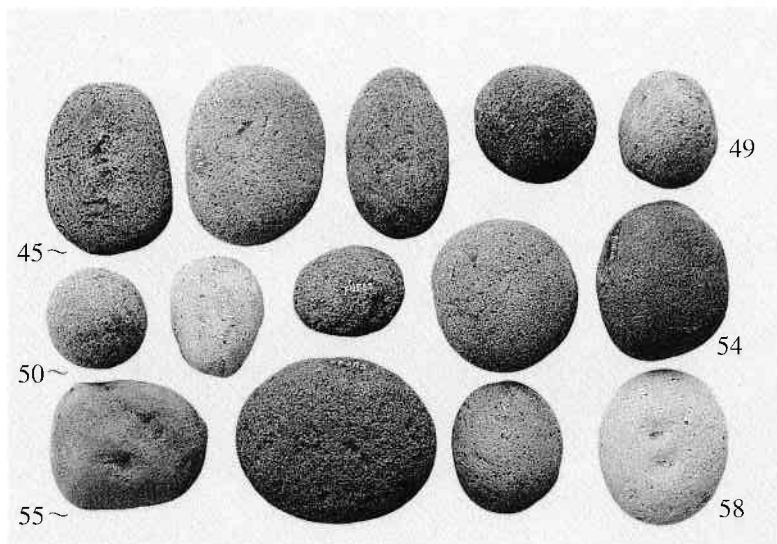
14. 磨石・凹石類 (2)



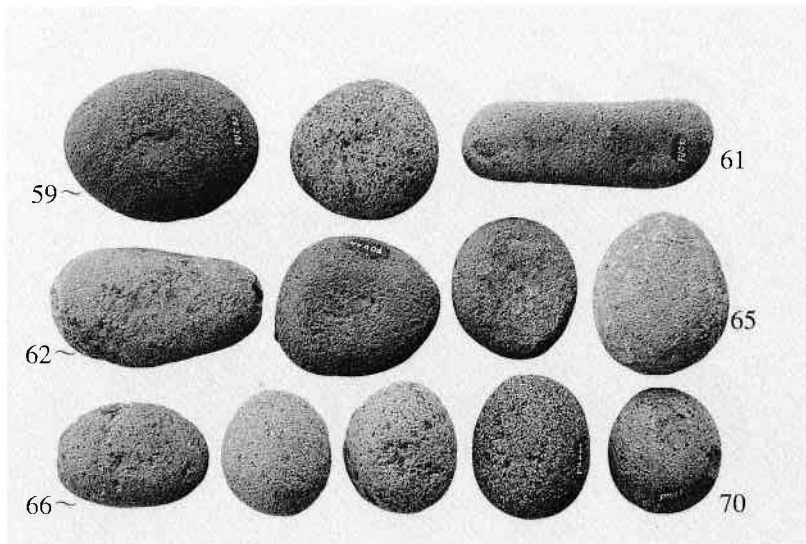
15. 磨石・凹石類 (3)



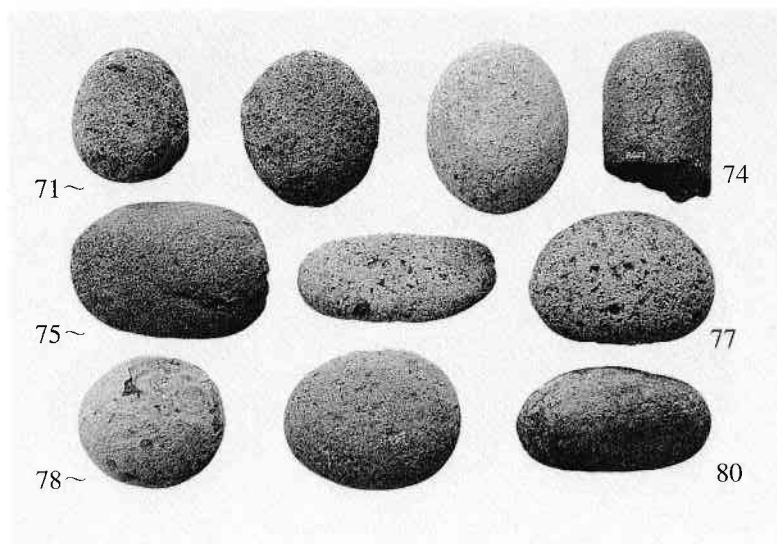
16. 磨石・凹石類 (3)



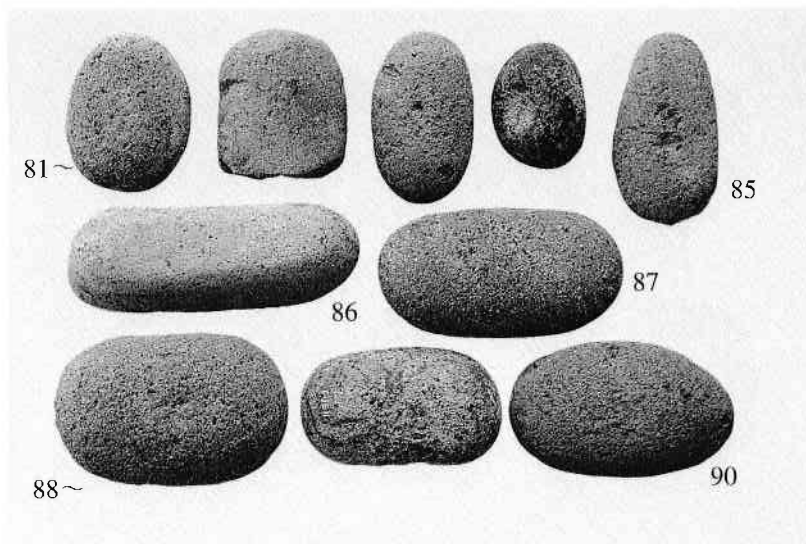
17.磨石・凹石類 (5)



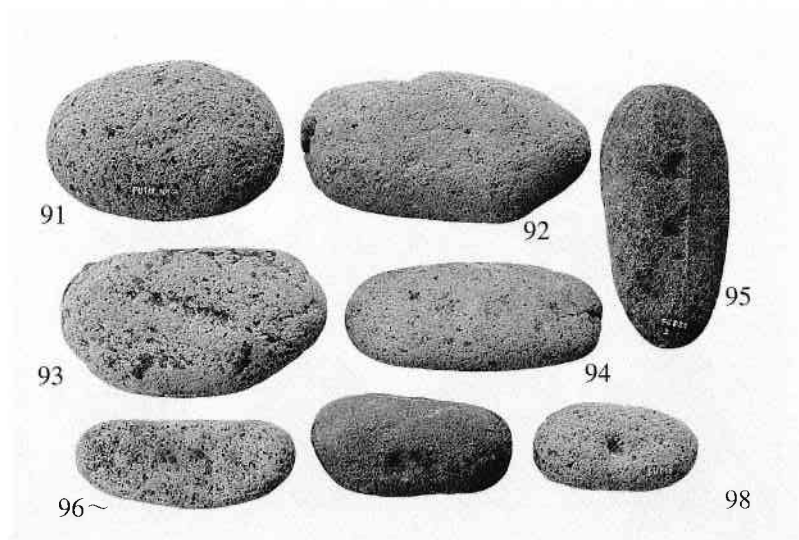
18.磨石・凹石類 (6)



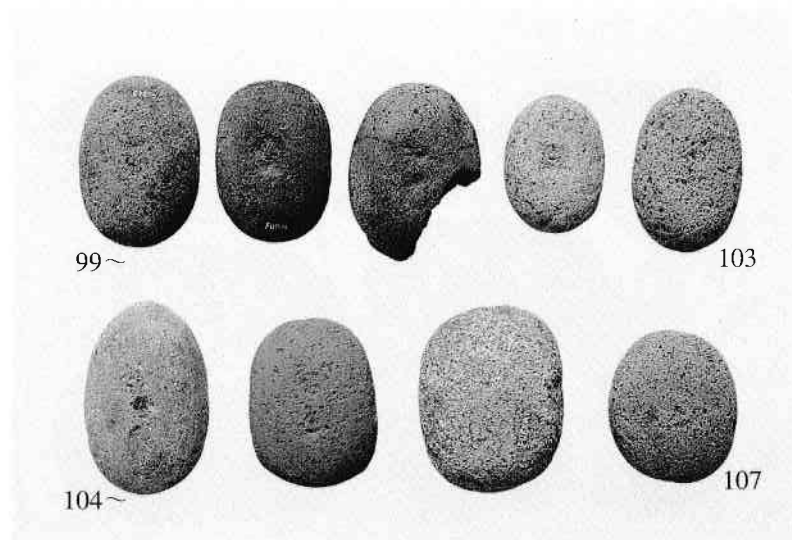
19.磨石・凹石類 (7)



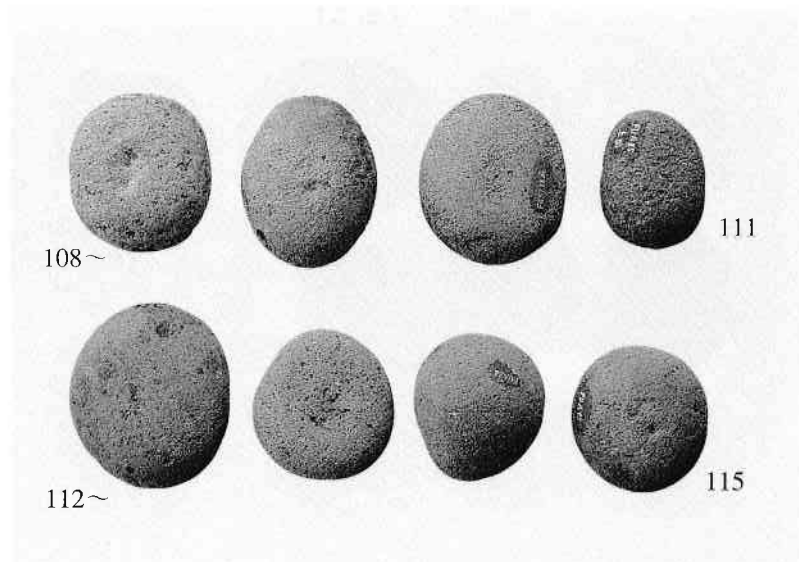
20.磨石・凹石類 (8)



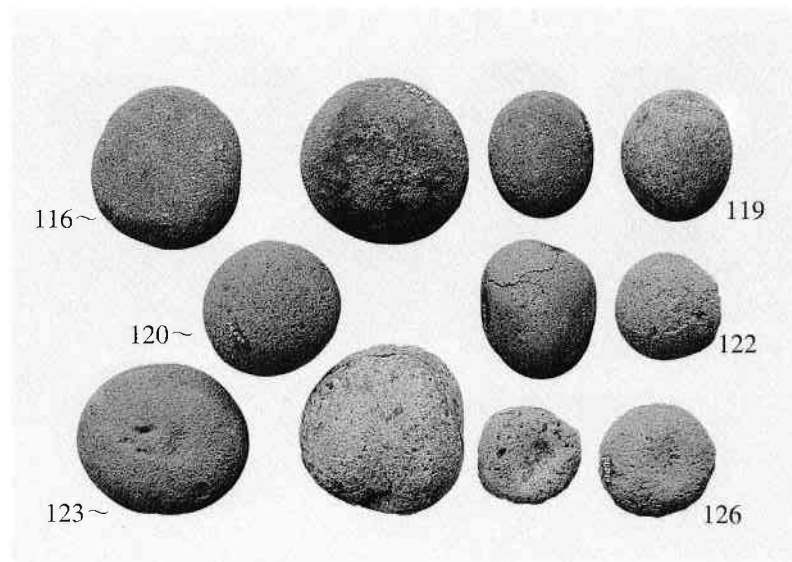
21.磨石・凹石類 (9)



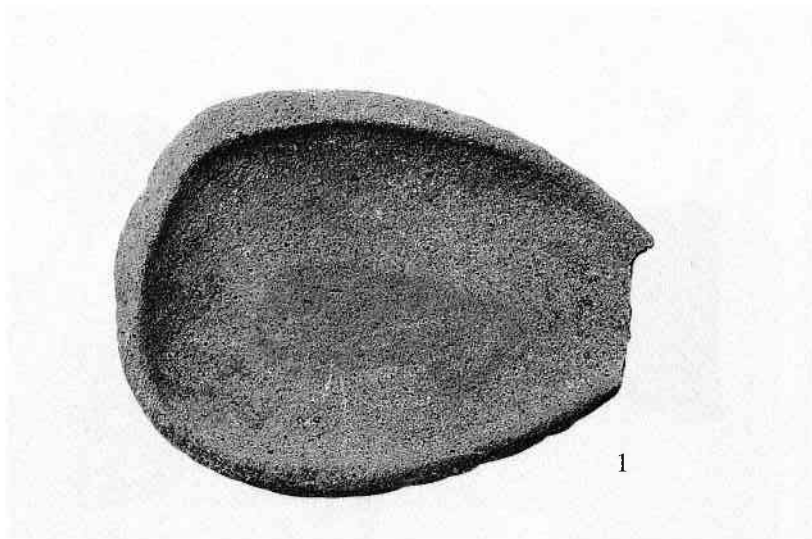
22.磨石・凹石類 (10)



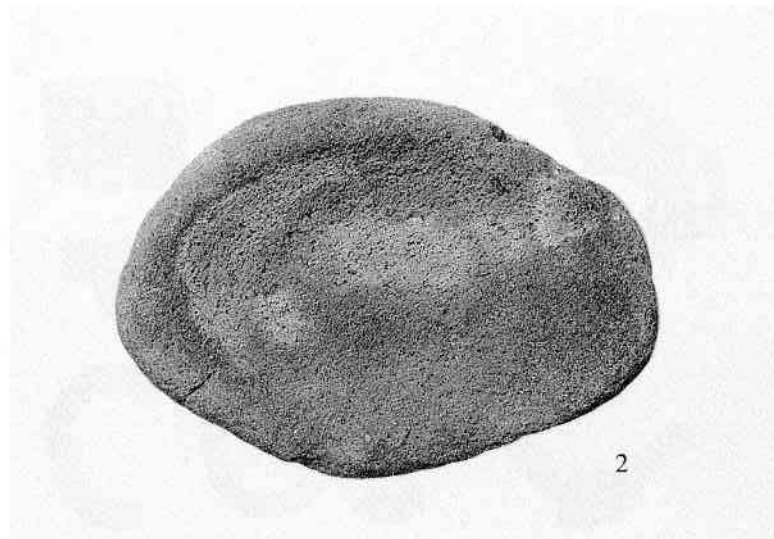
23.磨石・凹石類 (11)



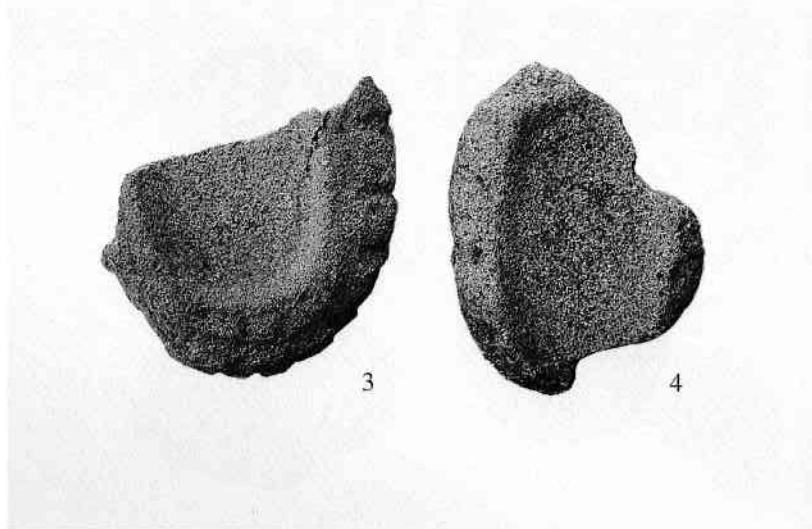
24.磨石・凹石類 (12)



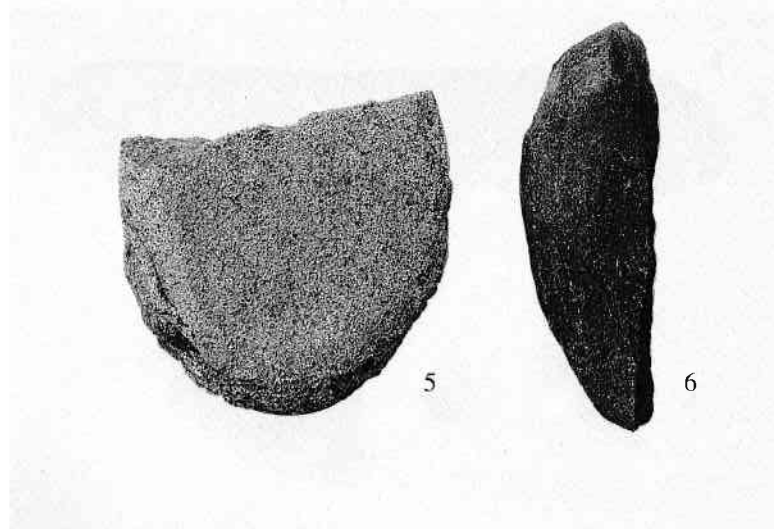
25. 石皿 (1)



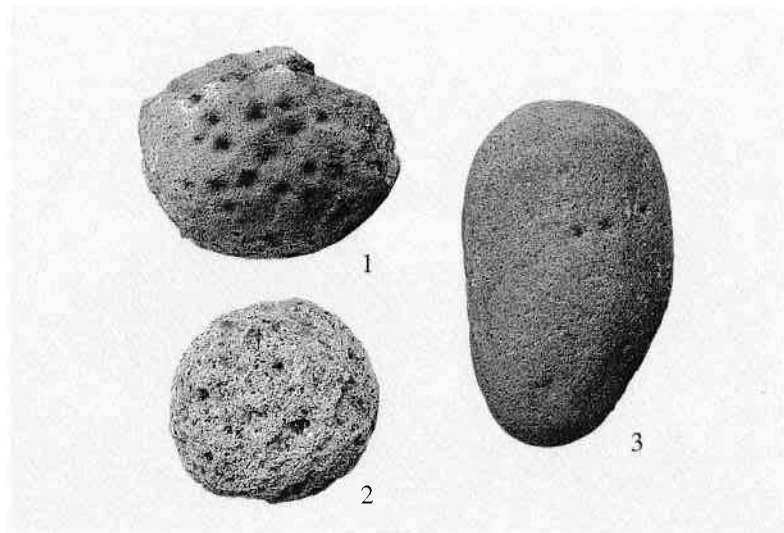
26. 石皿 (2)



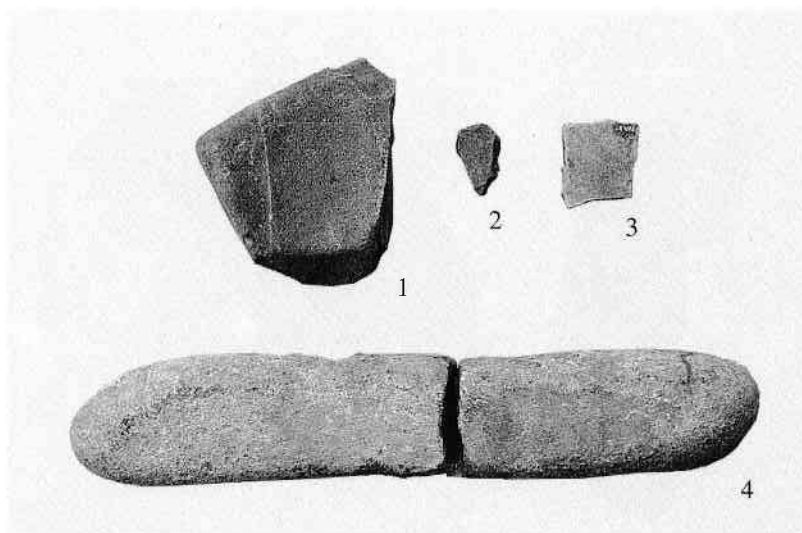
27. 石皿 (3)



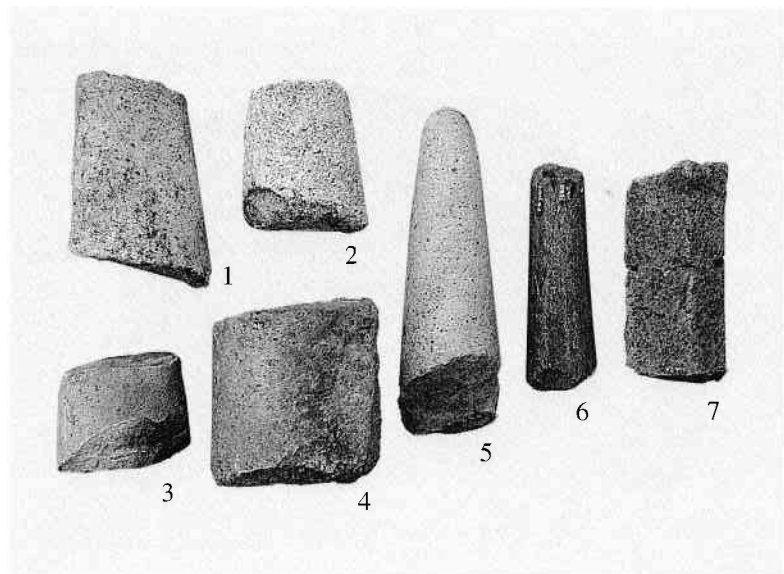
28. 石皿 (4)



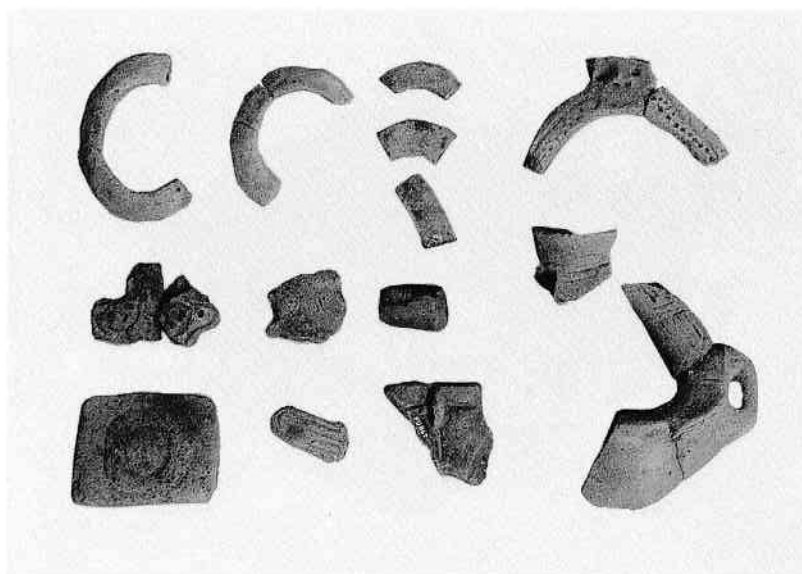
29. 多孔石



30. 砥石



31. 石棒



32. 土製品、釣手土器

湊ノ上遺跡Ⅱ

－長野県小県郡丸子町湊ノ上遺跡第2・3次発掘調査報告書－

平成6年3月15日 印刷・発行

編集 丸子町腰越地区埋蔵文化財発掘調査団

発行 丸子町教育委員会

〒386-04 長野県小県郡丸子町上丸子1592-2

TEL(0268)42-3147

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381 長野県長野市西和田470

TEL(0262)43-2105
